



独立行政法人
水産大学校
☎759-6595
下関市永田本町2丁目7-1
発行
学園だより
編集委員会
電話0832(86)5111

水産大学校の教育研究について

水産大学校理事長 二本菅善昭



本校は、前号でお知らせしましたが、平成十三年四月一日付けで、独立行政法人に移行しました。独立行政法人制度の詳細は、前号で紹介いたしましたので、ここでは割愛させていただきます。独立行政法人への移行に伴いまして、法律により、本校の長が、校長から理事長になり、理事長として私、三本菅善昭が農林水産大臣から任命されて、引続き本校の管理運営責任者の役割を仰せつかりました。よろしくお願ひ申し上げます。なお、法人の管理運営責任者である理事長の他に、高等教育機関である本校の教学責任

者として校長を置くこととしておりますが、諸般の情勢から、当分の間、理事長が校長を兼務することにしております。前号でご報告しましたように、旧水産大学校の業務は全て独立行政法人水産大学校に引き継がれ、学生は従来と同じく国の予算まで、国家公務員である教授等による授業を受けており、独立行政法人への移行後約一年が経過しましたが、特段の問題や混乱もなく本日に至っております。

他独立行政法人と同様に、独立行政法人への移行に伴い、本校は五年間毎に中期計画を定め、農林水産大臣の認可を受けて教育研究を実施することになりました。この中期計画に、国民に対して提供するサービス(本校においては教育研究)の質の向上のためにとるべき措置という項目があり、教育につきましては、(一)教育教育および専門基礎教育の強化、(二)学科の壁を越えた異なる分野の科目の選択制等による総合的な教育体制の強化、(三)

練習船による実習、情報化時代に対応したマルチメディア実習の重点的実施などを、また、研究につきましては重点事項として、(一)水産に関する学理及び技術に関する基礎的研究、(二)「水産基本政策大綱」等の行政ニーズ等に係る研究、(三)大学、試験研究機関等との共同研究をあげており、これらに積極的に取り組むことにより、時代のニーズに合致した、科学技術の最先端の研究教育を推進することとしております。

ところで、本校を卒業した学生が主に活躍する場である水産を取り巻く情勢は大きく変化しており、それに対応するため、国は昨年六月「水産基本法」を制定しました。この法律の主なポイントとして、(一)わが国排他的経済水域内の水産資源の適切な管理と持続的利用、(二)水産資源がうまれ育つ場である環境や生態系の保全への配慮、(三)安心、安全、良質な水産物を供給する等の消費者ニーズの重視、(四)経営の継続や発展の重視、(五)生産から流通まで一貫した整備、(六)海洋・水産の多面的機能の重視などがあげられます。本校は、これらを踏まえた教育を実施し、水産の将来を支える有為な人材を育てたいと考えております。

二十一世紀の人類の課題は、食糧問題と環境問題とされています。この二つの問題は、わが国において最も深刻になる可能性が高く、これを克服することは国家的な課題となっております。特に、四百五十万平方キロという世界で第六番目の広い

排他的経済水域に周囲を囲まれたわが国では、海から食糧を確保するとともに海洋環境を保全することは重要であり、そのための基盤となる水産及び海洋に関する研究教育の果たす役割は極めて大きいと考えます。本校は、海に関する諸問題に対処するとの視点で人材を育成しており、その役割は二十一世紀において益々重要になるとの確信のもとに、実学重視の伝統を踏襲しつつ、産業構造や社会ニーズ、科学技術の進歩に柔軟に対応できる創造性豊かな人材を育成するため、独立行政法人制度の利点を最大限に活かして、職員一同、従前以上の努力をしまして、変わらぬご協力とご支援を賜りますようお願いし申し上げます。

企画情報部の発足

企画情報部長 鬼頭 鈞

本校が平成十三年四月一日より、農林水産省所管の特定独立行政法人に移行したことは、皆様によくご存じのとおりであります。独立行政法人への移行後の変化に関しましては、昨年三月発行の本誌において、三本菅校長(現理事長)が詳しく述べております。特徴として、国から中期目標が定められ、これを達成するための年度計画と中期計画を作成する必要がありますこと、また、毎年および中期目標の最終年に、目標の達成状況を報告し、農林水産省に置かれた評価委員会の評価を受け、公表することが義務づけられていることが述べられています。

独立行政法人になりまして、毎年毎年、大学の総てに関する年次計画を作成し、主務官庁に提出すると共に、年度の終わりには実績を報告して、評価を受けなければならぬわけですね。この作業は膨大なものであります。特に初年度は全ての様式を新しく作ってゆかなければなりません。まず何よりもこの滑り出しの作業をスムーズにこなし、独立行政法人としての運営を軌道に乗せる必要があります。

また、独立行政法人は効果的で透明性の高い機関運営が義務づけられております。具体的には学生のための就職対策や教育研究の充実、国民へのサービスなどが強く求められます。

中期計画の中には、大学自身で自己評価をすること、行政ニーズ研究を充実させ、受託および共同研究を進めることなどが示されています。また、図書館や標本館も外部利用を前提として、そのマニュアルを作ることが掲げられております。

このように、新しく取り組まなくてはならない業務が沢山ありまして、それらをスムーズにこなすために、企画課が新設されました。この課と従来から図書館運営を担当していた図書課およびネットワークシステムを集中管理していたマルチメディアセンターを合わせまして、二課、一センター体制の新しい部、企画情報部が立ち上げられました。企画課には課長以下事務官四名、図書課には課長以下事務官三名、センターは以前と同じで併任教員一名が配置されました。また、

以前は標本館の運営を併任の教官が標本課長として担当しておりましたが、独立行政法人になりまして、プロジェクト研究への取り組みや外部との研究交流を充実させることが重要となり、この標本課長のポストを新しく企画調整官として、仕事の内容も一新させその任にあたるよう変更致しました。企画情報部長のポストは、以前の図書館長をあてたものでして、教員の併任です。以上新設されました企画情報部は事務職員七名、併任教員三名からなる、沢山の新しい仕事を抱えた大忙しの部です。

特 集

オープンキャンパスに バス二台の参加者

オープンキャンパス実行委員長
浜田 盛 承

高卒者の数が急速に減少し、一方では高卒者の進学率が上がる(五十%の進学率)中で、高卒者の全員が大学に進学できる状況が目前に迫っています。したがって、いずれ学生が集まる大学とそうでない大学に二極化してくるでしょう。後者はいずれ廃止の道を歩かざるを得ません。そこで各大学は生き残りをかけて学生の獲得に必死となつています。水大も人ごとどころではありません。しかも独法化水大ではこのことは重要なポイントとなります。そこで水大でも遅ればせ

ながら、今年が初めてのオープンキャンパスを開催することになりました。まずは当日の動きを見て、説明いたしましょう。

夏休みも終わりに近づいた八月二十六日、朝十時前体育館前に大きな赤いバスが着いた。J R 下関駅から学内見学の高校生を乗せたバスだ。出迎えのJ 学生課長がカニの大きな目玉が付いたヘルメットを被って、正門の前で旗を振って出迎えている。あれは何だと受験生が顔を向けている。窓越しの顔がほころんだ。新下関から出発したもう一台のバスも遅れて着いた。今度はY 係長が出迎えている。

先ほど笑っていた高校生がバスから物珍しげに出てきた。緊張の解けた顔だ。その後からは小さくなってかしまったお父さん、お母さんが未だ緊張して出てきた。暑くまばゆい陽を浴びて、窮屈な席に押し込められていた体を伸ばしている。

水大では初めてのオープンキャンパスのためか、「会場はこちらですよ」と案内する実行委員会メンバーの声と態度がぎこちない。「お客さん」を会議室に通して静かになったのが十時前。参加者を数えてみると、学生が五十九名、親御さんが二十八名だ。予想以上の数だと学生部長の弁。例年の本校見学者は約四十人と聞けば、その理由も分かるというものだ。

「お待たせしました」とU 係長。三本管理理事長から歓迎の挨拶、担当者から配付資料の説明、学生部長の学校全体並びに学科の説明と続く。誰かの熱が入りす

ぎて予定時間を少しオーバー。予定の十一時を過ぎて、校内見学の引率に回った教務課長の足がいつもより早い。長く伸びた列の後ろには、汗の吹き出した顔が続く。

昼食を挟んで十三時から参加者全員が公開講座に参加。こちらはT 先生が委員長を務める公開講座実行委員会の企画だ。場所は真新しい共同実験棟の四階、多目的ホール。公開講座の話だけを聞きに来られた一般市民も多数参加している。オープンキャンパス参加者はトップバッター竹下講師の「海と川で生活する魚の不思議な話」だけを聴き、退室となる。一階のロビーに降りると、各学科の委員が学科案内のために、見学者を引き連れて戻っていく。参加者の希望とは言え、学科によって人数が多かったり少なかったりするのを見ていて辛いものだ。

第一希望の学科見学を約一時間で終え、次は第二希望学科の見学。各学科では教育・研究を通してどのような人間を育てるかの説明、模擬実験などが行われた模様だ。十六時には参加者全員が最初に集合した部屋に集合。休む間もなく見学者にはアンケートの用紙が配られる。疲れた顔も見え、緊張しているから筆も動くと思える。

お疲れの参加者をクローラーが効いたバスが待っている。お土産をもらってバスに急ぐ足は軽い、別れの挨拶をする参加者はいささか疲れているようだ。実行委員二人が今朝出発してきた駅まで見送りをするために分乗。十六時過ぎ、バス

は名残惜しそに校門を出て行った。実行委員の耳に「また受験に来ますね」という声が聞こえたのは空耳ではあるまい。

初めてのオーブンキャンパスには参加者も予想以上で、トラブルもなくスムーズに進行しました。参加者の多くは福岡、山口、広島各県からでしたが、遠くは関東、北陸、四国からの参加もありました。参加の印象としては「もう少し実験をしたかった」、「いろいろな設備があつて水大に興味を持てた」、「在校生が楽しそうで、是非受験したい」、「海に囲まれた環境が良かった」、等々でした。

しかし、受験生は複数の学科をゆつくり見て回りたいかつたようですので、来年はこのような要望に応える体制を作つていく必要があるでしょう。一方学生生活は授業・研究ばかりではありませんから、在学生からみた学校案内というのも考える必要がありそうです。

受験生に対して大学が教育の理念や目的、研究内容などについて説明し、キャンパスの雰囲気や肌身を感じてもらつて受験や進路選択の際の参考にしてもらうというのがオーブンキャンパスの目的ですが、来年度入試にいささかでも役に立つことを実行委員会全員で願っています。

今、水大の公開講座が

おもしろい

公開講座委員長

高橋 幸 則

本校の公開講座は、水産業を営んでお

られる方、その後継者の方および地域の市民の方々を対象に、先生方が日常行っている研究の成果をわかりやすくお話しすることによって、水産業の発展に寄与し、水産に対する理解をこれまで以上に深めて戴くとともに、地域の方々により密接な良い関係を築くことを目的としています。

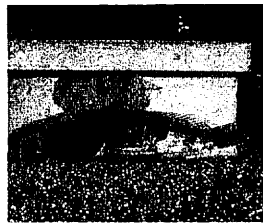
本年度の公開講座は、八月二十六日に「水産おもしろセミナー 海：その大きな可能性を求めて」と題して、生物生産学科の竹下直彦先生、食品化学科の鈴木喜隆先生、海洋機械工学科の中岡勉先生の三名の先生方による講演が行われました。本年度は、百四十七名の方々にご参加を戴き、出席者から、「カマキリの話は大変おもしろかった」、「魚を食べると健康になる話は大いに参考になった」、「海から電気が作れる話は初めて聞く話なので興味深かった」などの感想が寄せられました。三名の研究の達人の講演内容は次のとおりです。

① 海と川で生活する魚(カマキリ)の不思議な話

生物生産学科講師 竹下直彦先生

カマキリという魚は、普段は河川で生活し、産卵のために海へ下る淡水カジカ類の一種です。一九九六年から三年間に亘つて、島根県の江の川河口とその隣接沿岸で観察したカマキリの産卵行動は、次のようなものでした。まず、雄が巢の中に入って胸鰭で中の砂を掻き出し、繁殖のためのなわばりを形成します。雌が近づいてくると、雄は口を大きく開いて

鰭を広げ、徐々に接近して雌にかみつきます。そして、雄が巢の中に戻つて再び大きく口を開いて全ての鰭を広げますと、雌が自ら巢の中へ入り込んで、腹部を上にして横たわります。雄が雌に体を繰り返して押しつけると放卵と受精が行われます。江の川河口周辺海域では、毎年一〜四月に七〜十九mmの仔稚魚が観察され、その稚魚たちは、やがて河川を遡上しながら成長していくのです。



② 魚を食べると健康によいってホント!

食品化学科教授 鈴木喜隆先生

地球上の生物の先祖は、全て海の中で生まれました。そのために生物は、海水の成分組成を体の成分として受け継いでいるのです。陸地は、雨水によって水に溶けるもの全てが洗い出されて永い年月の間にしゃぶりカス同然となつてしまい、陸地で育つた植物や、それを食べて大きくなった動物の肉ばかり食べていると、本来必要であるはずの微量成分が不足しがちになります。日本人は昔から、ミネラルを豊富にもつ海の魚介類を食べて不足しがちな成分を補っていました。最近ではこれらのものを食べなくなり、カ

ルシウムや微量元素の摂取量が激減することになりました。さらに、リン酸を多く含むドリンク類や獣肉類をたくさん飲食することによって、ミネラルの排出が促進されるために、ミネラル不足が益々深刻になっていくのです。

③ ホント?海から電気が作れるの?

海洋機械工学科教授 中岡勉先生

海洋温度差発電とは海水の温度差を利用して発電するシステムです。考え方は原子力や火力発電と基本的には同じですが、海洋温度差発電がそれらと違うのは、熱源に海水の温度を使うこと、アンモニアやアンモニアと水の混合物を蒸発させ、その圧力でタービンを回転させて発電する点です。作動流体を蒸発させる装置は蒸発器と呼ばれ、熱源には二十〜三十℃の表層の海水を使います。アンモニアの沸点は約マイナス三十三℃。温かい海水でも沸騰し、蒸気になります。タービンを回転させた蒸気は凝縮器で冷却され液体に戻り、再度、蒸発器に送られます。このようにして、海洋の熱エネルギーを有効に利用することにより電気を作ることができるのです。

これまで、本校の先生方は、日常の研究成果を学会や学会誌に発表してきましたが、水産業を営む方や市民の方々に直接お話しする機会は少なかつたように思います。しかし、本校が水産業の発展を目指した教育と研究を遂行する機関である限り、研究成果を水産関係者や市民の方々にお話しし、役立てて戴くことが必

要であると思います。本校は、これからも世界的視野に立つた研究を展開しながら、公開講座などを通じて、その成果を水産業を営む方や市民の方々に広く還元していかなければなりません。

第五回水産大学校・南太平洋大学 水産・海洋共同調査に参加して

生物生産学教授 上野 俊士郎

二〇〇一年十一月三十日(金)午前十一時過ぎ、熱帯の日射に白い船体をまぶしく輝かせながら耕洋丸はスバ港岸壁に着岸した。耕洋丸のスバ(フィジー諸島共和国の首都)寄港の目的は、フィジーの漁業振興のための基礎調査として、十二月四日から八日までの五日間、スバ市に本拠地を置く南太平洋大学の教職員及び学生など計十三名を乗船させ、フィジー水域内において海底地形・海洋学的構造、海水と海底泥中の微量成分、稚仔魚・プランクトン及び漁業に関する共同調査を実施することである。この共同調査は、一九九六年から毎年十二月初めに実施され、二〇〇〇年はフィジー国内で起きたクーデターにより国内治安の悪化が危惧されて実施を見送られた結果、今回は第五回共同調査となった。本調査の立ち上げから第四回まで、海洋生産管理学科の須田有輔助教(魚類学専攻)が本共同調査を担当していたが、フィジー海域の多彩な生物に対応するために今回から専門分野が異なる私(浮遊生物学専攻)

が担当することになりました。



共同調査の日程は以下の通りです。

- 十二月四日(火) 耕洋丸スバ出港
 - 十八時過ぎ ビチレブ島西沖海域(水深五百~二千m)の五調査点で海洋調査(CTD観測、ロゼット採水器による深度別採水、海底泥採集、表層稚魚ネット採集、五十m IKMTネット採集)開始
 - 十二月五日(水) 十九時過ぎ 同調査終了
 - 十二月六日(木) 八時過ぎ ビチレブ島西沖海域(水深五百m前後)で漁業調査(底釣り、がご漁)開始
 - 十二月七日(金) 十六時 同調査終了
 - 十二月八日(土) 十三時 耕洋丸スバ入港
- 前回まではビチレブ島南東沖海域で調査が行われ、多量のネット試料が得られた様子ですが、今回のビチレブ島西沖は生物生産性の低い海域のようで、試料が少ないのが印象的でした。それでも、I

KMTネットによりイセエビ類のフィロゾーマ幼生が二十数個体も採集され、また底釣りでは1m以上の大物の魚も含めて数十個体釣り上げられ、かご漁では三十数個体のオウムガイまで捕獲されました。これらのことは本調査海域に未開発の資源が眠っていることを示唆するものです。また、表層稚魚ネットでの研究対象の大型立方クラゲが四個体も採集できたことは本場にうれしいことでした。今後このような形で、すなわち本校練習船を使用してフィジー領海などの海洋・水産共同調査を地元大学の研究者と行うことを積極的に実施していきたいと思っています。

第七回水産大学校

釜慶大学校学術交流

懇談会を終えて

実行委員長 奥田 邦晴

毎年行われております韓国の釜慶大学校との学術交流懇談会は今回で七回目となりました。この交流懇談会は交互に訪問し合うことになっており、この度は十一月十四日(水)から十六日(金)まで理事長、国際交流委員長、各学科から一名ずつの計七名で釜慶大学校を訪問しました。交流会の実施に際しては、受け入れ側の入念な準備が必要です。そのため、九月から釜慶大学校の窓口である張榮振先生とメール交換して準備を進めていきました。訪問する側の主な準備としては航

空券予約やシンポジウム用の講演要旨などの送付をすればよいのですが、受け入れ側の準備は三日間の分単位のスケジュールの作成、会場設営、パンフレット作成、翻訳、広報、接待準備等々、数え上げたらきりがありません。釜慶大学校側の入念な準備についてはただただ感謝するばかりです。

釜山の空港に着くと、大勢の先生方の出迎えを受け、私たち全員に花束が贈られました。これから交流が始まるという少し高揚した気持ちにさせられる出来事でした。その後、歓迎会が催され自己紹介などを通して交流を深めていくことが出来ました。翌日は釜慶大学校の国際会議室にてシンポジウムが開催され、釜慶大学校校長の歓迎の辞、本校理事長の訪問の辞に始まって、本校各学科から一名ずつ計五編の講演を行いました。傍聴席には学生も多く見られ、大学院の学生からの質問もあつて盛会に終えることが出来ました。その後は釜山の見学、懇親会などが行われたのですが、常に釜慶大学校の先生方が同行され、丁寧な説明もあつてまさに交流の目的を果たしていると感じ入った次第です。

一回目の交流会から講演内容は冊子としてまとめられ、実質的に実りあるものとして釜慶大学校側でも評価されており、今後とも引き継がれて新たな共同研究への発掘材料にもなれば、益々発展していくものと確信します。

この交流会の開催に際しては、訪問する側も受ける側も多くの方々の協力が

あつて順調に遂行することが出来ました。お礼を申し上げます。
最後にになりましたが、この交流会が水産大学校後援会の御援助で成り立っていることに深く感謝いたします。



(墓参航海一覧表)

回	本校実施年	練習船	墓 参 場 所
1	昭和39年	天鷹丸	洋上
2	平成 4 年	耕洋丸	国後島
3	6 年	天鷹丸	多楽島・国後島
4	8 年	耕洋丸	志発島・色丹島・国後島
5	9 年	耕洋丸	択捉島・国後島
6	11年	耕洋丸	択捉島・国後島
7	13年	耕洋丸	色丹島・志発島・国後島

在に至っている。地元北海道では新聞報道等マスコミにより北方領土墓参が一般庶民にも広く知られているところであるが、他の地域においてはいつどの様に実施されているか知る人は少ない。

北方領土墓参航海

耕洋丸首席一等航海士

水 谷 壮 太 郎

本校練習船による北方領土墓参は昭和三十一年に先代天鷹丸によって始められ、本年度平成十三年で七回目となる。一回目の目的地は水晶島及び色丹島であったが、上陸が許可されず洋上墓参にとどめられたと聞いている。その後、ソビエト(現ロシア)側の了解が得られなかったため、十数年間墓参を断念せざるを得なかったが、昭和六十一年に再開され現

北方領土墓参渡航経費の予算化に難渋を示している財政当局は、広範な戦後処理経費への波及を恐れ、その代替措置として行政官庁所有船舶(練習船)の便宜供与を行うこととなったわけである。本校練習船の墓参航海もこの経緯に沿って内閣府からの依頼によって実施されている。本校練習船では、本年度八十三名、これまでに延べ六百十一名の遺族及びその関係者を運搬したことになる。
航海は気候が最も安定し波が穏やかな八月下旬から九月初旬に限定されている。しかし、この時期は根室地方を中心に濃



霧が発生することが多い。花咲港ではサンマ漁が始まり荷揚げや燃料・水などの補給のためサンマ漁船が朝夕を問わず頻繁に入出入りする。本年度は花咲港入港時濃霧となり僅か数十メートル先の漁船が視認できず、窓・扉を開放して汽笛信号に耳をそばだてながらレーダーを頼りに操船する船橋は緊張感が溢れる。霧が薄らぎ視界がひらけホッと一息する。また湾内に錨泊した本船から各島に墓参団を上陸させるため、ロシア側の解あるいは花咲港からの随伴小型漁船を使用する。その場所では風がなく波が穏やかでも、太平洋は広く大きなウネリが伝わってくるため、これらの船舶を洋上で接舷させて高齢者の多い墓参団(最高齢八十六歳)を安全に移乗させる作業は困難を極め、いつも乗組員の悩みの種となっている。平成八年からは学生・乗組員の一部が墓参団介助のため島に上陸する機会を得ることになった。学生達は積極的に上陸時の手助けや荷物の運搬を援助するので大変感謝されている。本校練習船は、平成六年から内閣府より墓参航海実施の度に感謝状を頂戴している。それは勿論名誉

就職活動

就職に当たって

就職対策委員長
原 田 勝 彦

近年の出生率は減少の一途をたどり、百二十万人の出生である。過去、戦後の多いときと比べると約百万人の減少である。企業とその人員の数がほぼ一定であるとすれば、この出生率の減少は逆に就職の機会を容易にすることであろう。また、企業と人員の数が増加すれば、就職の機会に更に拍車をかけることになる。しかし、現実を見てみると、必ずしもこのような単純な状況下ではない。本来、複雑な経済社会を単純に企業と出生の数とで就職難易度を解析することに困難性がある。

近頃の物理的、化学的あるいは生物学的に混乱する事件は他山の石ではない。これらが起爆剤となりあらゆるところに重要な影響を及ぼすように思えるからである。特に、経済の動向はこれから就職しようとする学生にとって大変心配になるところである。就職協定も撤廃されて、五年目となり、異常に早いとはいえないが、企業も年々募集時期を早めつつあるのが現状である。

とはいえ、本校における就職については、平成十三年三月の卒業生の内定率はほぼ百%と、市内五大学の内で、極めて高率である。また、次年度卒業生の内定率は今のところ(平成十三年九月三十日現在)七十%と、昨年の同期と比べて二十%も増加して、高成績を収めている。このようなことは卒業生の評価が高く、企業が本校の学生を強く求めていることに他ならない。つまり自己を磨くことは、後に続く在学生に就職の道を開いていることである。

人生の中で、生死は経済が好不況であろうと選択できないが、就職は結婚と同様に本来は選択できることが望ましい。しかしながら、今日の就職は売り手市場でなく買い手市場である。このような状況下にあっても、企業が選ばざるを得ない学生、つまり「熱意と意欲のある学生」を、企業が最も強く希求していることを、数年間の就職斡旋を通して、強く感じている。女子学生も多くなっているが、歓迎している企業も多い。これは就職した女子学生の評価の成果でもあると確信していると同時に、更に積極的に開拓していかねばならない。

就職活動記

谷 口 美 香
(海洋生産管理学科四年)

最近の企業は学生を厳選する。選び方は企業により様々で、巷の就職活動マニユアルだけでは通用しない。これから

就職活動をする人はここで私が書くことを参考にして自分なりの活動を展開して欲しい。私が就職活動を開始したのは三年の二月だった。この頃はただ興味のある企業に資料請求するのみであった。その後、なかなか活動方針が定まらず不安だけが募った。この状態を打破しようと私はOG訪問を開始した。訪問先の先輩に「何もしないで悩んでいるよりも、色々な企業の話聞いてから考える方がいい。」とアドバイスを頂いた。そこで私はインターネットを利用して情報収集に努め、企業説明会に積極的に参加し始めた。色々な話を聞くうちに、企業に対する視点が「私を雇ってくれるかどうか」から「自分のしたいことができるかどうか」へと変わり、この時点から相手を知ろうとする積極的な姿勢になることができた。知りたければ、自然と質問も出てくるはずで、逆に質問が出てこないなら、その企業には興味が無い証であろう。ここで私の就職活動の方針は自分の希望の仕事ができる「職に就く」ことに定まった。まず自分が何をしたいかを考え、それができる企業を探す。当てはまる企業が見つければ、あとは自分の考えを企業にぶつけるだけである。六月になると周りで内定をもらう人が現れて若干あせりが出てきたが、活動方針が定まっていたので浮き足立つことはなかった。ある企業の代表取締役の方とお話をしたとき、今の大学生は以前に比べ消極的で、大人しい人が多いとお聞きした。企業側も「自分自身で企業を選ぶ」積極的な人材を望

んでいる。就職活動ははじめて社会に触れる機会でもあり、また、今までの自分を見つめるいいチャンスだと思う。面接や試験にくじけ、何を目指しているのかわからなくなることもあるだろう。しかし、それを乗り越えた時、きつと以前より成長している自分がいいるはずだ。

在校生の声

正面には海、

振り返れば山……

泰 平 光 輔
(水産情報経営学科一年生)

水産大学校、驚くべき場所にあります。正面には海、振り返れば山、自然に囲まれた環境でした。正直、ここで四年も生活するのかもしれない。しかし、しばらく生活してみると、思ったほどの苦もなく、むしろ魅力のひとつだと感じ始めました。少なくとも私にとっては、理由は、釣りです。今まで釣りをしたことはほとんどなかったのですが、友達に誘われて始めました。それからは、この環境が気にならなくなりました。そして、釣った魚をみんなで食べるのが楽しみとなりました。学生の多くが学校の周りに住んでいるので、一緒に食事を作ったり、学べることで、お互いに刺激され、いい経験になります。一人暮らしをしているので、病気や何かあったときのことを心配されている。両親もいるのでは、と思

いますが、周りには頼りになる先輩方や友人もいるので、ご安心ください。また、乗船実習も良い経験になると思います。私はまだ経験していないのですが、他学科の友人が実習から帰ってきたとき、日に焼けたせいなのか、たくましくなったようにみえ、なぜか悔しくなっていました。私も早く行きたいと思っていますが、三年生になるまで待たねばならないのがとても残念です。

私は以上のような点でこの学校に魅力を感じました。人によって感じることは様々だと思います。特になにもせず過ごすのは退屈で、とてもつたいないと思います。勉強も大切ですが、社会に出る前の最後の自由な時間に、いろいろなことに取り組み、実りある四年間を過ごしたいと思っています。

厳しく

春 田 晃 志
(海洋機械工学科三年生)

十八歳の春、自分は水産大学校ソウメイ寮に入寮した。寮生活は、今までとはすべてが違い、戸惑いだらけであった。自分の頭の中でイメージしていた大学生活とは全く違うもので、異次元であった。入寮当初は本当にいつ退寮しようかと悩み、苦しんだ。

さらに自分はカッター部に入部した。カッター部の練習もかなり厳しかった。船を漕げば手の皮がむけ、尻の皮がむけ、痛くて風呂に入るのがしんどく、筋肉痛

で寝るのも苦になるくらいだった。

そんな苦労も初めのうちだけで慣れてしまえば、この生活があたりまえで普通のものとなった。カッターでは副主将として優勝という成績が残せなく残念ではあったが、水大を代表する部であるということもあり、みんなが応援してくれて嬉しかったし、共通の仲間ができて、バカ騒ぎをし、バカ話しをするのが楽しかった。寮では寮長という立場で責任というものも重いと改めて実感した。上下関係はもろろんのこと、忍耐力も培ったし、プラス思考でいけば何事も楽しくなると知った。

商人である親父はいつも「厳しくて泣くような思いをしてこい」と言うので、今まで述べたような話しをしたら、「自分で言うようでは甘い」と言われてしまった。

しかし、社会に出たら決して経験できないこの様な体験は、今後必ず役に立つものだと思う。人間、常に強くならなければならぬのだ。

「忘れていた自分を思い出して」

長 田 真由美

(食品化学科二年)

私がこの大学に入学して、早くも二年の月日が過ぎ去ろうとしています。親元から離れた大学生活にも慣れてきました。最近では入学当時に比べると、生活に多少ゆとりができたように思います。しかし、

「ゆとり」と言えば聞こえがよく感じるのでありますが、裏を返せば緊張感がなくなってきたり、すなわち、「たるみ」が出てきてしまったとも言えます。それを強く感じたのは、十月にわが校で開催されたカッター部の新人戦に参加したことにあります。

現在、女子カッター部に所属しています。今回の新人戦で初めてクルーとして大会に参加しました。大会に至るまでの練習は決して楽なものではなく、特に大会前の朝夕行われる練習には体力不足のため、歯がゆい思いを何度もしました。

しかし、クルー一同「優勝」という目標に向かい練習を重ねました。結果は「準優勝」で目的達成とはなりませんでしたが、この大会は私にとって意義のあるものであったと思います。なぜなら「目標に向かって努力する」ことを忘れていた自分に気づかされたからです。

思えば私は、一昨年浪人生活を経験しました。志望校に入学するために、毎日できる限りの努力をしていました。しかし、最近の生活を振り返ってみて、自分にとって明確な目標がないことに気づきました。「就職して自立する」という漠然とした目標はあるのですが、具体的な何を学んで、どのような職種に就きたいのかということがはっきりしないために、何か生活に張りがなくなっていたように思います。

今回の大会は、目標達成とはならなかったものの、明確な目標に向けて私自身やれるだけのことはやったと思います。

これにより大きな達成感を感じています。来年は三年生となり、いよいよ本気で「就職」を考えなくてはならなくなります。残り少なくなった余裕のある「とき」を大切に、自分の目標を絞り込んでこれからの生活に刺激を与え、張りのある充実したものにしていきたいと感じています。

卒業生の声

水大卒に誇りをもって…

川 澄 寿 男

(漁業学科四十五期卒)

水産大学校漁業学科を卒業して、はや六年の月日が経ちました。学生時代は、友人と酒を飲んだり、アルバイトをしたり、時には勉強をしたり、今でも楽しかった当時を思い出します。

時の流れは、早いものです。現在、私は、山口県漁業協同組合連合会販売二課に勤務しています。仕事は主に、輸入水産物の販売および量販店、問屋等への水産物製品の販売です。最近特に、下関名産であるふくの漁連ブランド製品の製作により、全国各地の量販店や市場への販売活動に全力をあげて取り組んでいます。昨今の不況の中、需給バランスや販売価格を睨みながら悪戦苦闘の日々を過ごしています。

さて、北海道出身の私は、他県で就職したことからか、着任当初さまざまな不安にかられました。しかし、水産界にはたくさんのお水大の先輩、後輩がいて、さまざまな助けやアドバイスを頂き何とか今日まで至っています。ふりかえると、水大で勉強したことや、たくさんのお水大の先輩や後輩に出会えたこと、本当に水大を卒業してよかったとつくづく思います。これから母校を巣立って行く皆さん、水大卒のエキスパートとして、また、母校の誇りを持った社会人としてあらゆる困難に立ち向かっていってください。かげながら応援しております。

水産技師になって思うこと

塩 崎 あにせ

(生物生産学科五十一期卒)



私が大学四年生の時にいた研究室は、朝は遅刻厳禁、机にむかって遊んでいよう

ものなら「勉強しろー!」と先生の怒鳴り声で飛んでくる厳しい研究室でした。そんな厳しい先生でしたが、私が公務員試験の合格を報告したときは自分のことのように喜んでくれたのを今でも覚えています。

現在は大学を卒業し、広島県福山地域事務所農林局水産課で水産技師として働いています。私の勤務地は広島県下の一の海苔生産地を抱えており、配属された当初は大学で学んだことを生かせるチャン

スだと意気込んだものでした。しかしながら、現場で耳にする漁業者からの問いかけは私の知識を越えるものが多く、私が大学で学んだことはほんの一部でしかないと感じました。結局のところ今でも勉強の毎日です。

大学を卒業し、社会に出て思ったのは、好きだけやりたいことや興味のあることに取り組めるのは大学時代しかないということです。私の場合、好きまで海苔を研究していたにもかかわらず、それを生かし切れていない自分はずっと学ぶべきものがあつたのではないかと今更ながら反省しています。

しかしながら、大学時代で最も大切なものとはなにかと問われたなら、振り返ったとき、「私は大学の時、いをしていました！」と胸をはって言えるなにかがあればいいのではないのでしょうか。研究でもよし、資格でもよし、バイトでもよし、部活でもよし。一生懸命取り組んだその経験の方が大切なような気がします。

研修生の声

水産大学校での

訪問研究の思い出

エチオピア大学助教授
Tadese Wordiniu Godeto

水産大学校に着くと、白いりっぱな建物群が目に入る。そして、それらを背後から包む緑の山は、東側で印象的な日本

海と接している。この比類なき眺めは当然独特の感覚を誘い、教育と研究を通しての輝かしい未来を予告する。

到着早々、私は自分の印鑑をカタカナで作るといふ体験をした。やがて梅雨も過ぎ蒸し暑い夏がきた。旅行に出た私は、京都の祇園祭、奈良の寺院や塔や神社、そして広島市の悲劇的原爆ドームを見学した。また、後日訪れた秋吉台と秋芳洞は特に思い出に残った。時折り目にした花火大会は夏に特別の装いを与えた。食べたり飲んだりも体験した。二〇〇一年六月十九日の歓迎会ではいろんな日本料理を味わった。滞在中の、刺身の旨さは絶対に忘れられない。また、燗付きのマイルドな徳利酒であらふらにもなった。この他、元氣の出る緑茶も飲み始めた。

私は、自分のヒジキ研究の他、食品化学科の各研究に強い興味を持った。例えば、摂餌誘因物質や忌避物質、海洋生態系での微量元素循環、水産分野での HACCP、機能性食品等である。

振り返ると、本校での時間は最も思い出深いものの一つである。だが、帰国の時は早くも来てしまった。また日本に、そして本校に来れるといいのだが。

最後に、ホスト役を快諾された花岡研一教授、奨学金をいただいた松前重義国際財団、そしてこの滞在を予想よりずっと快適にしてくれた我が研究室仲間、アキオ、イクエ、ユキに深謝する。

新任紹介

ご挨拶

水産情報経営学科講師
寶 學 淳 郎



平成十三年十月一日に本校に赴任してからまだ一月ほどでこの原稿を書いてお

ります。平成六年三月に筑波大学大学院博士課程体育科学研究科退学後、筑波大学(体育科学系准研究員・文部技官)に五年間、信州大学(人文学部助手)に二年間勤務しておりました。

研究に関しては、私は主にスポーツの歴史的研究に従事してきました。ナチス期に政治的に濫用されたドイツのスポーツが第二次大戦後どのように変化したのかを時代的な移り変わりと共に明らかにすること、それが私の主な研究テーマです。また、比較史的視野を広げるため、日本スポーツの戦後改革に関する共同研究(日本スポーツ産業学会)に参加し、その他、筑波大学の研究グループとわが国におけるスポーツの導入と普及の問題を研究しております。今後は、以上の研究を深化させるとともに、海洋性レジャー・レクリエーションに関する研究にも取り組んでいきたいと考えております。

す。同テーマについては従来十分には研究されておらず、また、本校における研究テーマに適すると考えるからです。現在、体育理論、体育実技、海洋文化論の授業を担当しております。

新しい環境に慣れましたら、スポーツ・レジャー・レクリエーション関連の公開講座を行うなどして、研究や教育で得たものを還元し、地域住民にも貢献していきたいと考えております。今後大学にとつて、地域との連携がより重要となると考えるからです。

何分にも今は分らないことばかりです。皆様方のご理解とご協力を賜れますよう切にお願い申し上げます。

面白い講義をめざして

海洋生産管理学科教授

村 井 武 四



本年四月一日付で資源環境計画学講座に水産庁・西海区水産研究所から転任し

てきました。本校では漁業管理学Ⅰ、海洋漁業学Ⅱ及び国際漁業論Ⅱなどを担当しております。着任後講義の準備に追われて半年が瞬く間に過ぎてしまいました。が、まだ、学生の名前と顔が一致せず苦労しています。一日でも早く本校の雰囲気馴染みたいと思っています。

私は北大水産学部で修士課程終了後、

米国・ジョージア州立大学の海洋研究所、水産庁・養殖研究所、中央水産研究所、海洋水産資源開発センターなどに勤務し、基本的には増養殖関係の基礎研究を行って来ました。最後に四年間在職した西海区水産研究所でも資源増殖部の所属でした。しかし、本校の増殖学科が生物生産学科に、漁業学科が海洋生産管理学科に改編された様に、資源増殖部は海区水産業研究部に再編されました。研究内容も、従来の増養殖研究に加えて、資源評価などの資源研究、赤潮や地球温暖化などの環境問題にも対応することになりました。実際のところ、海区水産業研究部が行っている研究の一部は、所属する漁業管理学科研究室が土井ヶ浜などの砂浜域で実施している研究内容と近く、主対象種が放流ヒラメか野生種であるか位の違いであり、驚くとも一安心しました。

また、昨年度発生した色落ちによるノリの大不作に端を発した有明海の問題に対応するために、行政対応特別研究「有明海の海洋環境の変化が生物生産に及ぼす影響の解明」の立ち上げに転任直前まで尽力しました。そこで、当研究室の新たな研究フィールドとして砂浜域に干潟を加え、それぞれの水域における環境要因と生物生産との関係及びその違いの究明に取り組みつもりです。また、教育面でも、これまでの多岐にわたる経歴を生かして、興味もてる講義を行い、二十一世紀の水産業振興の牽引車となる後継者の育成に微力ながら全力投球するつもりです。講義をより面白いものにするためにも、皆様方のご協力とアドバイスをよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

海洋機械工学科助手

永尾 公 壮



私は本年度四月より海洋機械工学科の助手として着任いたしました。早いもので、着任して九ヶ月が過ぎようとしています。着任当初はよく学生と間違われ、「あ、学生じゃなかったんですか」といった言葉も耳にしました。最近ではようやく環境にも慣れ、周囲の方々に多々迷惑をかけたながらも充実した日々を送っています。現在、私は海洋機器工学講座に所属し、環境に配慮した機械(エコマシン)に関する研究に携わっています。環境問題がクローズアップされる今日、機械の抱える問題も振動、騒音、廃油など多岐にわたります、その改善が急務となっています。中でも潤滑油などとして使用される油は機械にとって必要不可欠なものではありますが、いったん使用済みになると多量の廃油となることや、万が一流れ出すと水系の汚染へ直結します。そこで、油の使用を最小限にとどめ、かつ性能の低下を生じない機械の開発を目指して研究を行っています。

一方、教育面では実験、実習や製図といった実学を主に担当しています。実習では旋盤作業やアーク溶接など様々な項目があり、常に危険が伴うため、実習指導をするともに学生の皆さんと一緒に作業を行っています。実習での作業が社会に出てから直接役立つ場面はほとんどないかもしれませんが、「ものづくり」の原点である手による作業を知ることが貴重な体験になると思いますので、学生の皆さんは講義だから仕方なくというのではなく、積極的に取り組んでみて下さい。もちろん安全には十分に注意して。

さて、本校は本年度より独立行政法人へ移行し、新たなスタートを切りました。変革の最中であり、これからの水産大学校を左右する大切な時期であります。私は毎日勉強で、まだまだ力は及びませんが、スタッフの一員として本校の発展に貢献できるよう教育・研究に努力してまいりたいと思っております。よろしくお願いたします。

着任にあたって

生物生産学科助手

高橋 洋



平成十三年十月一日付で生物生産学科(小野臨湖実験実習場勤務)の助手として

着任いたしました。普段は少し離れた実習場に勤務しておりますので、本学の皆様とはお顔を合わせる機会が若干少ないかと思いますが、これからどうぞ宜しくお願い申し上げます。

私は今春、北海道大学大学院水産科学研究科において学位を取得したばかりの弱輩者でございます。北海道大学では冷たい水にすむ小さな淡水魚、トゲウオを材料に、魚類自然集団における遺伝的多様性の創出・維持機構に関する研究を行って来ました。同大学院在学中は、フィールドワークのため一年の半分を釧路湿原や霧多布湿原といった大自然の中で過ごし、残りの半分を水産学部のある函館の実験室で過ごすといった、バランスの良い研究生活を送っておりました。

水産大学校へ就職を許され、本州、しかも西の端に移動するにあつて、はじめは一体どのような場所なのかと思つていたのですが、勤務地である小野臨湖実験実習場は里山の自然に囲まれた穏やかな農村地帯にあり、ほっといたしました。毎日、タヌキやフクロウの出る田舎道をのんびりと通動しております。生物生産学科の学生の皆様とは、二年次と三年次に行われる実習において、短期間ながら寝食を共にし、陸水学や内水面増殖学について一緒に学んでもらうことになりました。普段とは違った環境に身を置くことで、新鮮な気持ちで多くのことを学んでほしいと願っております。

私の研究テーマは、魚類をはじめとする水産動物の遺伝的多様性が、どのよう

なプロセスを経て生み出されるのか、また、その多様性を維持するために、どのような保全対策を講じれば良いのかについて、実際に遺伝子分析を行いながら検討していくというものです。

一部の学生さんとは、四年次の卒業研究において、実験実習場の最新の分析機器を用いた遺伝子解析法を指導させて頂く機会もあるかと思えます。このような実験や実習を通して、二十一世紀の水産育種において活躍できる適材の育成に、微力ながら貢献していきたいと考えております。

赴任のご挨拶

耕洋丸機関長
佐藤 長 臣



平成十三年
四月人事異動
で水産庁漁業
取締船白竜丸
から本船に着
任しております

す。水産庁の船では調査船開洋丸が一番大きいのですが、内容的にはこちらの練習船耕洋丸の方が格式が高いことは各界の皆様方の認めるところであり、光栄に思っております。まずは水産庁及び水産大学の関係者に厚くお礼申し上げます。練習船は二年前の天鷹丸機関長に続き二回目の勤務となります。二年ぶりで下関に帰ってきたら、近くに水族館、唐戸市場が新しくオープンし、耕洋丸から眺

める関門海峡は絶景で申し分ありません。私は水産庁船舶職員として調査船、監視船、練習船に三十年余乗船し、航海海域も世界一周を始め、南極海域、ペーリング海域、ニューヨーク海域、オーストラリア海域、アフリカ海域と世界中ほとんどの海域を航海してきました。現在の船舶の現状、外国の港湾事情、本校出身の水産庁船舶職員の活躍、そして、これから新しい時代の船を目指す学生諸君への学生時代からの準備事項等を具体的に現場サイドから指摘し、時代の要請に応えられる学生教育に努める所存です。

今回は二度目の練習船乗船と言うことで前回よりはゆとりがあり、その分、学生教育にゆとりを持って望んでおります。又、本来の機関長業務の方は船の老朽化対策、機器の換装等を予定しております。更に、近い将来予定される代船建造に関し機関の資料を集め検討しているところです。

最後に今回の練習船勤務を通じ、母校、水産大学校のお役に立てれば幸いです。今後とも、宜しくお願い申し上げます。

大 学 祭

01 海燕祭を振り返って

01 大学祭実行委員長

飯 田 健

(生物生産学科三年)

大学祭実行委員としては三年目、今年の実行委員長として望んだ一年間でしたが、振り返ってみると実に様々なことがあったなと思えます。

今年とは下関・吉見地区の方はもちろん学生も多くの参加した海燕祭でした。そして、その背景には下関・吉見地区との大きなつながりがあったからだと思います。五月の海峡祭り、六月の吉見のホタル祭り、八月の吉見夏祭り、海峡火花大会、馬関祭りなどです。それらの活動を通じて出会った多くの方々から(もちろん、それだけにとどまりませんが)、大学祭のPRから物品提供まで様々な面で協力していただきました。本当にありがとうございます。そして、大学祭を運営するには、たくさんの方の協力が必要なんだということを身をもって学びました。それらの人と出会って行く中で私も大きく成長することができたと思っています。

こういった地域の人たちとのつながりはもちろん、今年の子祭成功のカギを握っているのはなんとも思いません。今年の学祭メンバーは私を含めて三十八名です。一年生から三年生まで充実したメンバーみんなの意見を聞き、よりよいものを目指して頑張ってきました。何か分からないことがあったりすればすぐに相談し合えたし、そんな仲間たちに恵まれたからこそ海燕祭をよりよいものにできたんだと思います。そして、エンディングで見せたみんなの涙は、この海燕祭

が素晴らしいものであったことを物語ってくれています。

大学祭実行委員としての活動も終わりを迎えたわけですが、私が大学祭実行委員会に入ったきっかけは、友人に誘われなんとなくというものでした。しかし、この三年間の活動を通して得たものは口では言い表せないほどの大きなものでもあります。私の一生の宝物といっても過言ではないです。時には辛いこともあったけれど、三年間やり通して本当によかったと思っています。二〇〇二年の海燕祭が今年のものより遙かに大きくなることを、そしてこの海燕祭という先代から受け継がれた歴史が続いていくことを願っています。

ク ラ ブ 紹 介

女子カッター部

竹 山 優 子

(海洋生産管理学科二年)

私が女子カッター部に入ったのは水産系の学校でしかできない何かをやりたいという安易な考えからであった。実際に入った当時はまだ正式な部ではなかったこともあり、サークルのような気持ちであったが、一年たち正式に女子カッター部となつてからは責任の重さを感じるため、真剣に練習に取り組む姿勢がでてきた。勝つことへの意欲がでてきたのだ。大会前の練習は朝、夕、その合間にバイトという過酷なもので精神的にも肉

体的にもギリギリであった。そんな時の支えは仲間であった。

カッターは特殊な団体競技である。個々人の漕ぎは光らないが、全員が合せて漕いで初めて艇全体として光るのだ。今までの私は辛い事があると自分一人が不幸であるような気分になり、周りが見えなくなっていたが、カッターを漕いで同じ艇に乗っているクルーはみんなが同じ楽しさ、苦しさを味わっているという実感ができ、また部長という責任から周りに目を向けられるようになった。漕いでいる時、自分だけが苦しさに負けてクルーを裏切ることには出来ないと思うようになったのだ。

カッターを通じてたくさん仲間と経験をすることが出来た私は、次回の全日本大会で引退になるけれど、結果はどうであれ漕ぎきった後に仲間は生涯の友となることを信じてやまないのである。

学生部だより

平成十四年度の就職 対策と現状について

情報関連技術（IT）関連企業の牽引によって、ここ数年回復傾向にあった日本経済も、米国景気の減退とともにやや陰りが見え始めてきました。こうした景気動向の影響を直接受けるのが企業の新卒採用です。

昨年来からの企業側の採用スタンスと

しては依然として「厳選採用」を堅持する企業が圧倒的であり「採用定数の確保」よりも学生の質を優先し、「良い素材を厳選して採用する」傾向にあります。しかしながら、若年人口の減少、学生数の減少、学生の就職意識の多様化など、少子化のさまざまな影響が生じ、優秀な学生の「売り手市場」がより強まるとみられ、採用する企業側にとっても厳しい環境になることは避けられない状況となっています。

こうしたなかで、企業の求人活動は年々早期化し本校においても既に平成十四年度卒業生予定者を対象にする企業からの求人が多数寄せられています。また、本校での会社説明会は平成十三年度では四月から五月をピークに開催されています。

これらの状況を踏まえ本校では、学生に対し企業情報の提供とともに学内に就職対策検討委員会を常設し、「特別講演」等のガイダンスの開催、就職手引き書の配布など、学生の就職活動に対し支援を行うとともに、各学科に就職指導担当教員を配置し個別に就職指導、相談を行っています。

なお、平成十三年度の卒業予定者の就職内定状況は別表のとおりです。



平成13年度卒業生進路状況(平成14年 2 月 1 日現在)

学科・専攻科・研究科	卒業予定者数	進学関係					就職関係										※その他
		大学院	研究科	専攻科	研究生	その他の進学	計	国家公務員	地方公務員	各種団体	水産	船舶	造機・造船	食品	その他の企業	計	
海洋生産管理学科	39	1	3	12	0	1	17	0	0	1	9	0	0	3	0	13	9
海洋機械工学科	38	3	2	8	0	0	13	0	0	0	3	0	7	3	3	16	9
食品化学科	37	2	1	0	0	0	3	1	0	0	9	0	0	16	1	27	7
生物生産学科	35	5	6	0	3	1	15	1	4	1	9	0	1	2	1	19	1
計	149	11	12	20	3	2	48	2	4	2	30	0	8	24	5	75	26
専攻科 船舶運航課程	10	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	5	0	0	0	7	3
専攻科 船舶機関課程	15	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	6	3	0	1	12	3
計	25	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	11	3	0	1	19	6
研究科	8	2	0	0	0	0	2	0	0	0	5	0	1	0	0	6	0
	182	13	12	20	3	2	50	2	6	2	37	11	12	24	6	100	32

(分類内訳)

各種団体=水産関係各種団体

水産=水産関係・関連企業

船舶=船舶・海事関連企業

造機・造船=造機・造船関連企業

食品=食品関係・関連企業

その他の企業=その他の企業・自営業

※その他=公務員や海技試験受験等の準備など

平成13年度卒業予定者進学・就職内定状況一覧表

平成14年2月1日現在

◎進学(大学院等)	◎民間企業	クラウンコルク	九州郵船(株)	富士通サポート&サービス(株)
東北大学大学院(株)S T E P	ケンコーマヨネーズ(株)	ケンコーマヨネーズ	五栄土木(株)	北九州魚市場(株)
名古屋大学大学院(株)エフビコ	コックフーズ	コックフーズ	阪九フェリー(株)	榊本海運(株)
三重大学大学院(株)クワザワ	コモディ・イイダ	コモディ・イイダ	山崎製パン(株)	木村兼
神戸商船大学大学院(株)ジェーアルシーエス	勤北九州生活科学センター	勤北九州生活科学センター	秀長水産(株)	(株)林
広島大学大学院(株)シモセン	スカイラー	スカイラー	食品環境検査協会(株)	
下関市立大学大学院(株)ダイニチ	すみれ旅館	すみれ旅館	新日本環境調査(株)	
九州大学大学院(株)魚	ダイキンプラント(株)	ダイキンプラント(株)	森松冷凍(株)	
佐賀大学大学院(株)山	ダイヤモンドフェリー(株)	ダイヤモンドフェリー(株)	清田産業(株)	
宮崎大学大学院(株)大阪魚市場	ニチロ漁業(株)	ニチロ漁業(株)	仙都魚類(株)	
鹿児島大学大学院(株)第一水産	ニッサイマリン工業(株)	ニッサイマリン工業(株)	川崎汽船(株)	
水産大学校研究科(株)勤北九州生活科学センター	パオ	パオ	村川蒲鉾(株)	
水産大学校専攻科(南)日輪養魚	フタバ産業(株)	フタバ産業(株)	大洋A&F(株)	
水産大学校研究生(株)ジャパンアウトソーシング	ホームコーポレーション	ホームコーポレーション	中島水産(株)	
その他の進学(独立キャリアカレッジ)JA四国くみあい飼料(株)	ホームワイド	ホームワイド	長府製作所(株)	
◎就職(官公庁)	アマノ機工(株)	ポゾリサーチセンター	帝国ビストンリング(株)	
水産庁	アルビス	マルボシ酢(株)	東洋水産(株)	
海上自衛隊	イシオ食品(株)	ヤマハ食品(株)	日東ベスト	
富山県職員	いなば食品	ヤンマー東日本(株)	日本ゼネラルフード(株)	
山口県職員	エスエスケイフーズ(株)	旭テクネイオン(株)	日本食研(株)	
沖縄県職員	沿海海洋調査(株)	奄美運輸(株)	日本配合飼料(株)	
熊本市職員	オハヨー	横浜冷凍(株)	日本郵船株式会	
◎水産関係各種団体	(株)小糸工業	岡田水産北海道(株)	日和山観光	
水産資源開発センター	(株)前川製作所	金子	飯野海運株式会	
海洋科学技術センター				

平成十四年度入試概況

本校の平成十四年度入試は、本校の独立行政法人への移行後初めての入学試験となりました。

結果は、一般入試が志願者総数で八百三十九人で、推薦入試を含めると前年を上回る結果となった。

一般入試の学科別の応募状況は、水産情報経営学科七十二名(募集人員十四名に対する倍率五・一倍)、海洋生産管理学科百三十二名(募集人員三十名に対する倍率四・四倍)、海洋機械工学科百十七名(同三・九倍)、食品化学科百五十九名(募集人員三十一名に対する倍率五・〇倍)、生物生産学科三百五十九名(募集人員二十一名に対する倍率十七・一倍)、で水産情報経営学科と海洋機械工学科及び生物生産学科が前年の志願者を上回った。

また、先に行われた推薦入試には、百十六名が応募し、五十八名が合格した。一般入試は、平成十四年二月十一日に下関・東京・大阪の各試験場で実施され、二月二十二日に合格発表となった。

次年度以降の学生募集も厳しい状況が続くと考えられるが、公開講座、オープンキャンパス、高校訪問等の広報活動を充実し、本校の特色と個性豊かな教育方針を前面に出し、受験生に魅力ある大学となるよう一層の努力をして参る所存であります。

人物往来

〔平成十四年度〕

〔水産特論講師〕

七月十三日

水産庁資源管理部沿岸沖合課 課長 大石 修宗

七月七日

水産庁資源管理部国際課 課長 山下 正行

十月二十九日

水産庁漁政部水産経営課 課長 高島 泉

十二月七日

水産庁漁政部企画課 課長 今井 敏

一月三十一日

水産庁研究指導課海洋技術室 室長 中山 博文

〔叙位・叙勲〕

四月二十九日 勲三等瑞宝章 齋藤 立彦

十一月三日 勲三等瑞宝章 神鳥 昭

(名誉教授)

〔名誉教授〕

該当なし



独立行政法人
水産大学校
〒759-6595
下関市永田本町2丁目7-1
発行
学園だより
編集委員会
電話0832(86)5111

水産大学校の教育・研究活動について

水産大学校理事長 三本 菅善昭



平成十三年四月一日付けで、本校は、ご案内のように、独立行政法人に移行しました。

独立行政法人水産大学校は、教育研究に必要な予算が従前と同様に、ほぼ全額国から支出されることから、農林水産大臣が策定した中期目標を達成することが求められており、そのための中期計画を本校自ら定め、さらに各年度に実施すべき具体的な年度計画を公表して、教育及び研究を行っております。

独立行政法人として最初の平成十三年度が、関係者のご理解とご協力により特段の問題や混乱もなく終えることが

できましたことは、前号でお知らせしました。

独立行政法人制度においては、行政部局による事前チェックを少なくする一方、事後の評価を重視して運営するとされており、運営のあり方とその成果について、主務省の評価委員会及び総務省の評価委員会による二重の評価が行われることとなっております。

農林水産省の評価委員会は昨年秋、総務省の評価委員会は昨年末に、それぞれ平成十三年度の評価の結果を本校に通知してきました。最初に受けた評価であり、その結果に注目していましたが、良好との総合評価結果が得られました。

なお、これらの評価は、教育研究の結果及びその成果について実施されており、本校が更なる高い評価を得るためには、教育研究のプロセスの問題点等について自ら厳しくチェックする自己点検が重要であります。このため、自己点検に積極的に取り組むこととしており、現在、委

員会および分科会を設置して、教育研究の問題点などについて取りまとめ、対応策を検討して、質の高い教育及び研究のための改善を図ることとしております。

自己点検の第一のポイントは、農林水産省所管の高等教育機関としての特性を活かして、水産大学校はいかに個性豊かな、言い方を変えれば、本校にしかできない教育研究は何か、それを行うためには何をなさねばならないかを明確にして実施することです。第二のポイントは、大学の主役は学生であるとの立場で、学生が何を望み、何を考えているかを把握し応えていくことであり、このために、学生による授業評価を導入するとともに、授業の改善のためのファカルティーデベロップメント(FD)にも積極的に取り組むこととしております。

わが国の水産を巡る情勢は大きく変化しており、新時代の産業として大きく発展をするための変革が行われております。昨年、水産庁が定めた水産基本計画においても、「水産物の安定的な供給」「消費増進」「水産物の供給」「自然と共生する漁業」など新たな方針が示されており、水産業は「食の安全の確保」「美しく豊かな海づくり」「総合マリン産業など多角的な経営」などを包括する広義な産業としての再生が期待されております。

水産大学校は、このような水産の変革を見据えた教育研究を行い、独立行政法人の特性を積極的に活かして、新しい時代の水産を担う人材を育成するとともに、産業との連携を強化し、先導的な研究及

び技術開発を進めて、水産の変革に大きく貢献していきたいと考えております。関係各位におかれましてはご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

特集

公開講座を

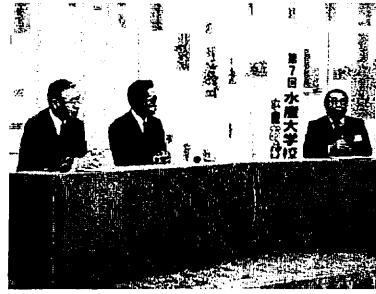
唐戸カモン・ワーフにて開催

公開講座委員長 高橋 幸則

平成八年から毎年開催している本校の公開講座は、水産業を営んでおられる方やその後継者の方および地域の市民の方々を対象に、先生方が日頃行っている研究成果をわかりやすくお話しすることによって、水産業の発展に寄与し、水産に対する理解をこれまで以上に深めて戴くとともに、地域の方々とより密接な良い関係を築くことを目的としています。

平成十四年度の公開講座は、これまでと少し趣向を変えて、市民の方々が参加しやすい場所において、本校の先生ばかりではなく、市民の代表である市長に講演を戴き、市長と本校理事長との対話をも企画してみました。このような趣向と企画によって、十月十三日に唐戸のカモン・ワーフで開催された第七回公開講座は、耕洋丸の長友洪太船長による「航海あれこれー三万三千キロの旅を振り返ってー」と題してのご講演と江島潔下関市長の「海峡のまちー下関ーの未来を

語る」と題してのご講演のほかに、下関市長と三本菅善昭理事長との対談が行われました。本年度は百二十六名の方々にご参加を戴き、この内の六十五名の市民の方々が耕洋丸を見学されました。参加された市民の方々からは「市民が知るこ



一、航海あれこれ―三万三千キロの旅を振り返って―

講演者 耕洋丸船長友洪太先生
水産大学校は、耕洋丸と天鷹丸の二隻の練習船を有し、全ての学生を乗船させて実習を行っている。耕洋丸は本年度に国内四回と外国一回の五航海(百八十日間)が予定されている。すでに、食品化学科と生物生産学科の三年生を乗船させての石垣島までの航海と、海洋生産管理学科の三年生を乗せての東シナ海までの航海を行い、海洋学や漁業学に関する実習を実施した。また、夏には国の要請に

よって北方領土を墓参する方々を乗せて墓参のための航海を行った。この航海には専攻科の学生が乗船し、墓参団の方々の手助けをして大変感謝された。来る十月二十五日からは、海洋生産管理学科と海洋機械工学科の四年生を乗せて遠洋航海に出発する。昨年の本航海はオークランド、フィジー、ハワイなどに行き、マクロ延縄漁業の実習を行うとともに、フィジーの南太平洋大学の学生と本船を用いて共同調査を実施し、同大学を訪問して交流を深めた。

三十六年に亘る航海においては、インドの警備艇に当時の船長が連行されたり、中国の軍艦に大砲をつきつけられるなどの危険な事態に遭遇したこともある。外国は二十五カ国を訪問したが、ギリシア、モロッコ、モナコ、ニュージーランド、オーストラリアなどの国々が印象深かった。

このような練習船による乗船実習の意義は、海洋学や漁業学の技術や知識を学ぶことのほかに、これまで自由気ままに生活していた学生が、厳しい規則の中で団体生活をする事によって、見違えるようにたくましく成長していくことにあると思う。

二、海峡のまち―下関の未来を語る

講演者 下関市長 江島 潔氏
下関市は二〇〇一年から二〇一〇年までの第四次下関市総合計画において、人がキラキラ、暮らしが生き生き、街がグリーンをキャッチフレーズにして改革を

推進している。

水産業振興の取り組みについては、吉見地区に栽培漁業センターの建設を予定しており、年間にアワビ二十万個、クルマエビ百万尾、ガザミ二十万尾を放流していく。また、海洋の汚染をなくし、漁業資源を永続的に確保するために、公共下水道の整備を進めていくとともに、最近オープンした唐戸魚市場を観光市場として機能させ、この市場とカモン・ワーフ、海響館などを核とする都市近郊型地域の特徴を活かした街づくりを推進していきたい。

下関市は年々活性化している。平成十三年にオープンした海響館は、当初の入場予定者数を大きく上まわり、平成十四年九月現在の入場者数が二百万人を越えた。平成十四年五月には、第五十四回国際捕鯨委員会下関会議が開催され、延べ千二百名の参加者を得て、国際会議観光都市としてのデビューを果たした。最近における観光動態調査の結果からも、平成十二年度の観光客数は二百八十七万人であったものが、平成十三年度のそれは三百三十五万人と、観光客がたくさん訪れるようになったことがわかる。

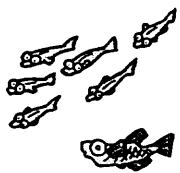
このように、下関市は活力を増してきたが、水産都市下関の最大の強みはアカデミックセンターとしての水産大学校を有することである。産としての唐戸市場を核とした水産関連産業と、官としての下関市と、学としての水産大学校の、これら産官学が今後、さらに連携を密にしていくことが水産都市下関の発展に繋が

るものと確信している。

三、江島潔下関市長と三本菅善昭水産大学校理事長との対談要旨

下関市長「すでに述べたように、水産都市下関はアカデミックセンターとしての水産大学校を有することが誇りであり、強みでもある。すでに、水産大学校の先生方には海響館のオープン・ラボにおいて、興味ある実験や講義をして頂いており、観客から大変好評を得ている。将来的には、子供達の総合学習の場を作って頂き、人材を育成してほしい。また、市の栽培漁業センターなどの支援をお願いし、作り育てる漁業を確立して頂きたい。水産都市下関をさらに発展させるには、下関市の産・官・学が連携を深めることが重要であると思う。」

水産大学校理事長「本校は平成十三年度に独立行政法人となった。これまでと異なる点は、教育と研究が充分に行われているかだけではなく、その成果を産業界に発信しているか否かについての評価を受けることになったことである。しかし、これまでの本校は、情報発信基地としての機能が充分でなかったように思われるので、今後は研究の成果などを大いに社会へ発信し、市民の生活の中にとけこんで認知されるようにならなければならぬ」と考えている。」



「遠洋航海を振り返って」

練習船耕洋丸船長

長 友 洪 太



本校練習船は毎年一度の遠洋航海を実施している。これは一級海技士養成機関としての水産大学校が、航海・機関の海技士を教育して送り出すために必要な遠洋海域での実習を行い、履歴を付けさせるためのものである。そのためこの遠洋航海は日本を遠く離れた海域まで脚を伸ばし、途中で補給や休養のために外国の地に寄港することになる。

本校開学以来、遠洋航海は学内行事の花形であり、出港にあたっては在校生のスタンバイやカッターの随行そして沢山のテープに見送られた賑やかな出港風景が見られる。

この遠洋航海も時勢とともに変貌しているが、その精神には変わりないものと思っている。長年この仕事に携わってきたものとして特にここ数年の耕洋丸の遠洋航海のトピックスを取り上げて振り返ってみたい。

一、フィジー国スバに所在する南太平洋大学(以後USP)との共同調査航海
これは一九九六年に本校とUSPとの

間で締結された「水産大学校と南太平洋大学との学術交流に関する覚え書き」にもとずき、同年を第一回としてフィジー国水域内において水産資源及び海洋学に関する共同調査を実施するものである。

二〇〇一年までの間に5回実施し、その調査研究の成果も両校で発表されている。

この航海ではUSPの教官・学生合わせて十四、五名を本船に乗船させ、五日間の調査を行っている。調査海域はピチレブ島(同国最大の島)の沿岸域ではあるが、彼らにとつては未知の海域である。我々にとつても珍しい伊勢エビの稚魚、オウム貝、新種の魚類等を採集して貴重なデータとなっている。この期間は学生・乗組員と寝食を共にする共同生活であり、国際交流という観点からも貴重な体験をしている。しかし、フィジー国の政情不安による治安状況の悪さがこの計画を中断させる心配があるのは残念である。

二、二〇〇〇年ミレニアム問題(Y2K問題)

世の中がコンピュータ時代のこの頃、船内機器も大部分がコンピュータで制御されている。旧式のCPでは一九九九年から二〇〇〇年への切り替えに問題が生じるとのことであった。しかし、本船の機器は事前処置がなされており担当士官の見守るその瞬間にスムーズに二〇〇〇年を表示してくれたにはほっとしたこ

とだった。

三、二十一世紀の初日の出

二十一世紀のスタートの瞬間を世界一早く迎えたのは耕洋丸であると自負している。

二〇〇一年一月一日の0時に、南緯25度40分、西経172度30分の東方にずれて位置する日付変更線上に漂泊していた本船は、他に誰もいない洋上で年男の学生・乗組員によるカウントダウンをして汽笛を吹鳴し、誰よりも早く二十世紀の初日の出を迎えたのである。

四、豪州への寄港拒否問題

一九九九年度の遠洋航海は、年度当初に計画していた航海予定を急遽変更せざるをえない事態となった。八月下旬頃、東京水産大学の練習船海鷹丸が豪州のケアンズ港への寄港を拒否されたとの情報が飛び込んできた。情報収集によれば、当時進行していた日・豪州・ニュージーランド三国間によるミナミマグロの漁獲制限に関する条約の交渉が立ち往生したことが影響したものと考えられた。直前の変更にも右往左往させられたが、本校の担当事務部・水産庁・外務省・代理店にはご苦労をお掛けしたことであった。

又、本船が実施している北方領土墓参航海で訪問する北方四島が豪州にとつては、極東ロシア海域との判断であり、その海域に入域した船舶に対して豪州の検査法では厳しい検査が実施され、場合によっては入港拒否もあることなので最悪の場合を考えて最近では寄港を遠慮することになっている。

五、在留邦人との交流

遠洋航海の寄港地として太平洋の真ん中にあるハワイは重要である。ほとんど毎年ホノルルへ寄港しており、前項に記した年にはヒロにも寄港したことであった。ハワイは先代耕洋丸の時代から縁の深いところであり、寄港の度に日系人会特に最近では山口県人会の主催で学生を歓迎をいただいている。一世の方々も少なくなくなってきたこの頃ではあるが、船上でもパーティーを開催して学生達も日系の方々との交流で国際貢献の一端を担っている。ハワイに限らず、いろいろな寄港地において在留邦人・在外公館・現地港湾当局の方々との交流を図っている。

六、実 習

練習船の本分である実習については航海・運用・機関実習はもとより、漁業実習としてマグロ延縄操業を実施している。漁業実習として時代にマッチしたものかどうかは考えさせられる点があるが、練習船としては漁具作成から始まる操業作業を通して一つの目的に向かう協調性の育成も重要な任務と考えている。

利己的で他人への気配りの少ない現代っ子の学生達が、この遠洋航海の共同生活を通して社会人としての基本的ルールに関心を示す若者に変化していくの目に見えることが練習船教官としての喜びである。

約二百名参加の

オープンキャンパス

オープンキャンパス実行委員長

浜 田 盛 承

昨年に引き続き、第二回目のオープンキャンパスが本校キャンパスで八月末に開催されました。その紹介を兼ねて、夏休み中の学校の動きの一端をお知らせいたします。

オープンキャンパスを開催した目的は、本校受験を考えている高校生あるいは彼らの保護者の方々に対して本校の教育や研究の内容、施設などを紹介すると共に、学校の雰囲気を感じてもらい、受験や進路選択の際の参考にしてもらうためです。

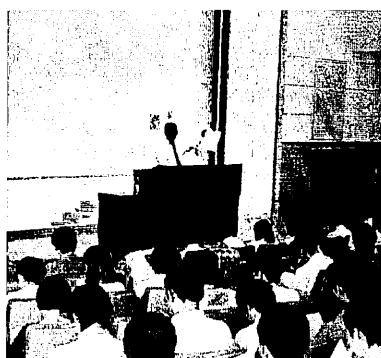
当日は真夏にふさわしく、雲一つ見られない暑い暑い日照りとなりました。ちなみに当日の最高気温は例年よりも1.8℃高い31.6℃、湿度は55%でした。

今年のオープンキャンパスは、事前の問い合わせや申し込みの件数の増加から昨年を上回ると予想されていきました。が、いざ当日になると昨年(八十七名参加)の二倍を上回る百九十二名(受験生と保護者の合計数)の参加となりました。後でアンケートの結果から分かったことですが、地域別の参加者は近隣では福岡県三十一名、山口県二十五名、広島県十四名などであり、遠くは北海道、山形県、茨城県、長野県などからも参加がありました。参加された多くの方々、遠路をも

いとわずに参加された皆様には、実行委員会として心より感謝申し上げる次第です。

十時過ぎ、下関駅あるいは新下関駅から高校生と保護者で満杯になった二台の大型バス、数台の大型タクシーあるいは家族が乗った自家用車が学校に続々と到着しました。

会場となった共同研究棟四階の多目的会議室(定員二百名)は参加者で満席となりました。



十時半に開会となり、理事長からは「海から発想し、海に視点を置いて思考できる高校生に本校を目指して欲しい」との挨拶がありました。引き続き入試係長より参加者全員に対して学校および学科の概要説明が行われました。十一時半からは校内の施設見学となり、参加者には思いのままに図書館、資料館、マルチメディア施設などを見学していただきました。しかし、真夏の太陽が照りつける中ででの学内移動には、見ていて申し訳ない気もしましたが、私の心の中で容赦していただきました。ある程度学内を見学

していただいた後、生協において昼食と休憩をしてもらい、十三時から各学科の紹介が行われました。

参加者には学校に到着後、各学科特製のパンフレットを配布して見学希望学科を選定してもらいましたが、すでに意中の学科を決めて参加された方も多かったようです。各学科では学科の目指す教育方針や研究・実験の内容、進学・就職状況の説明が行われました。各学科での研究・実験の案内には各学科で独自の工夫が見られましたが、内容は次のとおりでした。

海洋生産管理学科

二十一世紀の食卓を支える海洋からの生産とは？

関門海峡航路・航海体験

沿岸生態系と魚類の多様性

海洋機械工学科

やってみよう！「遊泳魚の酸素消費量測定」

涼しい熱の世界！

視て触れて燃やしてみよう

燃料油の種類による燃焼の違い
うろこの観察と解析、魚の成長線、うろこのかなでる音？

食品化学科

さかなが好きなにおいと味
海洋生物にはヒ素が……
食中毒菌のDNAと魚からつくった
醤油の働き

たんばく資源としてのお魚を食べると、どうして体にいいの？
今話題の?!セレン
貝からの素晴らしい贈り物：紫色素

生物生産学科

ナマコの呼吸器での換水

ベジタリアン魚類のお食事

魚とエビが生体(からだ)を守るしくみ

水産情報経営学科

海洋環境実験

模擬講義

「どうなる、どうする日本の漁業」

一方学科の紹介とは別に、保護者対象の学校説明会が生協において開催され、これには約五十名の参加がありました。学費、生活費、生活環境、就職、独立行政法人組織などについての質問があり、学校の担当者よりそれぞれ回答がなされました。この場には卒論生三名が参加し、「生の声」が語られましたので、保護者からは理解が深まったものと思います。当日の開催状況については本稿だけでは不十分ですので、学校のホームページで参加者数、参加者のお住まいの県、参加しての感想文、当日の写真などを掲載しました。

「参加して学校の実情が分かり、進路の決定に有益であった」、「水産とは広い分野を相手にすることが分かり、ますます興味を持った」、「キャンパスがきれいで、周囲は自然環境に恵まれている」、「先

生と学生の温かい雰囲気良かった」などくすぐったい感想が多く記されていますが、ありのままに記しただけです。受験生に本校をアピールするためには開催されたオープンキャンパスですが、学校挙げての熱意と実行委員会の周到な準備によって成功裡に終了することができました。この催しが推薦入試ならびに一般入試の受験者増大につながることを期待しています。

以上

第8回水産大学校・釜慶大学校

学術交流懇談会の開催

実行委員長

奥田 邦 晴

本校と韓国の釜慶大学校水産科水産学は起源を同じくしています。そのため本当の意味での姉妹校であることを意識して、一九九五年に学術交流懇談会を発足させました。この交流は、毎年開催場所を交互に移して続けられています。

今年も第八回目となり釜慶大学校側が来日する年で、七名の先生方が来訪されました。学術講演は訪問側がすることになっており、十一月十四日(木)に本校の国際交流会館でシンポジウムが開催されました。シンポジウムは三本管理部長の歓迎の辞、釜慶大学校側の訪問の辞に始まって、計六編の講演が行われました。



水産大学校・釜慶大学校 学術交流シンポジウム

今回の講演内容は本校の海洋生産管理学科と水産情報経営学科に相当する専門分野で、講演されたほとんどの先生が、かつて日本の大学で学位を取得され長期滞在された経験があるので、発表もほとんどが日本語で行われました。シンポジウムには、教職員をはじめ、本科生、専攻科生、研究科生など多数参加し、質疑も多く活発な会となりました。

シンポジウムに続いて、本校のコミュニケーションホールで懇親会が開かれました。教職員約四十名が参加して個々の研究の話題等を交えながら密接な交流がもたれ、盛会裏に終えることができました。

今回の講演内容は、昨年本校側が行った講演内容と併せて日本語と韓国語の冊子としてまとめられ、実質的に実りあるものとして今後とも引き継がれていきます。また、この交流会を通して新たな共同研究が生まれることも交流会の大きな目的であり、今後の研究成果が期待されます。さらに、両校の学生の交流へと発展していけば姉妹校としての意味合いが一層深まることとなります。

この交流会の開催に際しては、両校の多くの方々のご協力があつて遂行することができました。厚くお礼を申し上げます。また、この交流会が水産大学校後援会の御援助で成り立っていることに深く感謝いたします。

講演題目

- 一、一九九七年春期の東シナ海および黄海における魚群の分布特性
- 二、漁船操業情報自動記録装置の開発
- 三、コンピュータを活用した漁具システム設計及び解析
- 四、三千浦水域の竹防簾の漁具構造と海水流動特性
- 五、韓日水産物貿易の展望に関する研究
- 六、水産資源量の推定のための生物経済モデルの適合性評価

就職活動

就職活動の厳しい現実と

学生の意識の落差

就職対策委員長

野田 幹 雄

新規学卒者の就職の厳しさがいわれるようになってから、私の記憶する限りもう六年が経過しています。就職難という言葉は巷に溢れており、就職にまだ関心のない一、二年生でも就職の厳しさは漠然と意識しているでしょう。

大卒者の就職難の社会的背景について、

専門家から共通して指摘されていることは、バブル経済崩壊以降、企業側の新卒採用の基準が、量から質の重視へ変化したこと、新設大学と大学進学者の急増による新規学卒者の絶対数の増加です。需要の間口は絞られているにもかかわらず、供給過剰の状態であるということでしょう。一方で出生率の減少による就職機会の増加も見込めそうにも思えますが、現実には供給過剰です。これは単に需要と供給のバランスだけでなく、企業側が求める労働力が、創意工夫のできる社会的に自立した人材像へと変化していることが大きいといわれています。

今日の就職戦線が買い手市場であることくらい、大半の学生が頭では理解していることでしょう。就職を目前に控えた三年生にしてみれば、ウンザリするくらい聞かされてきたことかもしれません。

しかし、この厳しさを皮膚感覚で感じ取っている学生は少ないのではないのでしょうか。数年間学生の就職活動の様子を身近に見て、その思いを強くしています。戦略的な就職活動ができていない学生は、失敗することが多く、就職の厳しさを身をもって味わった頃には、その年も終わりに近いという有様です。社会へ出る不安など何らかの迷いのある学生は、その態度を面接などでかきとられていきます。企業側の嗅覚は、鋭く冷徹ですが、面接を受けた後になってようやく考えの甘さに気づく学生もよく見られました。

高学歴化の一因として、就職を先延ばしにしたいというモラトリアム期間の延

長という意味合いが含まれていることは、皆さんご存じのことだろうと思います。

就職活動は、社会に向けて就職という目標設定のもとに、自分で工夫し自分の頭で考え動く、初めての実践の場ともいえます。大学三年間をモラトリアムとして過ごしてきた学生にとっては意識革命を迫られるわけです。意識革命ということすら意識できずに、就職に失敗する場合もあるでしょう。

大学の四年間をどう過ごすか、就職に成功するかどうかはそこからすでに始まっているともいえるのではないのでしょうか。

就職活動記

海洋機械工学科 四年

田中 千恵

三年も終わりになった頃、そろそろ就職活動をしなればいけないと思いつつも、何から始めていいものかさっぱり判らなかつた。とりあえずインターネットでエントリーすることから始めたが、本格的に始めたのは卒業論文で研究室に入ってからだった。地元の友達などと話をしていると、自分が如何に遅れているかが判った。水大ははつきり言って田舎という事もある、刺激がなく、都会に比べると随分のんびりしている。私はその中でも遅れていた方だった。かといって焦った訳でもなかつた。そうしている内に、先生から一つの会社を聞き、私の希望にそう会社だったので受けてみるこ

とにした。そして、意外にも早々と決まった。しかしそれまでには、女子であるというところがネックになった。表向きには女子の募集をしても実際は採用しないといった企業もあつたり、説明会で厳しい事を言われたりもした。初めから採用しないと言う会社の方がいくらか良心的だと思ふ。男女差別というよりも、区別なのかもしれないが、性別の違いは大きいものだと感じた。機械なので特にそうであった。しかし受けるにあたり、それを私の欠点ではなく利点として「女子も採ってみようと思わせればよい」とプラス思考で臨んだ。

就職活動を終えて感じたのは、説明会にとりあえず行ってみる事だと思ふ。様々な企業の中身を知ることが出来る絶好の機会である。なかなかそのような機会は後にも先にもない。そして焦ることなく自分のペースでやっていくと良いと思ふ。あと、活動を開始する時期は早いに越したことはない。まず第一歩として、いろいろな企業を知ることから始めればよい。私は運良く、地元の会社で自分のやりたいことが出来るような会社と巡り会えた。卒業して社会人になったら、水大で学んだことを活かして頑張っていきたい。

「自分に投資を」

食品化学科 四年

手塚 博 幾

卒業まじかになって、最近私が考える

とは、もつと自分に投資をしておくべきだったということです。

私の学校生活は、常にその場しのぎのものでしかありませんでした。就職が決まり、将来のことを考える時間が多くなりました。考えれば考えるほど、自分が社会に出たら、いかに無力な存在でしかないかということを感じます。

長い人生の中で学生という甘い時間は限られています。私の場合は大半を、遊びやバイトで金を稼ぐという快楽に費やしてしまいました。得たものはいくつかがありますが、本当に欲しいものではありませんでした。それに気づかず、傲慢であつた自分を情けなく思い、変わりたいと思ふようになりました。

甘い時間が残り少なくて感じてきた私は、空いた時間を自分の嫌いなことをするという戒めの時間にしていきます。心から誇れる自分になりたいと思つているからです。期限を決めて本を読んだり、机に向かって勉強したり、日記をつけてみたり、長距離を走ったりしています。はじめの間もないので偉そうなことは語れませんが、自分自身に投資をすることによって少し違うものが見えてきそうな気がしています。

まだ甘い時間が残されている人は、できるだけ自分自身に辛いことをして投資をしてください。私自身もまだ残されている時間を大切にしたいと思つています。なりたいた自分になるためお互いががんばりましょう。

私の就職活動から

水産情報経営学科 四年

安部 真太郎

「就職活動」は大学生活四年間の最後のビッグ・イベントである。私は民間企業就職の道を選択し、就職超水河期と言われる中で、幸いにも地図企画・製作業界では歴史もあり、また、カーナビなど電子情報産業でも先端を走る「(株)ゼンリン」の内定を得た。ここに私の就職活動から得た感想を、後輩の参考のために記しておきたい。

就職活動には三つのキーがある。一つは求職活動開始の時期。二つ目は面接対策、そして三つは就職活動期の気持ちの持ち方である。まず活動時期だが、早ければ早いほどいい。水大の学生は田舎にいたためか、のんびりしていて、就職活動開始時期が遅い。この点は強調しておきたい。私は三年の十月から始めたのだが、これが他大学では一般的であると思ふ。また、就職活動を始めたものの、希望する職種が見つからないという人も多い。社会はそんなに自分に都合良くはできていないのである。これには、一、三年生次のアルバイトや交友関係等の学内外での経験が職種決定に役立つと思う。二つ目の面接だが、面接官の質問に対してマニュアル通り回答するより、自分のオリジナルな考えを伝えることの方が大切である。また、面接では予想しない質問をされるのが常である。こうした

事態に冷静、的確に答えることが重要である。この点は学生がディスカッションやプレゼンをする授業科目が少ない水大生の弱点である。自主的な調査や発表の機会の多い授業があれば、必ず受講することである。

最後に気持ちの持ち方だが、後輩達には忍耐強く、謙虚な気持ちで活動を行って欲しい。自力で就職を決めようとするれば、十十五社の不採用通知は当たり前。五、六社も落ちるとかなり落ち込むが、逆にそこが勝負どころである。「この会社は落ちたけど、新しくこの業界の知識をゲットできた!」とか、「今回の面接ではこんな質問されたから次回に生かそう!」というくらいのプラス思考が必要である。

以上、私が就職活動から得た考えを述べたが、就職活動に王道はない。各自が独自のコンセプトで、大胆かつ繊細に、恐れずひるまずの精神で乗り切って欲しい。

在校生の声

水産大学校に入学して

生物生産学科 一年

大里 純

海には様々な種類の生物が棲んでいます。陸上に存在するものとは全く形が異なったものなど海ならではの生物が多く生息しています。もともと海の生物を全

般的に学びたかった私にとって、生物生産学科はうってつけの学科です。

水産大学校は海で囲まれ、山々が近くにあって、自然が大好きな人にはたまらない環境だと思います。夏には近くの川でホタルを見ることができたり、天気の良い日には釣りに行ったり、海女に扮して海に潜って日本海の海の幸の味覚を楽しむことができます。

授業内容は一般教養科目から専門科目まで、広い範囲にわたって学ぶことができます。専門科目は公務員試験などに対する基礎知識を得ることができます。科目が多様多様であるため、自分が将来どんな研究をしたいのかと選択する上で最適な環境です。

本学科では、実験や実習などもカリキュラムの中に多く含まれています。実験では生物研究を行う上で必要となる基礎的な手順が理解できるし、共同で行う作業が多いため、クラスの友人と協力していく上で仲良くなれます。実習では臨海実験実習場に行ったり、乗船して海洋環境を観測したりします。その中で、今までに体験したことのないことがたくさんあり、教員とも酒を酌み交わせる仲間になったことは驚きでした。

将来、研究職を目指す人は、この水産大学校での生活の中で、楽しく自分のやりたいことを見つけることが必ずできると思います。現在、食料不足や環境汚染などの諸問題がありますが、自分達でそれらを解決する糸口を探してみたいものです。

今、思うこと

海洋生産管理学科 二年

西 奥 芙沙子

私が水産大学校に入学して、大学生活の半分が過ぎようとしています。これまでの毎日は瞬間に過ぎていきましたが、今、私がふと思うことは何をするために水産大学校に来たのかということでした。

私は高校時代に海洋環境や海洋資源について興味を持ち、水大を選びました。毎日、出席している講義の中で新たに興味を持った分野も出てきました。また、勉強だけでなく所属している水泳部では副部長を、バイト先では二年目というこ

とで後輩を指導したり社員と同じ様に帳簿を書いたりする責任あるポジションを、休日には大好きな宝塚を観に出かけることもあり、とても充実した日々を送っています。しかし、これらの日々の中で、授業、クラブ、バイト、そして趣味に対してどれも中途半端になりつつあるのも事実です。これはひとえに、気持ちの緩みから生じる、自分に対する「甘さ」が出てきたことが原因のように思えます。就職活動を控えた今、この「甘さ」は私が将来就きたい職業を目指す上で、絶対に取り除かなければいけないものと思っています。1日24時間という短い時間に多くの事をするには、やっていることに集中して短時間で対処する必要があります。しかし、長期的に見た場合、すべてのことと同じように集中することは不可

能です。やはり、やることに優先順位を付けるべきでしょう。今、私は何を優先すべきなのかというのを考えていたら、勉強するために水大に来たという思いが、私の中に強くあることに気づきました。就職という新たな目標に向かって、初心に返り、残りの大学生活をバランスよく柔軟に物事に対処して過ごしていきたいと思っています。

魅力ある学園生活

水産情報経営学科 三年生

成 松 正 和

水産大学校に入学した当初、私は周りに海と山しかない環境での大学生活に不安を感じていました。そして入学して早くも三年の月日がたとうとしています。今では水産大学校や、この環境に多くの魅力を感じ、とても満足しています。なんと、いって大学目の前は海ですし、しかも、水産大学校の周りは海水浴場が多いので、学校が終わった後や休日に、気軽に海へ泳ぎに行くことができ、とても素晴らしい夏を過ごすことができます。この環境は水産大学校ならではの、他大では味わえない学園環境だと思っています。

また、他大では決して経験できないことが、乗船実習です。私の属する水産情報経営学科では、三年次に一〇日間程度の乗船実習でしたが、今後、社会人となってからも為になる多くのことを経験しました。また、久しぶりの団体生活で、

高校時代の寮での団体生活を思い出し懐かしくもなりました。団体生活経験のなかった学生も規則のある乗船実習の団体生活を通して、それまでの自由で制約のない生活に起因する自分への甘えや、他人を気遣うことの大切さ等に気づき、自分の考え方を変えていく、良いきっかけになったと思います。総じて楽しい乗船実習でしたが、私にも他の学生にとっても、自分自身を見つめ、鍛えなおす道場でもあったと思います。

水産大学校は他大学よりは規模も人数も少ないのですが、そのかわり学園内が高校のような感覚で親しみやすい雰囲気ですので、多くの信頼できる友人を得ることや、一生の友を得ることができ、私自身はこれまで楽しい学園生活を送ることができました。四年生になるこれから先は、就職活動などで忙しくなりますが、水産大学校で学んできた、他大学にはない特殊な科目が生かせるような水産系の職種に就きたいと思っています。

卒業生の声

近況報告

鈴木 隆

(海洋機械工学科五十一期卒)

はじめまして。私は社会人になり二年目の海洋機械工学科五十一期生の鈴木隆です。現在、私は築地市場の水産物卸売会社・中央魚類(株)海老課に勤務して



水産大学校を卒業して

ケンコーマヨネーズ株式会社
総務本部人事総務部

古城里佳
(製造学科三十九期卒)

製造学科は食品化学科となり、ホームページの写真は当時の面影もなく、卒業してからの年月を感じます。でも、学名が変わろうとも、食品業界で働く有用な人材を育成する学科であるという事には変わりはありません。

数ある水産系学部の中で、海に近く囲まれている大学は水大校だけと言われています。学生時代は自然が多いとしか思わなかった環境ですが、今振り返ると、現場に近いという事は、仕事をする姿勢の中で、大事な事と感じています。現場を知っているという事は、評論家ではなく実践家であるという事で、社会人として一番の強みではないでしょうか。現場主義・実務者という事は、今食品業界に求められている事の一つだと思います。私は、食品メーカーに入社した時の希望は、学生時代勉強した事が生かせる職種という事で、商品開発・品質管理を希望しましたが、配属されたのは経営企画

室という思いもよらない部署でした。同期入社の中には、希望職種に配属されない事で退社した人もおりましたが、やるだけやってみよう、退社はいつでもできるとの思いで職務につき、はや十四年になります。部署異動が多く、色々な職務を経験致しましたが、今は二年程前から、人事総務の仕事に携わっております。

この度の出稿で、卒業生の一人として、先輩達が働く為の受皿を作る立場の一員と感じ、そして、現場で培った学生時代の経験を生かして応えてくれる先輩を待っています。

研修生の声

研修に参加して

山口県立水産高等学校 教諭
恋塚 信一

二〇〇二年夏、新産業技術者指導者講習会が、私の母校である水産大学校で行われると聞き参加させて頂いた。参加者は、全国の水産高校に勤務する十七名であった。

私が、水産大を卒業し早いもので十年になる。十年ひと昔とよく言ったものだ。キャンパスに昔の面影はなく寂しさを感じていた私だが、全く変わっていないのもそこにはあった。昼、学食に足を向けると「ああ、久しぶり今何してるの?」と笑顔で振舞ってくれたおばちゃん達の温かさである。学生時代の懐かしさを感じ

じた。

私はこの研修で、たくさんの方を学んだ。①水産と工学の連携②水産(海・船)における環境問題③基礎・基本の徹底である。我々の勤務する水産高校では「特色ある学校づくり」に今、頭を悩まされている。昔と違い水産離れが進む中私は、この研修で得た知識・技術を今後の教育に生かし、多くの生徒に水産(海・海産物・船)への興味・関心を持たせたい。

最後に、研修中に、ご指導頂きました海洋機械工学科の先生方には心からお礼申し上げます。また、このような機会があれば参加させていただきたいと思えます。

新任紹介

水産大学校に着任させて頂き

一年たちました

食品化学科助教授

原 田 和 樹



平成十四年四月一日付で、食品化学科食品利用学講座の助教授として着任させて頂き、早一年が過ぎようとしておりま

す。まだまだ慣れたとは言えない状況ですが、近況をご報告させて頂きます。

この一年間、卒論生三人を迎えて、研究を進めてまいりました。どの様な研究かと言いますと、まず、魚醤油などの発酵食品が持つ抗酸化能の研究です。魚醤油は、日本も含めての東南アジアの伝統調味料なのですが、今は、大豆で作った醤油が家庭では主流ですので、もうご存じない方も多いいかもしれません。ただ、最近、魚醤油はグルブroomやエスニックブroomで注目を集め始めております。

皆様方も、タイの「ナンプラー」やベトナムの「ヌクナム」という名前を聞いた事があるかもしれません。その魚醤油に癌を予防する力がある事を見つけました。もう少し詳しく述べますと、私達は、酸素なしでは生きていけません。その私達に絶対に必要な酸素が、時として、活性酸素(フリーラジカル)と呼ばれるもの

になって、私達の体に癌を引き起こすなどの悪影響を及ぼすのです。そこで、体の中の余分な活性酸素を取り除いてやる必要があるのですが、その活性酸素を取り除く能力が魚醤油にある事を発見したのです。今、ケミルミネッセンス(化学発酵)法や食品化学科に設置してあります電子スピン共鳴装置(EPR)を使って更に研究を進めているところです。

一方、水産業の中で大きな課題の一つであります魚介類の鮮度保持の研究にも取り組んでおります。高速液体クロマトグラフィー(HPLC)という装置を使って、山口県近海魚種、例えば、ケンサキ

イカやマアジ、フグを実験材料として、如何に鮮度を保って消費者へ届けるか、その方法の開発に取り組んでおります。

どうか、お近くにお越しの際は、ぜひ研究室へお立ち寄り下さい。今の食品化学の研究に触れて頂ければと願っております。

着任のご挨拶

海洋機械工学科助手

平 雄一郎



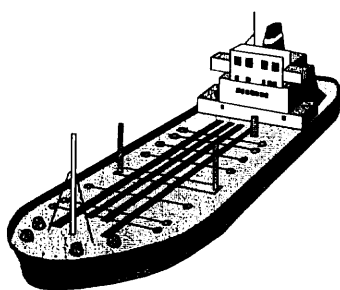
平成十四年四月一日付で海洋機械工学科の助手として着任いたしました。同年三月に九州工業大学大学院工学研究科において学位を取得したばかりの新卒でございます。着任当初は環境の違いにより戸惑うことが少なからずありましたが、着任後九ヶ月を過ぎた現在、周囲の方々の心温かい手助けにより、ようやく本校に慣れることができました。

大学院在学中における私の研究テーマは「宇宙ロボットのデジタル制御に関する研究」でした。着任後はこれを生かして「自律型海中ロボットの制御手法に関する研究」に取り組んでおります。海洋調査・開発においては、安全性および効率性の側面から人間ではなく、海中ロ

ボット、特に、人間の腕に相当するマニピュレータを有する自立型海中ロボットの利用が必要となります。そこで、そのマニピュレータの手先位置・姿勢を制御する方法を開発しようとしています。

教育活動としましては、海洋機械工学実験、海洋環境工学実験など、実験の授業を主に担当しております。講義形式だけでなく、実際の装置を使用する実験形式の授業も重要です。また、装置を操作して得られたデータを解析する方法を習得できます。さらに、第三者に分かり易い報告書を作成する能力は必要です。このように、実験形式の授業も講義形式の授業と同様に重要でありますので、担当している実験授業に微力非ながらも全力で取り組んでおります。

最後になりますが、少しでも本校の発展に貢献できるよう日々精進していきたくと考えております。私はまだまだ若輩者でありますので、皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。



大 学 祭

二〇〇二年海燕祭を振り返って

大学祭実行委員長

平 山 聖 人

(食品化学科 三年)

大学祭実行委員としては三年目、実行委員長として臨んだ今年度の海燕祭もあつという間に終わってしまいました。

今年は吉見地区の方はもちろん、学生の参加が多く大学内は大変にぎわっていました。また、今までにない独自性をだした海燕祭だったと思います。大学祭の成功の背景には、下関・吉見地区との大きなつながりがあったからだと思います。五月の海峡祭り、六月の吉見ホテル祭り、八月の吉見祭り、海峡花火大会、馬関祭りなどの活動に参加することにより、多くの方々に出会い、大学祭のPRから物品提供まで様々な面で協力していただきました。大学祭を運営するには、たくさんの方の協力が必要なんだと身をもって学びました。それらの人と出会って行くことで、私自身も大きく成長することができたと思っています。

こういった地域の人たちとのつながりはもちろん、海燕祭を成功させるためには我々実行委員の団結力が、一番大きかったのではないかと思います。自己主張ができるメンバーに恵まれみんなの意見を聞き、取り入れながらよりよいものを目指し頑張ってきました。メンバーど

うしが大学祭の活動だけでなく、外でも一緒に語り、飲み、遊びに行ったりし、本当の仲間としての関係も築くことができたと思います。そして、エンディングで見たみんなの涙は、この海燕祭がどれだけ素晴らしいものであったかを物語っています。

二〇〇三年の海燕祭が前年を遙かに凌ぐくらい大きくなることを、そしてこの素晴らしい海燕祭が受け継がれ続いていくことを願っています。

ク ラ ブ 紹 介

水 泳 部

阪 田 一 郎

(海洋機械工学科 二年)

僕が水泳部に入ってもう二年になります。

この学校に来た当初、正直言ってサークルや部活などあまり関心がなかったのですが、学校前の海を見ているうちに、どうせなら「泳ぎ」が出来るものにしよとここに決めました。

部員の中には、高校時代からの延長でより泳ぎを極めようと努力している人もいて、周りの意識を感化してくれています。

一方、この学校は水産系ということであり、各学科共に海技実習を設けているのですが、実のところ水泳が苦手という人も少なくないようです。そんな理由か

ら入部を希望してきた人もいます。そのような人も夏頃には充分泳げるようになっていきます。そういう僕も泳ぎが得意だった訳ではありませんが先輩の教えもあり、人並みに泳ぐことが出来るようになりました。

水泳部の活動期間は、主に夏の間までです。幾つかの大会にも参加しており、十四年度は特に、女性陣の活躍には目覚ましいものがあり、日々頑張っています。競泳は、個人競技ではありますが、一度水から上がれば仲間達が居てくれて、心底ほっとさせてくれます。一人で成し遂げようとしてもそれを支えてくれるのは周りの人達であるということ

を僕は忘れないようにしています。この学校のプールは、桜並木の坂を上って行く校内では一番小高い所にあります。水産系ならではの特殊なプールではありますが日々頑張っております。さらに、一年を通して、隣接の自衛隊の室内プールも利用させてもらっています。

この先も仲間や先輩方共々、日々精進していきます。

「今年度 水泳部の主な成績」

○中四国学生選手権水泳競技大会

女子二〇〇メートルバタフライ

三 位 佐野みな美

○市民水泳選手権大会

総合二位 女子の部



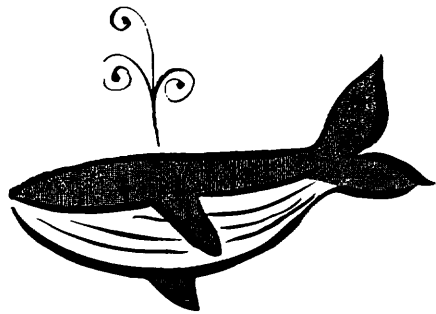
学 生 部 だ よ り

平成十五年度の就職対策と

現状について

最近の日本経済は、代表的な景気指標である鉱工業生産指数が昨年十二月で四カ月連続でマイナスになったことなどから、足元の景気に関して悲観的な見方が強まっています。こうしたなか、情報関連技術(IT)不況の影響を大きく受けた電機業界などをはじめとする製造業の収益の低迷が大きく目立っています。こうした景気動向の影響を直接受けるのが企業の新卒採用です。平成十五年度の企業の新卒採用は、これまで堅調だった理工系でも昨年を大きく下回りました。平成十六年度の新卒採用も企業側の採用スタンスとしては依然として「厳選採用」を堅持する企業が圧倒的であり「採用定数の確保」よりも学生の質を優先し、「良い素材を厳選して採用する」傾向にあります。しかしながら、若年人口の減少、学生数の減少、学生の就職意識の多様化など、さまざまな影響が生じ、新卒採用企業もその基準をクリアした満足度のいく人材がなかなか確保できていない状況にあるようです。むしろ厳選採用の採用スタンスを維持することで優秀な学生を確保していこうとしています。

こうしたなか、企業の求人活動は年々早期化し本校においても既に平成十五年度卒業予定者を対象とする企業からの求



人が多数寄せられています。また、平成十四年度に本校で開催された求人企業による会社説明会は二月に始まり四月から五月をピークに開催され、多数の学生が参加しています。

これらの状況を踏まえ本校では、学生に対し企業情報の迅速な提供とともに学内に就職対策検討委員会を常設し、「特別講演」等の就職ガイダンスの開催（七月・十一月）、就職手引き書の配布などに、各学科に就職指導担当教員を配置し個別に就職指導、相談を行っています。

また、公務員をめざす学生には、公務員試験情報の提供並びに当年度公務員試験合格者を講師として公務員試験の傾向と対策について特別にガイダンスを実施するなどの取り組みを強化しています。

なお、平成十四年度の卒業予定者の就職内定状況は別表のとおりです。

平成14年度 卒業・修了生の進路状況

平成15年 3月14日

学科・専攻科・研究科	卒業 予定者 数	進 学 関 係						就 職 関 係									※ そ の 他
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	研 究 生	そ の 他 の 進 学	計	国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	水 産	船 舶	造 機 ・ 造 船	食 品	そ の 他 の 企 業	計	
水産情報経営学科	14	1	2	0	0	1	4	0	0	1	2	0	0	0	2	5	5
海洋生産管理学科	38	0	2	13	0	0	15	1	2	0	5	1	0	2	3	14	9
海洋機械工学科	35	2	1	14	0	0	17	1	1	1	3	1	4	0	3	14	4
食品化学科	47	4	1	0	0	0	5	0	1	0	10	0	0	22	1	34	8
生物生産学科	31	4	2	0	3	1	10	3	4	2	5	0	0	5	1	20	1
小 計	165	11	8	27	3	2	51	5	8	4	25	2	4	29	10	87	27
専攻科 船舶運航課程	10	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	2	0	0	0	6	3
専攻科 船用機関課程	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	2	0	0	5	1
小 計	16	0	0	0	0	1	1	1	2	1	1	4	2	0	0	11	4
研 究 科	5	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	2	0	4	0
合 計	186	12	8	27	3	3	53	6	10	5	28	6	6	31	10	102	31

〈分類内訳〉

各種団体＝水産関係各種団体
水産＝水産関係・関連企業
船舶＝船舶・海事関連企業

造機・造船＝造機・造船関連企業
食品＝食品関係・関連企業
その他＝公務員や海技試験受験等の準備など

平成14年度卒業予定者進学・就職内定状況一覧表

平成15年3月14日現在

Table with 4 columns listing graduates and their destinations. Columns include university names, specific departments, and the names of the receiving institutions or companies.

平成十五年度入試状況

本校の平成十五年度入試状況をお知らせします。

推薦・一般入試の志願者総数は、九百三十六名で昨年度を三十九名上回る結果となりました。

一般入試の学科別の応募状況は、水産情報経営学科五十三名（募集人員十四名に対する倍率三・八倍）、海洋生産管理学科百四十六名（募集人員三十名に対する倍率四・九倍）、海洋機械工学科百五十二名（募集人員三十二名に対する倍率六・〇倍）、生物生産学科三百八十八名（募集人員二十一名に対する倍率十八・五倍）で、海洋生産管理学科、食品化学科及び生物生産学科が前年の志願者を上回った。

また、先に行われた推薦入試には、百二十五名が応募し、五十二名が合格した。

一般入試は、平成十五年二月十一日に下関・東京・大阪の各試験場で実施され、二月二十四日に合格発表となった。

次年度以降も少子化が進む中で、オープンキャンパス、高校訪問及び公開講座等の広報活動を充実させ、本校の特色と個性豊かな教育方針を全面に打ち出し、受験生に魅力ある大学校となるよう一層の努力をして参る所存であります。

人物往来

(敬称略)

平成十四年度

【講演】

五月二十日

農林水産大臣

武部 勤

十二月二日

ノルウェー・トロムソ博物館助教授

ロバート・バレット

【水産特論講師】

七月三日

水産庁資源管理部管理課 課長

中尾 昭 弘

九月四日

水産庁資源管理部国際課 課長

森 多可志

十月二十三日

水産庁漁政部水産経営課 課長補佐

沖 和 尚

十二月三日

水産庁漁政部企画課 課長

山根 祥 生

一月二十二日

水産庁増殖推進部研究指導課 課長

末 永 芳 美

【叙位・叙勲】

四月二十九日 勲三等瑞宝章

故 前 田 弘

十一月三日 勲三等瑞宝章

河 内 正 通

【名誉教授】

四月二十五日 大崎 榮 喜

(前 海洋機械工学科長)



独立行政法人
水産大学校
☎759-6595
下関市永田本町2丁目7-1
発行
学園だより
編集委員会
電話0832(86)5111

水産大学校の中期目標および中期計画について

水産大学校理事長 二本菅善昭



本校は平成十三年四月に独立行政法人に移行しました。このことについては既にご存知のことと思います。これによって、本校は農林水産省附属文教施設から農林水産省所管独立行政法人となりました。

独立行政法人は、従前と同様に主に国の予算によって運営されますが、異なるところは、行政組織から独立し、法人が自立的に管理運営することにあります。そのため、独立行政法人水産大学校には、従前はなかった理事長、理事、監事が置かれ、自立的な管理運営と、その結果の責任が明確化された一方、農林水産大臣

が任命した評価委員による事後評価を定期的に受けることになりました。

独立行政法人の責任の明確化と評価委員による適正な評価のため、その業務実績・成果を抽象的ではなく具体的に把握する上で必要な中期目標と中期計画を、事前に定めて公表することが各法人に義務づけられています。

現在、主務大臣である農林水産大臣が定め本校に指示されている五年間で達成すべき中期目標と、それを実現するために本校自身が作成し大臣の承認を受けた五年間の中期計画に基づいて、本校は運営されており。なお、本校の中期目標と中期計画の内容は、本校のホームページ等で公表しておりますので、ここでは紙面の関係で省略させていただきます。また、本校の中期計画を具体的に実施するため各年度の計画を定めて公表しております。

本校は独立行政法人になって約三年が経過しており、既に平成十三年度及び平

成十四年度の業務実績・成果については評価委員会の評価を終えておりますが、両年度とも年度計画に示した評価項目の殆どがAとされており、それらを総括した総合評価もAと高い評価を得ておりますので、ご安心下さい。

なお、中期計画で施設建設が認められ、平成十四年度に男子寮の個室化などへの大幅改築と女子寮の新設が行われており、新年度から新しい寮での快適な学生生活を送れるものと思っております。また、耕洋丸の代船建造も中期計画にあげられており、内田理事を中心代船建造委員会にて検討を進めておりますが、国の財政が極めて厳しい状況下での建造となるため、実現に向けて各方面のご理解とご支援をお願いしているところであります。

ところで、全ての国立大学は本年四月から法人化することが決定しており、多くの公立大学も独立法人化の検討が行われるなど、長い歴史を持つわが国の国立大学制度が大きな転換期にあります。独立行政法人となっても、国や地方公共団体の予算を主体に大学が運営される基本方針に大きな変化はありませんが、法人化はわが国の社会経済の変化と少子化時代の流れの中での改革と認識し、生き残りのためには個性化と競争力強化が強く求められています。

二十一世紀の人類の課題は、食糧問題と環境問題とされていますが、この二つの問題解決のため海洋の役割は極めて重要であります。

本校は、海に関する諸問題に対処する

との視点で人材の育成および研究を行っており、本校の役割は二十一世紀において益々重要になるとの確信のもとに、実学重視の伝統を踏襲しつつ、産業構造や社会ニーズの変化に柔軟かつ能動的に対応できる創造性豊かな産業人を育成するため、農林水産省所管の独立行政法人の利点を最大限に活かして職員一同努力をしております。関係各位におかれましては、変わらぬご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最近の話題

水産大学校における

FD対応について

FD対応委員長

上野 俊士郎

FDとは、アメリカ合衆国で用いられている Faculty Development の略語で、「教員能力開発」や「教員の資質開発」などと訳される一つの教育改革で、その目的は「教員の教育レベルの向上」です。具体的には「学生に役に立つ内容をわかりやすく教授し、また学生の学習意欲を高めるとの意識をもって講義に当たること」(農学教育に関する基準、大学基準協会農学系教育基準検討委員会)と記述されています。その方法として、講義内容が分かるシラバス(開講科目の講義計画書)、双方向的な授業、オフィスアワー(質問受付時間)、学生による授業評価、

教員のFD研修、ホームページによる講義内容等の公開、及び国際的教育研究交流等がありますが、これらは現在主に行われているFDを狭義に捉えたもので、広義には研究、社会的貢献、学校の管理運営や学生指導等もFDの対象とされています。

皆さんの多くがFDという言葉の出現を唐突に感じておられるでしょう。今までの日本の大学は極端な研究偏重と教育軽視にあったと言われ、卒業生の教育達成度は強く要求されない傾向にありました。これに対して現在大学進学率は五〇%を超えようとし、高等教育の大衆化、学生の多様化、教育の質的充実の要請、学生人口の減少による存続の危機などの大学を取り巻く環境が、教員の教育レベルの向上を目的とするFDを要求していると思っっています。

さて、水産大学校でのFD対応は、平成十四年度から組織的に始動し、平成十五年度からは各学科の教員等で構成される委員会検討し実施しています。現時点での対応の大きな三本柱は、学生による授業評価(アンケート)、教員のFD研修と適切なシラバス作りです。いずれも昨年度から試行的に行ない、改正改良を加えながら水産大学校のケースによく適用したものを作製・対応しようとしているところですが、授業評価では実際に全学生に講義と実験のアンケートに答えて貰いました。その結果は教員に集約されて戻り、今後の授業の改善に活かされています。本年度のFD研修は、教員にF

Dについて認識を高めてもらう目的で、FDに詳しい福岡歯科大学の藤教授に「FDとは何か、その意義と方法」の演題で講演をして頂きました。またシラバスは、学生との間に交わされた契約でもあり、授業内容を分かりやすく示すことと実施内容と相違があつてはならないことを基本要件として作製しています。

水産大学校におけるFDへの取り組みは始まったばかりですが、よりよいFD対応を行うことで優れた教育効果を生み出したいと考えています。学生の皆さんはアンケート用紙やシラバスが手許に来たときは、水産大学校のよりよい教育環境の構築のために、また学生の立場からよりよい教育を受けるために、ぜひしっかりと目を通し、前向きな対応をお願いしたいと思います。

天鷹丸第一三四次航海 (大韓民国釜山寄港)について

水谷 壮太郎
天鷹丸船長

生物生産学科平成十五年入学生三十一名を乗船させて、海洋環境観測実習を実施しました。洋上での調査方法の習得と海洋環境データの収集及び解析方法の習得を主目的とし、また、船舶運航に関する船内諸作業の実務を体験して、水産人としての幅広い人格の形成と基礎的知識を習得し、さらに、団体生活を通して協調性・寛容性を養いました。十一月六日に下関を出港してから十一月十六日に

帰港するまでの間、大韓民国釜山に寄港、十一日間、総航程七二三海里の航海でした。指導教員として生物生産学科上野俊士郎教授、滝澤敬助教授の二名が乗船しました。なお、本校練習船天鷹丸の釜山寄港は、初めてのことでした。今航海の概要をご報告して、ご父兄の皆様に乗船実習がどのように行われているかを少しでもご理解していただけたら幸いに存じます。

移動性高気圧に覆われ秋晴れの空の下、十一月六日十時五十分に関門港下関区岬之町防波堤岸壁を出港し、第一三四次航海を開始しました。関門海峡西口を出て、六連島を左舷に見て北上し、十三時三十分山口県豊北町の角島を経て、日本海西部の竹島南方海域に向かいました。二十時からは六班に分けられた乗船学生は、四時間交替で実際に船橋当直に入り、船がどのように運航されているかを体験しました。また、計画された観測地点においては、次の海洋観測実習を行いました。

- ①CTDによる観測：センサーを海中に沈めて各層における海水の塩分、水温、溶存酸素量、密度の計測
 - ②XBTによる観測：航走しながら海中各層の水温の計測
 - ③ロゼット採水器による各層採水
 - ④透明度板を沈めて海水透明度の計測
 - ⑤水色計目視比較による水色計測
 - ⑥採水バケツ法による表面水温計測
- 以上の海洋環境調査のほか、次の網を曳いて海洋生物採集を行いました。

①MTDネット：元田式ネット、観測用ワイヤーに複数個の採集ネットを取り付けてワイヤー傾角が四十五度となるように速力を調整して二十分間任意水深のプランクトン類を採集

②稚魚ネット：日没後に速力二ノットで二十分間、表層の稚仔魚類を採集その後、漁業実習として手釣りによるイカ釣り実習を行いました。

下関を出港して三日目に低気圧の接近と冬型気圧配置とで北東の風が十三m/秒となり、また、波高が六mを超えるうねりが押し寄せ、船体の横揺れが大きくなり十五度ほど傾くようになりました。その後の観測は危険と判断し、十一月九日に山口県北西部にある油谷湾に錨を投入して、波がおさまるまで避泊することとなりました。一夜明けて風は次第に弱まり、正午過ぎには東風二m/秒の微風となり、十五時に錨を巻き揚げて再び観測点に向かい、その途次MTDネットに取り付けた濾水計の較正を行いました。しかし、東シナ海に低気圧が発生して東風が強まり、波高が二mを超えるようになってその後の時化が予想されました。十一月十二日の釜山港入港が間近に迫っているため、観測を断念し西に航走して十一月十一日九時二十一分に福岡県対馬西岸の仁田湾にて投錨避泊することとなりました。その後、大陸の高気圧が勢力を増し西風が十三m/秒と強くなったため、錨を揚げて対馬の東岸に回り込みました。翌日十二日七時五十六分港口で水先人を乗船させて、八時三十分釜山港西部地区

の水産物冷蔵庫・冷凍庫施設が建ち並ぶ甘川港東側第三埠頭三十二番岸壁に着岸しました。荷役をする漁船で岸壁は全て埋まり、岸壁に横付けする船にさらに横付けしている船も見られました。ほとんどがロシア船籍の冷凍運搬船やトロール漁船でした。入国手続きを済ませた後、釜慶大学校水産科学大学の朴南奎教授、釜慶大学校水産科学大学の朴南奎教授、釜慶大学校水産科学大学の朴南奎教授、釜慶大学校水産科学大学の朴南奎教授の歓迎を受けました。その後、先に関釜フェリーにて到着した水産大学校学生部長濱口先生と共に在釜山日本総領事館を表敬訪問し、今井領事から治安状況や注意事項を受けて、直ちに帰船して上陸に当たったの諸注意を乗組員及び乗船学生に周知徹底させました。

二日間の大韓民国釜山港停泊中において、乗船学生は本校と起源を同じくする釜慶大学校を訪問・見学し、同大学校生とサッカーを行い交流を深め、また、同校で行われた本校との学術交流会も聴講しました。また、同市の水産市場等も見学し見聞を広めました。

十一月十六日十時下関に予定通り帰港しました。十一日間の共同生活を通して、同級生として打ち解け会えたことと思えます。毎朝六時三十分起床して体操、掃除を行った後、食事、課業という規則正しい船内生活で、自己を抑えての協調性、寛容性を習得し、また、自由時間とのメリハリをつける習慣も船内生活の言動から少し身に付いたように感じました。そして、初めての乗船で、多くの学生が船酔いの苦しみに耐えながらも実習を成

し遂げ、一段と精神的に成長したと感じられました。

また、今航海を期に今後さらに両校の練習船がお互いに行き来し合えば、さらに学生の国際的感覚が養われると共に、学生同士の交流もより一層発展して行くことになると思います。練習船の役割、利用について、ご父兄の皆様にもご理解とご協力をお願いしたいと思います。

「第二回地域水産加工技術セミナー」本校で開催

食品化学科教授

浜田 盛 承

昨年十一月、水産庁・水産総合研究センター・水産大学校が中心となって、地域水産加工技術セミナーが本校で開催されました。このセミナーは「水産物の安定供給の確保」、「水産業の健全な発展」など水産基本計画の実現を大きな目標として、水産加工業や水産流通業等の基盤を強くすること、「食」についての国民の様々な要求に対する対応などについて話し合うということで企画されたものです。

第一回は昨年六月に八戸で開催され、本校での開催はこれに次ぐ第二回目となりました。このセミナーを行うにあたり、山口県や下関市、地元の漁業団体や水産加工団体の協力も得られ、自治体・漁業団体・水産企業で働いておられる方々や本校の学生・職員、併せて約三〇〇人の参加で、会場となった共同研究棟内の多目的ホールは満員となりました。学生諸

君の参加比率は極めて高く、水産加工の現状を見たり聞いたりしようという意気込みが感じられました。

今回のテーマは山口県で開催されたということもあり、「地域水産加工品のブランドづくり in やまぐち」と設定されました。セミナーは三部から構成され、第一部は「知っておきたいこれからの衛生管理」、第二部「ためしてみたい新しい水産加工技術あれこれ」、第三部「最新のリサイクル加工技術の紹介」ということで、併せて五件の講演とそれぞれに対する質疑が行われました。

第一部は衛生管理と品質改善を通しての商品のブランド化についての話（大日本水産会・高鳥直樹次長）、第二部は①小田原かまぼこのブランド化の歩みと今後について（榎丸う田代・田代勇生社長）、②山口県の地の魚を活かした付加価値の高い加工品づくり（山口県水産研究センター・嶋内潤研究員）、③水晒しをしながらかまぼこの製法（筆者）、第三部は水産加工廃棄物の高付加価値化（中央水産研究所・中村弘二部長）という内容でした。今回大きな目的と意気込みをもって取り組まれた水産加工のセミナーでしたが、「食」に関わる様々な分野で多くの方が限りある水産資源の有効利用、商品の高付加価値化、安全・衛生管理等について積極的に取り組んでおられる様子を見聞きすることができました。このことを通して私は自分の今後の仕事（教育と研究）を考える上で、非常に有意義であったと思っております。

就職活動

水産大学校における学生の就職活動への支援状況

就職対策委員長

中島 邦 雄

水産大学校では、学生が就職を社会における自己実現の機会ととらえ、少しでも早い時期から就職活動を開始するように、また、長い就職活動の途中挫折することなく自らの意志を貫くよう、様々な支援活動を行っています。

企業に対しては、企業向けの情報誌に本校をPRし、また教職員が、各学科のこれまでの実績をふまえて水産関係の企業を訪問し、求人をお願いしています。さらに自治体や企業主催の就職関係の会合へも関係教職員が出席し、常に就職戦線に関する最新の情報を得るよう努めています。

学生については、三年次になった段階で次のような活動を行っています。一般企業への就職希望者に対しては、夏休みをはさんで専門講師による二回の就職ガイダンスを実施し、その際三年生全員に就職手引書を配布しています。公務員受験希望者には、公務員受験専門学校の授業を学内で、しかも安い費用で受けられるよう便宜を計っています。また、本校の公務員受験合格者によるガイダンスも実施しています。

各学科による学生への就職指導では、

学科長、担任教員、卒論指導教員を中心に教員全員がその任に携わっています。就職作文の添削、面接指導、就職活動体験者によるガイダンス等の具体的な在り方や方法には、各学科の特性とこれまでの経緯に応じて違いがあります。しかし就職対策委員会を通じて学科間で情報を提供しあい、学生課の作成する就職進路状況のデータをふまえて、各学科とも学生一人一人の資質や希望に応じた指導を行っています。

以上のような就職支援活動を通じて、本校はこれまで高率の就職内定率を維持してきました。今後とも厳しい就職難が予想される中、大学としての就職対策への取り組みを一層強化し、これまで以上の実績を挙げるよう鋭意努力していきたいと考えております。

就職活動記

海洋生産管理学科 四年

田 中 順 子

私が就職活動を開始したのは、三年生の十二月頃だった。当初、自分が何をやりたいのか全く分からず、ただ漠然とした不安の中で、とにかく何かを始めなければという焦りばかりが先走りしていた。今考えると、はじめの頃は就職活動のマニュアル本を読み、インターネットを利用して興味のある企業にエントリー(資料請求)しているだけで、就職活動をした気になっていた。そして、刻々と時間だけが過ぎ、先が見えなくなってしまう

た私は、もう一度原点に戻って「自分が何をやりたいのか」深く考えることにした。具体的には、大学生協主催のスチューデントEQ(自己分析テスト)を受け、自分が今どういう事に心動かされるのか傾向を捉えたり、親や友人に自分の長所や短所を聞いたりして、少しずつ、自身を真剣に見つめなおす時間を増やした。また、本やインターネットを利用するばかりではなく、会社説明会やOB訪問をして、自分の目、耳、足を使って動くように努めた。そして、ついに、私は自分が本当にやりたいことを見つけたことができた。あとは、自分がやりたい事を仕事として実現できる企業を見つけてだけであつた。就職試験では、如何にして自分の意見を面接官に伝えるのが成功への大きな鍵となるが、私自身いい意味で遠慮せずに自分の考えを正直に伝えることができたと思う。

就職活動は私にとって、自分の意見を人前で伝える初めての経験であつた。そのため、就職活動をはじめた頃のOB訪問や就職試験の面接では、自分の甘さや根気の無さを実感し、その度に自ら反省し戒めてきた。当初は失敗すること、恥をかきくことを恐れていたが、途中から開き直り、失敗して当たり前、恥をかいて当たり前と思うようになってからは、積極的に行動できた。

最後に、就職活動を行った数ヶ月間は、それまでのんびり過ごしてきた学生生活に比べると、日々洪水のように自分を試される機会が多かつた。そのため、就職

活動はそう簡単に上手くいくことばかりでなかつた。しかし、落ち込んだ時にこそ如何に早く気持ちの切り替えができるか、そして最後まで諦めないという気持ちを持ちつづけるかが就職活動を行う上で大切ではないかと思う。

公務員試験合格を振り返って

生物生産学科 四年

石 田 鉄 兵

今公務員試験を振り返ってみるとしんどかつた思い出ばかりが蘇ってきます。私が勉強を始めたころ、私の周りの友達が皆遊んでいて、毎日寮の自習室に閉じこもり、苦痛の日々でした。そのような毎日で何とか公務員試験勉強をやり通せたのは、先生、先輩方、友達、そして家族の暖かい応援のおかげでした。先生は毎日困ったときには相談ののって下さり、合格したときには本当に喜んで下さいました。家族も試験が近づくにつれ私以上に心配してくれ、何度か料理を送ってくれたときは本当に感謝しました。なかなか実家に帰れなかつた時期だったので、久しぶりに味わう母の料理で元気が出て、日々勉強に励むことが出来ました。また勉強方法がわからず悩んでいたときは、先輩方に相談すると、親身になって相談に乗って下さり、様々な勉強方法を教えて下さったり、先輩が長い時間をかけて作ったノートを下さったりと本当にありがたかつたです。二時間三時間といういろいろな質問に応じて下さったりとたいぶ迷

惑をかけたましたが、そのたびに面倒がらず一つ一つ丁寧に答えていただき感謝しています。また周りの友達も皆応援してくれ、愚痴を聞いてくれ、リフレッシュのお酒に付き合ってくれました。このように公務員試験に合格できたのはほんとうに周りの人々の支えのおかげだと思っています。合格を知ったときの瞬間の喜びは何事にも変えがたく、頭の中が真っ白になり、今までの苦勞がすべて吹き飛んでいきました。最後まであきらめず自分の夢に迷わず進んでいくこと、そして夢を達成できたことで少しは自分に自信をつけることもできました。

私は水産大学校に来て四年、幸運にも大変すばらしい先生方、先輩方、仲間達にめぐり合うことが出来ました。その結果自分の希望通り公務員になることもできた今、水産大学校に来て本当に良かったと思います。このかけがえのない四年間で学んだ経験を生かし、来年から社会人としてまたすばらしい出会いが出来るよう日々がんばりたいと思っています。



在校生の声

日韓学生交流

生物生産学科 一年
二 島 一 晃

私達は、十一月五日から十六日まで海洋環境観測実習を行い、その中で釜山にて、私達が最初となる釜慶大学校との学生交流を行いました。

釜慶大学校は総合大学で、学校内を見学させていただいたのですが、水大よりもはるかに広く設備も多く揃っていて、その規模の違いに圧倒されました。

学校内では、眼鏡をかけた人をよく目に入りました。なんでも韓国の人は、大学に入るために相当勉強をするらしく、そのために目を悪くする人がどうしても多くなってしまうそうです。確かに図書館を訪れた時にも、水大と比べて勉強や本を読んだりしている人が多く、またコンピュータ室でも生徒自ら積極的に勉強をしているように見えました。私が図書館を利用するのは何かを調べる時くらいで、コンピュータもインターネットくらいにしか利用せず、釜慶大学校の学生とのあまりの勉強に対する姿勢の違いに、自分が恥ずかしく思えました。

学生交流ではサッカーをすると事前に聞いており、軽い遊び程度で行うものだと思いますが、なんと相手は全員お揃いのユニフォームにスパイクを履いて、実習服に運動靴の私達と比べて、明

らかにやる気の違いを感じました。試合は共に真剣に行い、結局負けましたが、その後は韓国の人から握手を求めてきたり抱き合ったりして、凄く親しみやすさを感じました。

今回の学生交流で感じたことは、水大生の中に韓国語を話せる人はいませんでしたが、あちらには片言ながらも日本語を話してくれる人がいたことに、韓国の学生交流に対する国際的重要性を深く知ることができ、日本の学生もこれぐらい国際交流の重要性を認識すべきだと思います。

現在国際社会となりうるこの世界で、英語はもちろん、他の言語も必要なことを痛感させられ、この学生交流により自分が大きな一歩を踏み出せそうな気がします。

少し振り返る

海洋機械工学科 二年
辻 悠 佑

初めにこの水産大学校に来て思ったことは、「周りに何も無いな。」ということだった。まあ高校時代も似たような環境にいたので、他の学生よりは早く環境に適用出来たと思う。それに寮に入っていることで、周りに人がたくさん居て友達も早く出来たし先輩の話などから学校の雰囲気や授業の様子がつかみやすかった。

それからもう二年が経とうとしている。二年目になったことで寮では責任を背

負ったり、後輩の面倒をみることも出てきている。学校の方でも難しい授業が出てきたり、専門的な実習をしたりするころもあつた。僕は水産高校出身なので高校時代に海洋工学の基礎的なものややったことがある。だから一年のころは数学とか物理の基礎的な科目で苦労した。高校時代に数学とか物理とかの時間が少なかったからである。でも、二年に上がって少しは高校時代の知識が使えるようになってからは、楽な部分も出てきた。これからはもつと高校時代の知識が使えるようになってくるので、少し楽しみである。

しかし、これからのことを考えると授業のことだけをやっている状況ではなくなってくる。三年生になると就職や進学のための勉強を始めなくてはならないし、一、二年生を引っ張っていかなければならない立場にもなる。こういうことを考慮すると自分にとって何が重要なのか、これから何をしなければならぬかをしっかりと考えて行動していこうと思えます。

何事にもチャレンジ精神で

食品化学科 三年
山内 富 夫

この三年間の学生生活は、滄溟寮での生活を語らないではいられない。すべてが初体験の生活スタイル、そして規律正しい学生生活、時には規制されることに反発もしたが、古臭くも何だか温かみの

あるこの寮生活を、今ではうれしい誤算であつたと思っている。集団生活の難しさ、大切さを身にしみて感じる事ができた。

私は、大学に入学する際に目標があつた。それは勉強とアルバイトである。何だか大学生らしい様な、らしくない様な感じはあるが、自分を引き締める点では必須であると思う。

まずアルバイトの方は、コンビニエンスストアでの接客である。世代交代の時期に入り、新人の育成に四苦八苦しているが、多くの人と触れ合うことで人間性を学ぶことができた。肝心の勉強の方は、やはり他の大学等では体験できない石垣島での乗船実習、燻製品や干製品、そして冷凍食品を実際に生産し、保存食品の製造技術や分析技術を学んだ食品加工実習等の多くの実習実験を通し、五感すべてを使い食品を扱う上での基礎を学べたことに対して満足している。他にも、下関市水族館で小中学生を対象に魚の解剖を教えたオープンラボ、水産大学校の受験を考えている高校生を対象に「魚醤油の働き」について教えたオープンキャンパスの参加は、教える立場に立ち、教える事の難しさ、聴く側に立って話すことの難しさを痛感し、貴重な体験となつた。学生時代はどんな事でも出来ると言うが、まさにその通りだろう。遊びたければ何時でも遊べる、勉強したければいつでも勉強したい放題。こんな環境は、この時以外考えられない。如何にしてコントロールできないものかと、遅れ馳せな

がら解決策を模索している。将来は、これまで以上に学んだ食品やその機能性について、さらに知識を深めたいと考え、大学院の進学を希望している。この三年間で学んだチャレンジ精神で、残り一年間飛躍できればと思う。

卒業生の声

近況報告

株式会社 大阪魚市場

川路 喜政

(水産情報経営学科平成十四年度卒)

大阪の野田にある(株)大阪魚市場に入社してもうすぐ一年が経とうとしている。

「学園だより」を書く機会をいただいたので近況などを報告したい。

現在は近海物(箱物)、春から秋にかけてはカツオ等、冬はブリ等を扱う人の下で勉強し、商売を学んでいる。毎日が勉強の連続である。魚の相場、全国での水揚げの量などは日によって大きく変わることもあるので、常に気を配らねばならず、また、人と接する仕事のため、人間関係を構くこと、自分を研くことも大切である。お客さんから「あの人から魚を買いたい」と思われる販売人になるには、まだまだ学ぶことが多い。魚市場の仕事は夜中に出勤し、人とは違った時間の過ごし方をするが、仕事に楽しさとやりがいがあるため、苦になっていない。

ところで、今思い出す学生時代の記憶

近況報告

静岡県立焼津水産高校

高橋 左府

(漁業学科四十八期卒)

と言えばバイトか遊びがほとんどである。もちろん学生であるから「学業」は当然の経験や遊んで来たことが役に立っていることもある。例えば、就職がその一例である。南風泊市場でバイトしていた私は、魚を扱う商売をしたいと思うようになり、現在の会社を希望し、就職した。バイトがきっかけの就職だが、自分の心のあった職につき、充実した日々を送っている。また、入社した当初、周囲とうまくやっていけるかどうか不安もあったが、学生寮時代に上下関係を学んだことが本場に役に立っている。その上、我が社には水産大の先輩方が数多く働いている。社会に出て、水大魂を忘れることなくやっていけることは何よりも心強いことである。

社会人一年目で何を言えたものではないが、スタートはうまくできたような気がする。今の自分があるのは、学生時代の友人、恩師、その他お世話になったすべての人達のおかげと感謝している。

在学生に伝えたいことがあるとすれば、先に述べたように、学生時代の経験(良い経験ばかりではないかもしれない)すべてが、社会に出てから役立つということである。そういう意味で、学生時代には、「学業」はもちろん、寮生活、バイト、クラブなどでもいろいろなことを経験し、人と交わり、自分を研いで欲しいと思う。

専攻科船舶運航課程を修了し、静岡県立焼津水産高校に指導教官として就職してから五年が経とうとしています。この五年間、実習船やいづ、練習指導船富士丸に乗り込み、生徒とともにカツオ、ピナガマグロを追っかけ、広い太平洋の中、東は天皇海山、南はカロリン諸島、ミクロネシア付近を航海してきました。そんな中、カツオやピナガマグロは一本釣り、どうにか引き揚げることは出来るようになりましたが、生徒のやる気を引き揚げるように高揚させ、自分自身についてこさせるような指導に関しては、まだまだだと実感しています。

五年間仕事をしていた、最近つくづく感じることは、人を育てることの難しさです。水産大学校在学中は、今も趣味としている自転車競技等を通じて、先輩後輩とつきあってきて、いわゆる若い世代との接し方も分かっているつもりでしたが、実際に仕事として高校生と接していると、「自分はこうだった」といった、自分との相対的な指導になってしまいがちです。練習船での指導方法や生徒との接し方について試行錯誤してきた五年間であったようにも感じます。乗船実習中、生徒が成長する過程や、一本釣り実習をやっている際の生徒の真剣な眼差しや笑

研修生の声

水産大学校の思い出ーゴーヤ

新羅大学ナックトン河研究所

(韓国・釜山)

Dr. Hoi Jeong Yang

まず、水産大学校での訪問研究について書く機会を与えてくださったことに感謝します。私は、韓国科学工学振興基金のポスドク会員として一年間の予定で、生物生産学科の林健一博士の研究室で訪問研究をしております。二〇〇三年三月三日に海のそばにある本校に着いて以来、日本の文化と生活についての良い思い出を作ってきました。そのような良い思い出の一つとして強く印象に残った出来事を皆さんにご紹介したいと思います。

二〇〇三年三月の本校での卒業式のことです。私は、女子学生の着物姿を見ることができて、大変満足していました。それ以上に新鮮な体験だったのは、何人かの卒業生は名前が呼ばれるたびに「オス」と叫んでいたことです。ところが、

顔を見るところれしくなります。また、地元の魚市場や店先で、鉢巻きの風貌で「先生」と声をかけられる毎に、人を育む良さを感じたりします。

最後になりますが、在校生の方々へ。在学中は、可能な限り色々なことに興味を持ち勉強し、柔軟な考えを身につけることが大切だと思います。

富着さんは（沖縄出身で、林博士の研究室の卒論生）、沖縄のながうりを持った右手を挙げると同時に、「ゴーヤ」と大きな声で叫びました。「オスツ」が何を意味しているのか、いまだに分かりませんが、オスツとゴーヤのおかげで非常に楽しいひとときを過ごすことができました。

私は、研究の一環として熊本大学、筑波大学、西海区水産研究所の石垣支所を訪問しました。石垣支所では、地震を経験し、サンゴ礁とマングロップを見ることができました。韓国には地震もサンゴ礁やマングロップもないので、私には初めての経験でした。石垣島での滞在中は、本校出身者の山田博士に大変お世話になりました。エビ類の採集を手伝っていただきました。石垣島の豆腐と名古屋の味噌煮込みうどんは食品として強い印象が残っています。夏には、韓国の私の家族が本校を訪れ、学校の前の砂浜で海水浴を楽しみました。

本校への訪問研究は日本と日本人を理解する大変よい機会でした。この貴重なすばらしい体験は、韓国に帰国してからも、私の心のなかにいつまでも残ることでしょう。最後に、本校での滞在中、いろいろとお世話になった林健一博士と研究室の皆さんに深く感謝いたします。

新任紹介

着任にあたり

水産情報経営学科助教授

板倉 信明



一、平成十五年五月一日付で水産情報経営学科社会文化講座助教授として着任しました。昭和五十七年三月に本校研究科水産社会科学専攻（漁業学科卒業：昭和五十六年三月）を卒業後、別大学に勤務しておりました。二、専門分野は水産経済学で、中小漁業や沿岸漁業を対象にして、経営問題や漁業管理に関する研究を行ってきました。国内経済の変動や資源動向によって再編を迫られる現状に対して将来に向けた再編方向を求めたいというのが動機です。とりわけ、中小漁業層では沖合底びき網漁業を主な対象として来ました。三、上述しましたように二十数年ぶりに本校に戻りました。学生当時、何をすべきか分からず悶々としていた胸苦しさが懐かしく思い出されます。今回の着任にあたり、私の目の前にいる彼らの思いを理解し、進むべき道を彼らが見つけ得る手助けをできればと思っております。また、本校も現在行政改革の

着任のご挨拶

水産情報経営学科助手

鬼塚 剛



一環で将来に向けた再編方向が求められています。本校の果たす役割や存在意義を考えつつ、そのあり方において私に出来ることがあれば果たして行こうと思っております。今後教育や研究において関係する多くの方々にお世話になろうかと思いますが、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い致します。

最後に私的な近況を言いますと、吉見に来て早九ヶ月、妻共々この気候・風土を満喫しつつ、時に味や温泉を求め近辺を散策しております。

平成十五年九月一日付で水産情報経営学科に助手として着任いたしました。赴任した当初は先生と呼ばれることに戸惑ったり、構内で学生に間違われたりしていましたが、今ではほとんどなくなり、やっと生活にも慣れてきたところです。私がこれまで行ってきた研究は、主に数値モデルの手法を用いて日本周辺海域の流動や物質循環を明らかにすることで、私たちが身近なところでは、天気予報も数値モデルを用いて行われています。

研究の性質上、これまでは研究室でコンピュータに向かっていることがほとんどでしたが、昨年の十一月末から十二月初めにかけて天鷹丸による調査航海に参加しました。期待と不安の中で乗船したのですが、誰のおかげか（？）その時期としては十年ぶりという台風に見舞われまわしてしまい、乗船中は船酔いとの戦いでした。しかしながら、実際に現場を見て、データ取得の難しさなどを学ぶことができたことは、私にとつて貴重な経験になりました。今後は是非参加したいと思っております。

近年、海洋環境問題を考える際に、「環境容量」という言葉が使われるようになってきました。環境容量とは、例えば富栄養化した湾では「湾内で赤潮や貧酸素水塊を生じない最大の栄養塩負荷量」、養殖海域では「海域における持続可能な最大の養殖量」と言い換えることができます。環境容量の評価や資源量変動予測を行うためには、まず海域の流動特性と物質循環特性を明らかにしなければならず、その際には現場でのデータ取得と数値モデルが必要不可欠です。今後は、現場データと数値モデルを組み合わせ、海域の流動特性と物質循環特性を明らかにすることで環境容量の評価や資源量変動予測につなげていきたいと考えています。



着任にあたって

海洋機械工学科講師
一 瀬 純 弥



平成十五年四月一日より海洋機械工学科動力システム講座に着任いたしました。よろしくお願いたします。

私は平成八年度に本校機関学科専攻科を卒業後、水産庁へ船舶職員として入庁し、以後は水産総合研究センター遠洋水産研究所所属の俊鷹丸に五年ほど勤務した後、昨年一年間は本校練習船耕洋丸で機関部専任教官として勤務しておりました。

機関士としては俊鷹丸(三代目)に乗船した期間が長かったのですが、着任時船齢が三十年近くの老朽船だった事もあって、配管の破裂・電気系統の故障は日常茶飯事、ひどいときには主機関や可変ピッチプロペラが制御不能になるなど、非常に苦勞した覚えがあります。船乗りとして最初に乗船した船を「親船」と呼びますが、私にとって親船はこの古い俊鷹丸だっただけに、苦勞反面非常に愛着を覚え、気むずかしい主機関を操る事に機関士として非常にやりがいを感じました。その俊鷹丸も在職最後の年に新造船に変わり、老朽船の苦勞からは解放されましたが新造船もマグロ延縄・トロール・

鯨類追跡調査と多種多様な調査を行う多機能調査船のため、引き渡し直後は新造船特有のトラブルが頻発し非常に貴重な経験をする事ができました。

昨年一年間は練習船耕洋丸に乗船しておりましたが、実学教育が重要視される時代において、練習船での実習は単に操船や機関操作の訓練の場というにとどまらず、危機管理やリーダーシップとしての心構えを学べる非常に貴重な実習であり、私もそれに関わる事ができ、非常に誇らしく思った一年間でした。

昨年四月より海洋機械工学科動力システム講座に着任致しましたが、卒業後は機関士としての海上勤務が主であったこともあり、毎日勤務先に通勤するという生活に違和感を覚えました。着任後半年以上たった現在ようやく慣れてきたところです。

私の所属する講座では、主に海洋温度差発電システム(一種の外燃機関ですが)の最適化設計及びそれに伴う熱交換器の性能解析を行っておりますが、将来的にはこのような技術を応用し、船用機関プラントにも使用できる省エネルギープラントの研究開発に携わりたいと思っております。一方、教育活動においても、このような状況をふまえ蒸気原動機についても近年の最新の情報を取り入れながら、船舶職員であったときの経験を最大限生かし、講義実験を行っていく必要があると思っております。

今後とも皆様方のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願申し上げます。

着任させていただき

一年たとうとしております

食品化学科教授

松 下 映 夫



平成十五年四月一日付けで食品化学科生物化学講座の教授として着任させていただきます。はや一年過ぎようとしております。まだまだ不慣れな点は多々ありますが、皆様の温かいご支援により大過なく過ごしております。

本学に着任する前は、民間会社で十四年間、医薬品の研究開発に携わっておりました。従って、水産や食品に関しては全くの門外漢であること、大学における教育・研究に関しては素人同然であることなどより、学生さんをはじめ本学関係者の方々にはご迷惑をかけることが多いかもしれません。専門分野を大きく変えねばなりませんでしたが、若い頃に一度志したアカデミックポジションであり、度量が大きく懐の深い水産大学校に暖かく迎えて頂きましたので、ここを終の棲家と考え、微力ではありますが私なりに精一杯本学のために努力したいと思っております。

現在担当している授業は、食品化学、食品分析、栄養化学などです。食品業界

も一般消費者も「安全性」はもろろんのこと、食品の「健康維持、疾病予防」機能に注目しております。「食品中どの様な成分・物質がどの様な機能を発揮するのか」、また「その機能・効果の裏付けとしてその成分・物質が体の中でどの様に吸収・分布・代謝・排泄されていくのか」、そして、「その成分・物質が体中の作用点でどの様な機序で疾病予防効果を発揮していくのか」……といった知識・技術がこれから水産・食品業界で活躍する本学食品化学科の卒業生に求められております。食同源などと申しますので、医薬を食品の成分・物質に置き換えれば、私の医薬研究開発の経験も少しはお役にたつのではと考えています。

世の中の大学も生き残りを賭けてその存在意義をアピールしていかねばならない厳しい時代に突入し、本学もそれに応じて独法化し種々の改革が進行中であります。ダーウィンの言葉に、「It is not the strongest of the species who survive, nor the most intelligent, but the ones most responsive to change (強さも賢いものが生き残るのではなく、変わるものが生き残る) があります。私に残された時間はあまり多くはありませんが、チャレンジする気概を失わない様にして、水産大学校の発展の一助になりたいと考えております。皆様方のご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願申し上げます。

着任の御挨拶

生物生産学科助教

稲川 裕之



平成十五年六月一日付けで生物生産学科の助教として着任いたしました。この数ヶ月で、多くの先生方からいろいろと御指導頂き、また、講義、実験で学生さんと、研究室の方々と接し、多くのことを学ばせて頂き、楽しみながら水産大で生活しております。また、卒業研究生として四名が配属になり、少しずつ研究体制も形になりつつあります。

私の研究は、健康であるために備わっている生体の機構を明らかにし、それを応用して健全な水産養殖の方法を確立していくことです。最近、健康維持は免疫と呼んでいる機構が主に担っていると考えられるようになってきました。免疫という抗体とかワクチンに代表される特異免疫を思い浮かべるかもしれませんが、特異免疫は脊椎動物等の一部の動物にしかありません。特異免疫がなくとも多くの動物は健康に生活しています。例えば、伊勢エビは約三十年の寿命があると言われています。精巧な特異免疫のない彼らは、どうやって長生きをされているのかといえますと、自然免疫と言われる免

疫機構によって健康でいられると考えられます。この免疫はすべての動物に存在し、異物を認識して貪食除去するマクロファージと呼ばれる細胞が中心的な役割を担っています。マクロファージは環境情報を受信し、一方で周囲の細胞に情報を発信し、生体を制御しています。マクロファージを制御することで、魚介類でもストレスに強く、感染しにくい、いわゆる健康な状態を維持出来ると考えられます。そうすれば、現在、社会問題になっている水産養殖での化学物質や、抗生物質、抗菌剤の使用量を低減出来、環境を保全し、薬剤耐性菌出現を防止出来ると考えられます。そう信じて、水産資源の確保と環境保護への応用へ向け、魚介類の免疫の研究を行っている日々です。

「帰ってまいりました。」

耕洋丸船長

田 淵 清 春



私はこの四月に長友前船長の後を引き継ぎまして、耕洋丸船長の重責を担うことになり、水産庁取締船白竜丸から転船してまいりました。もともと白竜丸に乗船していたのは僅か二年間でそれ以前は本校卒業以来、耕洋丸・天鷹丸に勤務していました。白竜丸での二年間の取締業務は練習船業務とは全くかけ離れた業務ではありましたが、多くの方々との協力を得て大過なく過ごすことができました。我が国の排他的経済水域（EEZ）における取締対象となる外国漁船は、新日韓・日中漁業協定の発効に基づき、我が国の許可を受けた数千隻にも達する韓国・中国漁船及び違反操業を試みる無許可船などです。

これらの漁船に対して水産庁取締船及び用船がEEZ内の資源管理体制確立のため、漁業法や一九九六年に制定された「EEZ漁業法」などに基づき、厳格に取締を実施しています。実際の取締行動として許可船に対する立入検査・違反発覚・拿捕・現行犯逮捕・被疑者拘束・被疑者取調・送致書類作成など一連の作業の他、無許可操業・違反操業取締及び違反逃走漁船追跡などです。

その中で逮捕した被疑者を取り調べ供述調書を作成することは船長として最も重要な仕事になっています。供述を聴取し、如何に被疑者の犯意を明らかにするかが難しいところです。今思えば僅か二年間でしたが私として

は初めて体験することばかりで、実に充実した二年間でした。

初めて韓国まき網漁船の船長に現行犯逮捕を告げるとき、最初の供述調書作成立入検査を拒否し逃走した韓国イカ釣り漁船を九時間に渡り追跡したこと、同じく追跡中の韓国まき網漁船に接触され、船体に損傷を受けたこと、拘留中の中国運搬船船長から供述を聴取するため通訳さんと二人でパソコンとプリンターを抱え、連日拘置所に通ったことなど懐かしく思い出されます。

我が国と韓国、中国との漁業協定成立過程に於いて領土問題などが原因で日本海及び東シナ海に広大な日韓、日中の暫定水域が設定されましたが実際はその大部分を日本海は韓国漁船、東シナ海は中国漁船に占有されていると言っても過言ではありません。

暫定水域に於いては当事国共同で資源の管理をすることになっていますが、我が国は日本漁船しか取り締まることができないため、現在のところ野放し状態です。

特に東シナ海の夥しい数の中国漁船には閉口するばかりです。

今後、日中韓三国が早急に資源管理措置をとらなければ近い将来、資源枯渇問題の他、遺棄された多数の漁具による環境汚染が発生することは必至の情勢です。地の利を活かし本校練習船が少しでもこれらの問題に何らかの方法で対処できないかと思っています。

国連海洋法条約批准に伴い、我が国排

他の経済水域の水産資源維持管理については紆余曲折はあるにせよ目処が立ちつつありますが、今後、広大な暫定水域の資源維持管理を日中韓共同で如何に行うか、大きな課題が残されています。さて、二年振りで練習船勤務となった私の抱負を述べたいと思います。

本校は全学科、学生は必ず一度は卒業までに乗船実習を行うことになっています。実習内容に関しては各学科に応じた実習を行っています。私が思うに以前と比較して最も後退している実習が漁業実習です。

一九七六年に米国及び当時のソ連が二〇〇マイル漁業水域を設定して以来、我が国漁船同様、練習船も思うように操業ができなくなりました。現在、トロール実習に関しては東シナ海で中国漁船の少ない海域を探して曳網を行っている状態です。

一昔前のように南は南シナ海、北はベーリング海で長期間、漁業実習を行ったようなことはしたくともできませんが、望むらくはできるだけ調査などの機会を得て、学生が実際に海洋生物に触れる実習の一つでも多く取り入れたいと思っています。

また、耕洋丸も建造以来二十五年が経過し、船体・機関・機器類の維持管理に難儀していますが、乗組員共々一致協力して学生の実習に支障を来さないよう船体保守に努めると共に、当然のことながら安全航海を心掛けたいと思っております。よろしくお願いいたします。

大学祭

'03 海燕祭を振り返って

大学祭実行委員長
井原 亮
(食品化学科 三年)

大学祭実行委員としては三年目、今年度は実行委員長として臨んだ一年間でしたが、今振り返ってみると実に様々なことがあったと思います。

今年度は下関・吉見地区の方はもちろん、本校学生も多く参加して今までにない程盛り上がりました。そして、色々新しいことに試みた海燕祭でした。その背景には下関・吉見地区との大きなつながりがあったからだと思います。五月の海峡祭、六月のホタル祭り、八月の吉見祭り、海峡花火大会、馬関まつりなどの活動に参加することにより、多くの人と出会え、かけがえのない経験を積むことができました。また、それらの人と出会うことで、私自身も大きく成長することができたと思っています。

このような地域の人たちとのつながりはもちろん、海燕祭をよりいいものにするためには我々実行委員の団結力が何より必要だと思います。今年の実行委員はみんな個性があり、海燕祭を成功させるために多くの意見を出してくれました。特に今年是一年生が積極的に活動してくれたので、今までにない海燕祭ができたのだと思います。また大学祭の活動以外

でも、一緒に遊んだり飲んだりして、本当の仲間としての関係を築けたと思います。そしてエンディングで見せたみんなの涙は、この海燕祭がどれだけすばらしいものであったかを物語っています。二〇〇四年の海燕祭が前年をはるかに凌ぐくらい大きくなることを、そしてこの素晴らしい海燕祭が受け継がれることを願っています。

クラブ紹介

空手道部

矢島 好文
(生物生産学科 三年)

本校空手道部は、昭和二十五年(一九五〇年)に創部された歴史のあるクラブで、熊本県の「空手道空心会」に所属し、全九州学生空手道連盟に加盟しています。現在の部員数は、男子十一名、女子五名で、月曜日・金曜日の十六時半〜十八時半に練習を行っています。平成十五年度の主な大会成績は、全九州大学空手道選手権大会男子団体戦二部が準優勝でした。(前年度は優勝)

空手道の競技は「型」と「組手(くみて)」に分けられます。型とは、敵との攻防を想定した一連の動作で、動作の正確さや、技の極めなどを競います。組手は文字どおり一対一で技の攻防を競い、相手に突き・蹴りの技を極めた者を勝ちとします。ただし、学生空手道連盟の競

技では相手への直接の加撃は反則行為として扱われ、通称「寸止め」といわれる競技形式で行われます。

平素は主に組手の試合を目標において練習しています。内容は柔軟体操から始まり、基本練習、移動動作、攻撃練習、自由組手といった順序です。自由組手以外の練習は地味なものです。自由組手以外に練習した技を自由組手で生かし切り、ポイントになる技が出せた時の喜びは大変大きなものです。自由組手は当然相手がいるものなので、自分の思うようにいくとは限りませんが、自分の体一つで立ち向かう緊張感のある駆け引きは他のスポーツでは味わえない醍醐味だと思います。

去年は一年生八名の入部があり、練習にも活気がでてきました。今年も元気のよい新入生が一層多く入部してくれるよう、さらに活動を盛り上げようと部員一同努力しています。

学生部だより

平成十六年度の就職対策と現状について

最近の日本経済は代表的な景気指標である鉱工業生産指数が、平成十五年は三年ぶりに前の年を上回っています。家電製品や自動車の生産が好調で、関連部品や製造装置メーカーにも波及しました。雇用情勢についても一月の有効求人倍率は四か月連続で〇・七倍を越え、雇用の先行きを示す、新規求人は前年同月比

十六・二%増と十九か月連続で増え、求
人状況の改善が続いています。

こうした景気動向ではありますが、平
成十六年度の新卒採用も企業側の採用ス
タンスとしては依然として「厳選採用」
を堅持する企業が圧倒的であり、「採用定
数の確保」よりも学生の質を優先し、「良
い素材を厳選して採用する」傾向にあり
ます。しかしながら、若年人口の減少、
学生数の減少、学生の就職意識の多様化
など、さまざまな影響が生じ、新卒採用
企業もその基準をクリアした満足のいく
人材がなかなか確保できていない状況に
あるようです。むしろ厳選採用の採用ス
タンスを維持することで優秀な学生を確
保していかうとしています。

こうしたなか、企業の求人活動は、年々
早期化し本校においても既に平成十六年
度卒業予定者を対象とする企業からの求
人が多数寄せられています。また、平成
十五年度に本校で開催された求人企業に
よる会社説明会は二月に始まり四月から
五月をピークに開催され、多数の学生が
参加しています。

これらの状況を踏まえ本校では、学生
に対し企業情報の迅速な提供とともに学
内に就職対策検討委員会を常設し、「特
別講演」等の就職ガイダンスの開催（七
月・十二月）、就職手引き書の配布など、
学生の就職活動に対し支援を行うととも
に、各学科に就職指導担当教員を配置し
個別に就職指導、相談を行っています。

また、公務員をめざす学生には、公務
員試験情報の提供並びに当年度公務員試
験合格者を講師として公務員試験の傾向
と対策について特別にガイダンスを実施
するなどの取り組みを強化しています。
なお、平成十五年度の卒業予定者の就
職内定状況は別表のとおりです。

平成15年度卒業・修了生進路状況

平成16年 3月15日

学科・専攻科・研究科	卒業 予定 者数	進 学 関 係					就 職 関 係							※ そ の 他	◎ 進 路 未 定 者 数			
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	研 究 生	そ の 他 の 進 学	計	国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	水 産	船 舶	造 機 ・ 造 船			食 品	そ の 他 の 企 業	計
水産情報経営学科	18		1			1		1			9				5	15	1	1
海洋生産管理学科	51	2	3	20	5	30	1		1	10	2		4	2	20			1
海洋機械工学科	35	6	1	14		21	1	1		2	1	3		5	13			1
食品化学科	46	7	4			11	1		2	8			14	6	31			4
生物生産学科	31	4	2		4	10	1	4	4	7			1	1	18			3
小 計	181	19	11	34	9	73	4	6	7	36	3	3	19	19	97	1		10
専攻科 船舶運航課程	13						1	2			10				13			
専攻科 船用機関課程	16							3			10	2		1	16			
小 計	29						1	5			20	2		1	29			
研 究 科	11	3			2	5				1			3	1	5	1		
合 計	221	22	11	34	11	78	5	11	7	37	23	5	22	21	131	2		10

〈分類内訳〉

各種団体＝水産関係各種団体
水産＝水産関係・関連企業
船舶＝船舶・海事関連企業

造機・造船＝造機・造船関連企業

食品＝食品関係・関連企業

その他の企業＝その他の企業・自営業

※その他＝公務員や海技試験受験等の準備など

平成15年度卒業予定者進学・就職内定状況一覧表

平成16年3月15日現在

せします。

本校の平成十六年度入試状況をお知らせします。

平成十六年度入試状況

推薦・一般入試の志願者総数は、千二百十五名で昨年度を八十九名上回る結果となりまして。一般入試の学科別の応募状況は、水産情報経営学科六十五名(募集人員十四名)に対する倍率四・六倍、海洋生産管理学科二百名(募集人員二十七名)に対する倍率七・四倍、海洋機械工学科百二十七名(同倍率四・七倍)、食品化学科百七十名(募集人員三十二名)に対する倍率五・三倍、生物生産学科四百名(募集人員二十一名)に対する倍率十九・〇倍、で水産情報経営学科、海洋生産管理学科、海洋機械工学科及び生物生産学科が前年の志願者を上回った。また、先に行われた推薦入試には、

Table with columns for university names (e.g., 北海道大学, 山梨大学), faculty names, and their respective fields of study or employment.

推薦・一般入試の志願者総数は、千二百十五名で昨年度を八十九名上回る結果となりまして。一般入試の学科別の応募状況は、水産情報経営学科六十五名(募集人員十四名)に対する倍率四・六倍、海洋生産管理学科二百名(募集人員二十七名)に対する倍率七・四倍、海洋機械工学科百二十七名(同倍率四・七倍)、食品化学科百七十名(募集人員三十二名)に対する倍率五・三倍、生物生産学科四百名(募集人員二十一名)に対する倍率十九・〇倍、で水産情報経営学科、海洋生産管理学科、海洋機械工学科及び生物生産学科が前年の志願者を上回った。また、先に行われた推薦入試には、

われた推薦入試には、百五十一名が応募し、六十三名が合格した。一般入試は、平成十六年二月十一日に下関・東京・大阪の各試験場で実施され、二月二十四日に合格発表となった。次年度以降も少子化が進む中で、オープンキャンパス、高校訪問及び公開講座等の広報活動を充実させ、本校

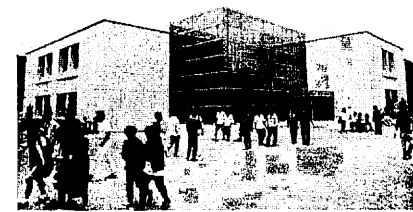
人物往来

の特色と個性豊かな教育方針を前面に打ち出し、受験生に魅力ある大学校となるよう一層の努力をして参る所存であります。(注) 推薦入試の不合格者は、一般入試を再度受験した。

- 平成十五年度 水産特論講師) 七月三日 水産庁漁政部漁政課管理課 課長 高柳 充宏
七月十一日 水産庁漁政部水産経営課 課長 江口 洋一郎
十月二十四日 水産庁漁政部加工流通課 課長 石川 裕
十一月二十八日 水産庁漁政部企画課 首席企画官 本田 直久
十二月四日 水産庁増殖推進部研究指導課 課長 井貫 晴介
【叙位・叙勲】 四月二十九日 勲三等瑞宝章 故 武部 健治 (名誉教授)
十一月三日 瑞宝中綬章 田川 昭治 (名誉教授)
【名誉教授】 該当なし

図書館からのお知らせ

図書館では、平成16年4月より下記のとおり学外者に対する一般開放を行いますので、お知らせします。



- ◎ 館内閲覧：自由に入館できます(紹介状等は不要です)。
◎ 資料の複写：著作権法の範囲内で複写ができます。
◎ 館外貸出：3冊以内、15日間で貸出ができます(貸出手続きに身分証明書等が必要です)。
◎ 開館時間：午前9時から午後8時まで開館しています。
◎ 蔵書の検索：http://www.fish-u.ac.jp/top/top_library.html からできます。

なお、休館日、開館時間の変更等詳細については、企画情報部図書課(0832-86-5114)または、図書館ホームページ(http://www.fish-u.ac.jp/top/top_library.html) でご確認ください。



独立行政法人
水産大学校
☎759-6595
下関市永田本町2丁目7-1
発行
学園だより
編集委員会
電話0832(86)5111

教育研究活動の強化に向けて

水産大学校理事長 三本 菅 善 昭



水産大学校を巡る情勢は急激かつ大きく変化しております。その一つは、一世紀以上の歴史を持つとされるわが国の大学制度が大きく変わり、昨年四月に国立大学の全てが法人に移行、それに先立って幾つかの国立大学が再編・統合されました。その一環として、水産を代表する高等教育機関として本校と深い関係にある東京水産大学が、前年の十月に東京商船大学と統合し、東京海洋大学として水産の大学から海洋総合大学として新たな道に踏み出したことはご存知と思います。本校は、ご案内のように、これらに先駆けて平成十三年度に農林水産省所管の独

立行政法人に移行、わが国唯一の水産に関する総合的な教育研究を行う大学としての益々の発展が期待されているところであります。なお、大学法人化の目的の重要なポイントは、各大学に個性を発揮させることにあります。

もう一つは、本校の教育・研究が一翼を担ってきた水産も大きな変革の時代を迎えていることでもあります。わが国は、世界でも有数の高い海洋生産力と豊富な海洋生物種が生育する恵まれた海に囲まれ、古くから漁業が発達し、水産資源を食料等として有効に利用する豊かな文化を築いてきた歴史があり、漁業技術や様々な利用技術は世界に冠たるものがあります。しかし、水産資源の状態は悪化しており、海洋の資源供給能力が限界に達し、海洋資源の枯渇が危惧されています。一方、地球規模での人口の爆発的增加が予測されている今日、重要な食料資源である水産資源を人類の財産として持続的に利用するための新しい知識と技術の確立が大きな課題となっております。

また、海洋生物の、その特性を生かした機能性食品としての利用、有用遺伝子の産業的利用といった水産バイオテクノロジーなど最先端技術の開発が、人類の未来に大きく貢献するものとして期待されています。さらに、時代に乗り遅れた感のある水産経営においても、情報技術を駆使した新しい時代への転換が図られています。

なお、始まったばかりの二十一世紀における人類の課題は、自然との調和と共存、多様性の確保とされており、水産においては海洋環境、海洋生物、海洋生態系の保全が重要な課題であり、それらは水産資源の持続的利用の基盤でもあります。

このように考えると、水産は決して古い産業ではない、科学的知見と技術の基盤に立った二十一世紀の最先端の産業であるといえます。水産大学校では、このような視点で前号でお知らせした自己点検を行い教育研究に関する自己点検報告

就任にあたって



校 長 本 村 紘 治 郎

昨年の十一月十六日付をもって校長を拝命いたしました。本校では平成十三年の独立行政法人化後、理事長が校長職も兼ねておりましたが、この度改めて校長を選任し教務部門の総括者をおくこととなりました。校長就任前の海洋生産管理学科長の職に引き続き、新たな職責の大きさと重さを実感しつつ早や四ヶ月が過

書(さらなる教育研究の改善・向上をめざして)を取りまとめ公表(次頁参照)するとともに、各界の有識者の意見を求めたところであり、概ね適切との評価を得ることが出来ました。なお、ご意見は積極的に受け止めて教育研究に反映させる取り組みも始めたところであります。

本校の建学精神である実学を重視し、高度の専門的知識と技術を持つ意欲的な人材を育成するとともに、産学連携などを通して、新たな水産をきり拓き社会に貢献するための教育研究の改善と向上に努めていきたいと考えております。

最後になりましたが、平成十七年度予算で、悲願であった練習船新耕洋丸の代船建造と体育館・武道館の建設が認められ、教育環境の一層の整備充実が実現します。ご尽力頂きました関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

ぎようとしております。

さて、本校は今年度をもって法人化後四年を経過し、今年三月、法人としての四年間の教育を受けた初めての卒業生を社会に送り出します。過去、本校の卒業生の多くは水産業及び関連分野の官公庁や企業でリーダーとして活躍し、我が国の水産食料政策を支えてまいりました。本校には今後も二十一世紀の指導者たる優秀な人材の育成が期待されていますが、十八才人口の減少に伴って大学が受験生から選択される立場になった今、本校の教学に与えられている課題は、受験生や在校生にとってさらに魅力のある大学となり社会的により高い評価を受けることです。教員が常に自信と誇りを持って豊富で多彩な創意工夫に知恵を絞り、教育と研究の質の向上に対する努力を惜しみなく続けることで、他の水産・海洋系大学に勝るとも劣らぬ特色を示すことができるものと考えています。

水産業は海洋から人類の食料を安定的に獲得しそれらを消費者に供給する産業ですから、本校は五学科の連携により正しく水産業と密着した教育を実行していきます。念願であった耕洋丸の代船建造は十七年度予算で承認され、新船竣工の暁にはこれまで以上に実学を重視した水産教育が可能となります。

各位の忌憚ないご意見を拝聴し、期待に背かぬよう本校の向上と発展のため誠心誠意、全力投球していきたいと考えていますので、これまで同様のご理解とご協力を宜しくお願いいたします。

(参考) 自己点検報告書(16年7月公表)の要旨
～教育研究強化の取組事項～

【教育活動】

①教育内容

各学科の教育理念を見直し新しい学科コンセプトを確立。これに合わせてカリキュラムを見直し、水産基本法に沿って最新の課題点等に即応した教育を展開(17年度入学生より新カリキュラムを導入)。

②施設・設備の充実

授業をゆとりを持って聴講できる施設の整備、練習船耕洋丸の代船(約2300トン)を建造(20年度本格稼働予定)

③教育方法

- ・学生本位の教育を進めるため、リメディアル(高校教育の補修)教育の強化、オフィスアワー(学生相談のための教員の待機時間)の設定、成績優秀者に対する授業料免除及び表彰制度の導入、水産現場の課題等への学生の自発的取組の単位化
- ・魅力ある授業実施のため、学内教員への授業公開、学科横断的な勉強会の開催、シラバス(授業計画)の充実、教育支援事務職員に対する学生評価の導入、教材の開発・工夫のための研究会等の開催、学生による授業評価の充実、資格取得に関する情報の整理・開示・支援
- ・競争的環境のなかで効率的で質の高い教育を確保するため、また、研究活動の活性化等を図るため、教員に対する教育評価制度を導入(教育、教育を支える研究、大学運営、社会的貢献等の総合的視点)
- ・高度な専門教育実施のため、インターンシップ導入、実習の充実、水産庁幹部職員による水産特論の必修化、国際的に通用する水産技術者の育成(JABEE(日本技術者教育認定機構)対応教育の実施)、単位認定の厳格化等
- ・意欲ある学生確保のため、水産高校、海員学校、工業高校卒業者を対象とする推薦入試枠を拡大

④水産業のグローバル化への対応

TOEICに対応した英語教育の強化

⑤水産学研究科

教育研究スタッフの充実、水産学研究科生を活用したティーチングアシスタント制度導入の検討

⑥専攻科

韓国語の必修化

【研究活動】

①研究活動の推進

- ・競争的環境の下で研究活動を実施
- ・学内プロジェクト研究の推進

- ・産学公連携の柔軟な研究推進体制構築のため、企画調整官補佐を設置

②研究活動の支援等

- ・特許の取得、研究者情報の公開を促進
- ・練習船の国内外海洋・資源調査研究への積極的協力(17年度より東南アジア漁業開発センター(SEAFDEC)と共同調査実施)
- ・研究科生によるリサーチアシスタント制度、ポスドク導入等の環境整備を検討

【教育研究成果の利活用】

①研修・公開講座

- ・本校の教育研究の蓄積を一層活用し、水産業関係者等を対象とする研修を強化
- ・周辺地域の高校(水産・工業高校を含む)、中学校等への出前講座創設を検討

②成果利活用の支援等

- ・教育研究成果や教員の研究情報、研究室情報をインターネット上で積極的に公開
- ・国際協力機構(JICA)等を通じた海外技術協力、海外の大学との学術交流の充実

【学生生活支援活動】

①就職活動支援

- ・就職対策に関する戦略的・統一的な方針の策定、公務員等への就職指導の強化、資格取得の支援体制強化、卒業生の就職先等のデータベースの利用促進、企業や卒業生等に対する意向・追跡調査の実施

②その他の支援

- ・同窓会や後援会との連携強化、卒業生からの技術的相談への対応強化策を検討
- ・成績優秀者等を対象とする授業料免除制度の運用の見直し、水産業後継者やボランティア等を行った者に対する、奨励金制度等を検討
- ・部活動やボランティア活動等に対する情報提供等を検討
- ・近隣諸国の学生との交流や水産事情の視察等ができる機会の充実、海外からの留学生や研修生の受け入れを促進するための方策等を検討
- ・学生の要望や満足度を把握し、業務運営や施設整備等に反映
- ・メンタルヘルスケアの専門家の対応を充実

(注)自己点検報告書の公表後に対応した事項を盛り込んである。

(URL ~

<http://www.fish-u.ac.jp/johokoukai/index.html>)

最近の話題

J A B E E 認定に向けて

学生部長

濱 口 正 人

(海洋生産管理学科教授)

今年度、旧東京水産大学と長崎大学の水産学部が J A B E E (日本技術者教育認定機構: Japan Accreditation Board for Engineering Education) による技術者教育プログラム(水産系プログラム)の認定を受けました。

J A B E E は平成十一年十一月に設立された非政府の団体で、関連技術系学会・協会と連携しながら技術者教育プログラムの審査・認定を行うことを目的としている機構です。J A B E E で言う「技術者」とは、一般に使われている「技術的に企業活動に従事する者」という意味ではなく、「数理科学、工学、情報技術などの知識・手法を駆使し、社会や自然に対する影響を予見しながら、人類の生存・福祉・安全に必要なシステムを研究・開発・製造・運用・保全する者」と定義されております。

本校は、J A B E E 対応委員会を平成十四年七月に立ち上げ、「J A B E E とは何ぞや」から始め、現在のカリキュラムで J A B E E 対応が可能かどうかを含め、教育プログラムについて検討してき

ました。多少の問題点はあるものの実施可能との判断により、委員会を発展改称し、平成十六年一月部科長会議メンバーによる水産大学校 J A B E E 委員会、実務を担当する J A B E E プログラム委員会を立ち上げ、認定に向けての具体的な作業に取り組んでいます。計画としては、平成十七年度入学生から新たなカリキュラムで J A B E E 教育を行っていくこととし、平成十八年度に実地相談(予備審査のもの)を受け、平成二十年度に実地審査(本審査)を受ける予定で鋭意努力をしております。

J A B E E 認定基準は、学習・教育目標の設定と公開、学習・教育の量、教育手段(入学及び学生受け入れ方法、教育方法、教育組織)、教育環境(施設・設備、財源、学生への支援体制)、学習・教育目標達成度の評価、教育改善(教育点検システム、継続的改善)等、基準1-1基準6まであり、この基準をクリアし認定されますと、技術士第一次試験が免除され、修習技術者として実務修習に入ることができます。そして、四年の実務経験を経た後、技術士第二次試験に合格すれば技術士となります。質的に高い技術基礎教育を受けたことが客観的に証明されることから、就職活動においても高い評価が期待できます。また、ワシントン協定加盟(平成十七年度予定)後には、欧米主要国の認定プログラム修了者と同等と評価され、我が国技術者教育の国際相互承認を得ることができグローバルに通用することとなります。

第十回水産大学校—釜慶大学校 学術懇談会について

学術交流実行委員長

高 橋 幸 則

(生物生産学科教授)

二〇〇四年十月二十九日に本校において、韓国の釜慶大学校と水産大学校の第十回学術交流懇談会が開催されました。本懇談会は、姉妹校である両校が、毎年交互に主催校となつて学術シンポジウムを開催し、連携を深めるとともに、水産に係る研究の進歩と目韓両国並びに世界の水産の発展に寄与することを目的として行います。一昨年十一月には、生物生産学科の先生方と同学科の一年次生三十一名が釜慶大学校を訪問し、学術シンポジウムに参加するとともに、同校の学生と懇談会及び親善サッカー大会を行つて交流を深めました。

今回、釜慶大学校からは、水産科学大学(学部)の崔宗和学長をはじめ、養殖学科及び水産生命医学科の先生方総勢七名が来校されました。懇談会の冒頭に三本普善昭理事長が、起源を同じくする釜慶大学校と水産大学校は韓国及び日本を代表する水産教育機関であり、両校が世界の垣根を越えて連携を強化することが世界の水産業の発展に大きく貢献するものと確信しているとの歓迎の辞を述べられました。また、釜慶大学校の崔宗和学長が国家間に国境はあっても、学問に境界

は存在しない。私達の研究対象である海洋の生物資源が人為的な境界に拘束されない生態的特性を持つていることを考えると、二つの大学の学術交流事業は末永く持続・発展させねばならないと話されました。

学術シンポジウムにおいては、養殖ヒラメに寄生する寄生虫の細胞から抽出した物質がヒラメの白血球を死滅させることから、この物質が病気を引き起こす重要な因子であることを発見した研究発表や、ヒトでは赤血球が著しく減少すると死んでしまうが、魚では赤血球の容積比が10%に低下しても生存できるなど、ヒトと魚の貧血による影響度の違いについての講演があり、また毒素を産生する海洋微細藻類をムラサキイガイに食べさせるところ、この貝が毒化したことから、貝による食中毒の原因の一つであること突き止めた研究の発表及び海水魚であるクロダイは淡水飼育が可能であり、長期間淡水で飼育しても成長や味が海水で飼ったものと変わらないなど、釜慶大学校の先生方から興味深い五題の講演がなされ、本校の先生方及び学生からは活発な質問が出されて大変有意義なシンポジウムとなりました。

今後は、このような学術シンポジウムに加えて、日韓両国が共有する海洋の環境と資源に係る共同研究や学生間の交流などを行つて両校の関係を密にし、教育・研究のさらなる発展に繋げることができればと考えています。

「水産伝統食品から先端技術を活用した新しい水産食品へ」

食品化学科シンポジウム事務局

原 田 和 樹

(食品化学科助教)

九月二日(木)午後三時から、食品化学科の新しい試みとして、学科長・芝恒男教授の主導の下、当学科教員の全員が表記シンポジウムに取り組みました。内容は水産事業者や市民を対象とした平易なものであり、会場は水産大学校共同研究棟四階の多目的ホールにて実施されました。この催しは本校のホームページでも紹介されたので、ご存知の方が多くと思います。私は、このシンポジウムの事務局をさせて頂きましたので、その時の様子をここに報告させて頂きます。

学外から四名の講師を招き、学内から三名の発表者を加えた当日のスケジュールは、三本菅善昭理事長の挨拶をスタートに、「なぜ、水産伝統食品を守らなければならないかー水産発酵食品を中心にして」(東京海洋大学の藤井建夫教授)、「フク醤油」の開発と水産伝統食品としての魚醤油の機能性(私)、「水産伝統食品の食文化への寄与ーカツオ出汁・コンブ出汁を中心にー」(奈良女子大学の嶋輝佳教授)、「水産ブランド品」関アジ・関サバの高品質の秘密(大分大学の望月聡教授)、「水産加工における新しい食品素材の開発」(山口大学の加藤昭夫教授と当学科の

白井将勝助手)、「水産食品からの機能性物質」(当科の末綱邦助教授)でありました。最後に、芝学科長が閉会の辞で締めくくりを致しました。

シンポジウムの参加者は約百二十名であり、会場は、マスコミ関係者も来場し、シンポジウムの様子はNHKなどの地方ニュースで放映されたそうです。また、読書新聞、山口新聞、みなと新聞、朝日新聞などでもシンポジウムに関する記事が掲載されました。また、このシンポジウムの案内は、日本水産学会、日本農芸化学会、日本食品科学工学会、日本家政学会、日本調理科学会などのホームページや学会誌に事前に掲載され、広く宣伝がなされました。シンポジウム終了後は、他校の演者の先生方、三本菅理事長以下スタッフの当学科の先生方、マスコミ関係者、参加者を交えて懇親会が実施され、和やかな雰囲気でした。なお、このシンポジウムの講演内容は、平成十七年に成山堂書店から書物として出版される予定です。

第九回公開講座

「身近な海の生物」

「里海」の持つ豊かな自然ーを開催

公開講座委員長

二 輪 千 年

(水産情報経営学科教授)

公開講座は平成八年から毎年開かれ、

今回で九年目となり、来年は早や十年目を迎える伝統ある行事となっております。

昨年までは、「面白ゼミナール(講座)」として、漁業や水産・加工業、更には海環境や水産物流通などその時々のお話を市民の皆さまと広く考える場として公開講座を開いてまいりました。また、市民の方々に水産や漁業の知識を広めるといっただけでなく、「講座」という性格上、専門的な知識や見識についても関係業界の方々にレクチャー(講義)するものでもあります。

こうした公開講座の活動を通じて、私たち水産大学の教育や研究活動に対するご理解とご支援が得られればと願い、歴代の公開講座委員会の方々は、趣旨を凝らした内容となるように努力されてこられました。

●今年のテーマ

私たちの身近な海辺には沢山の水生生物が棲息し、生態系を持った環境を創り出しています。海辺に棲む彼らの営みは自分たちの生活を維持するだけでなく、海を利用して生計を立てている漁業者や海辺に住む私たち市民の生活に食料を供給しています。また、磯辺や渚といった環境は市民生活に潤いや憩いの空間をも提供してくれています。それは、陸の「里山」に等しい大切な地域の一部とみることが出来ます。身近なこうした海辺を「里海」として見直すことで、私たちの生活の豊かさや潤いを取り戻すと共に、郷土に対する慈しみをも養うものにな

ると考えました。

以上の考えをベースに、今年の公開講座では、身近な地元(吉見)の海に棲んでいる生きものたちが創り出す海辺の環境や、そこに棲む生物たちの生態を、市民の方々、特に、地元・吉見の小学生(五、六年生)や中学生、そして市内の高校生といった、次の世代を担う若い人たちと一緒に考え、語り合ってみようという企画した次第です。

加えて、先生方のお話だけでなく、海辺を再現したミニチュア水槽の展示や、校門前の浜辺において地曳網を曳き、吉見の浜に棲む水生生物の採集などの実演も初めて試みることにしました。

そのため、公開講座参加者を今までの一般市民や業界関係者だけでなく、次代を担う若い世代の人たちにまで広げてみることにしました。市の教育委員会に相談に乗って頂き、吉見地域の小・中学校を始め、市内の高等学校を委員の方々が訪問し、生徒さんを始め保護者や先生方のご参加をお願いして参った次第です。

●会場は満杯にはならなかったが：

講演会当日、開演の予定時刻となっても、会場である共同研究棟四階の多目的ホールは閑散とした状況にあり、主催者としては、大丈夫かなと心配させられました。開催時刻を若干ずらせると、会場の席が埋まりだし胸をなで下ろした次第です(会場は満杯になったと、胸を張って言いたいのですが、残念ながら、そうはなりません)。疎らだったのは、

共同研究棟の玄関横に、生物生産学科の浜野龍夫先生と学生さんたちによって作られたミニチュアの磯場や浜辺に、参加者の多くが戯れ、なかなか講演会場に来てくれなかったからでした。加えて、残念なことに、公開講座の当日は、吉見中学は中間試験の最中であつたり、吉見地区の球技大会が催されていたりと、小中学生の行事と重なってしまいました。高校生もこの時期から受験期に入つて、当日に全国模試と重なっており、彼らの参加も望めない状況ではありましたが、以上の結果、若人で会場を一杯にするという当初の予定は完全に裏切られ、ちよつと寂しい結果となつてしまいました。とは言え、一般の参加人数は昨年を上回る七十四人で、学内関係者をあわせると合計百人程度になり、参加者の中に当校への進学希望で遠方から駆けつけてくれた方もあり、嬉しく思いました。また、環境問題に熱心に取り組んでおられる方々の参加も多数あり、それだけに熱心な質疑が交わされ、公開講座の一応の目的と成果は達せられたものと思つています。

●先生方のお話(要旨)

先生方の講演が始まる前に、主催者を代表して企画情報部長の鬼頭鈞先生(生物生産学科教授)による挨拶と共に、今回の公開講座の意義などを話して頂きました。

鬼頭企画情報部長の挨拶の後、先生方のお話に移りました。

一題目は、生物生産学科の村瀬昇先生による「海の草原「アマモ場」を知ってる？」が話されました。

村瀬先生の話で、アマモ場が、海に生きる生物たちにとって、生命を慈しむ母なる場所であり、アマモなどの海藻類の光合成によって海の生物たちにとって大切な酸素を供給していることが、パワーポイントを使ったビジュアルな画面で紹介されました。また、動画として写された場面では、聴いている私たちが小魚となつてアマモ場を泳ぎ回っている感覚に陥つてしまうようでもありました。

二題目は、同じく生物生産学科の荒木晶先生による「干潟を耕す生きものたち」の講演です。

荒木先生は、海と陸とが接する波打ち際に棲むいろんな生物たちは、海水の浄化や、海底を耕し、栄養を補給する働きなどをしている大切な生きものであることを紹介されました。また、その干潟の環境を人間社会と共存した海Ⅱ「里海」として守っていく大切さを説かれました。

先の二題は、海の草原や、海底を耕す生物たちについてのお話でしたが、最後に、私たちの身近な海辺が、私たちの生活にとって欠かせない、大切な場所・空間であり、里にある雑木林Ⅱ里山のような働きをする「里海」として豊かな自然を構成していることなどを、生物生産学科の須田有輔先生に語って頂きました。

須田先生は、里海の波打ち際には、①自浄作用の場として自然の浄化機能を持

つ場所、②生物棲息場として様々な生物が棲む場所、③親水空間として人々にとって心地よい場所といった三つの大切な役割があり、それらはお互いに密接に繋がりがながら機能し合うことで、豊かな「里海」を創り出していることを話されました。

三人の先生方のお話に、多くの質問や、質問者の関心事などが会場から寄せられ、活発な質疑討論となりました。質問の多くは、身近な海Ⅱ「里海」に対して認識を新たにしたいことや、そのような大切な「里海」をどの様に守っていけばいいのかといったことが、質問者と先生方の討論で語られました。

先生方のお話や質問が熱のこもったものとなつたことから、予定の時間を若干オーバーして、講演会を無事終えることが出来ました。

●前浜でのイベント・生物採集

引き続き、会場を校門前の前浜に移し、もう一つのイベントである地曳網による生物採集が須田先生の指揮の下、須田研究室の学生たちによって実施されました。

網を三回ほど曳きましたが、シタビラメやフグの子供など吉見の浜辺に棲む魚たちが網に入り、浜野龍夫先生や須田先生によって、魚の名前や生態についての詳しい説明が行われました。三回の曳網は、学生だけでなく、公開講座に参加して頂いた方々や子供さんたちにも手伝って頂き、みんなと一緒に生物採集を行いました。

ました。参加者の中には、先生方の説明を熱心にメモしたり、質問したりと、講演会場での盛り上がり以上に前浜での盛り上がりがあったことが強く印象に残っています。

最後に、委員長として至らない面や不十分な点が多々あつたと思いますが、無事、全ての予定を済ませることが出来たのは、ひとえに公開講座委員会委員の方々とご協力を頂きました皆さま方のお力添えがあつたものと、改めて御礼申し上げます。そして、来年の公開講座は、今まで以上に成功されることを祈念しまして、筆を置きたいと思つています。

学会賞受賞内容のご報告

水産学研究所教授(食品化学科)
花岡 研一

お陰さまで、昨年度、日本水産学会賞進歩賞を受賞いたしました。受賞対象は「海洋生態系におけるヒ素化合物の動態に関する研究」です。ヒ素は嫌われ元素の代表ですが、この研究では、ヒ素の毒性のみでなくその海洋での循環も追及いたしました。

この機会に研究内容をできるだけご紹介したいのですが、紙面の都合上、皆様に興味を持っていただける「海産食品中のヒ素の安全性」についてのみとさせていただきます。私ども以外の研究成果も含め

て、以下にお話させていただきます。

さて、海水中のヒ素はほとんど無機態(有毒)です。しかし、その濃度は極めて低く、約2ppb(十億分の2)です。ところが、このヒ素は海産生物中に著しく濃縮され、生物によっては乾物あたり10~100ppm(百万分の数10から100)に達します。この表現では高いか低いか分り難いのですが、森永ヒ素ミルク中毒事件での粉乳中の無機ヒ素濃度、約20ppmと比較するとその高さが理解できます。なお、森永ヒ素ミルク中毒事件とは、一九五〇年代の始めに起こった中毒事件です。

人間は、なぜ高濃度のヒ素を含む海産生物を食べても中毒しないのか?これが、当初の大きな課題でした。私どもも含めて、多くの研究者がその解明に取り組みました。その結果、結論として、海産生物のヒ素はほとんどの場合に無毒化されておりました。これが、海産生物を食べるでもヒ素中毒の起こらない理由です。

ところで、例外的に無機ヒ素を含むヒジキが、昨年六月末に外国で問題視されました。その報道が、日本でも若干の動揺を引起したことをご記憶かと思えます。この無機ヒ素は水洗いでヒジキからかなり除去されます(すでに論文発表済み)。しかし、私どもは水洗い後の残存ヒ素について、今回あらためて研究を始めました。ただし、日本では先祖代々ヒジキを食べてきましたから、問題は、「ヒジキは安全か危険か?」ではなく、「なぜヒジキ中毒が起らないか?」だと考えます。これを解明できたら、また是非ご報

告させていただきますと思います。

以上、研究の一端をご紹介いたしました。が、私一人では今回の受賞に結びつかなかったのはもちろんです。ご指導いただいた本校名誉教授の田川昭治先生をはじめ、お力添えいただきました多くの方々、また、共同研究者として共に過ごしてまいりました卒業生や研究科生の皆様に心より感謝申し上げます。

就職活動

国語力からみた就職対策について

就職対策委員長

毛利 雅彦

(海洋生産管理学科講師)

今年度始め、第一回目の就職対策委員会が開催されました。席上、諸先輩の先生方をさし置き、小職が持ち回りの委員長に任命されることとなり、大役を与りました。

当委員会で討議された特徴的な内容は次の通りでした。

一、教授数名を専任の担当官として、就職活動に積極的に取り組んでいる学科もあり、この学科においては、就職先の企業、就職した学生のデータなどをデータベース化して、将来の就職活動に備えているとのことでした。

二、近年、学生諸君の国語力の低下が就職に悪影響を与えていることが問題となりました。就職時の面接やエントリーシート等に的確に対処するには、

最低限の読解力、理解力、表現力等の「国語力」が必要不可欠である、というところが就職対策委員全員の共通した認識となっています。

国語力の低下に関する問題で、現役の学生諸君が、緊急に改善しなければならぬ事項は多々あります。国語力低下の一因としては、メールの普及による(一)や(二)等(絵文字)や、新造語を勝手に出現させ、言語を消耗品のごとく扱うような昨今の風潮、それに伴うコミュニケーションの変化、及び携帯電話の使用が一般化して相手の表情等から言外の意味を捉える機会が消えつつある現状を考えると、国語力が低下する環境下で、学生諸君が基礎的な「国語」を使う機会及び読書の機会が極端に少なくなっていることが挙げられます。

水産大学校生の諸君は、それぞれの故あって、当校で水産学と親しむことになりました。水産学につきましても、昔を問えば、内村鑑三氏や寺田寅彦氏等による先達の功績を論じることが出来ます。内村先生の「漁業もまた學術の一つなり」という演説からは話す言葉を、「水産物理学」の研究だけではなく夏目漱石を師と仰いだ寺田先生の著作からは、書く「国語」を学ぶ機会が得られるでしょう。

「就職対策」という視点からも、学生の諸君が図書館を大いに活用されること

をおすすめします。今後とも学生の諸君と教職員とが更に協力し合い、より良い就職活動へ向けて学内の環境を整えて行くことが大切だと信じています。

就職活動

海洋機械工学科 四年

江上大祐

就職を意識し始めたのは三年に上がった頃だった。春に実家で友人たちの就職内定の話を聞いていたせいもあり、早い時期から就職について考えていた。ただ実際就職活動を始めたのは十月に入ってからだった。この頃は何をすればいいのか全くわからず、とりあえずリクルート関係のサイトに登録して、何も考えず自分の興味のあるような職種の会社にエントリーしていた。後で思うと非常に効率の悪いやり方だったと思う。

エントリーした会社は百を超えたが、結局適当にエントリーした会社には一切説明会に行かなかった。実際本当に自分のしたい仕事、入りたいと思える会社を探し出したのは一月中旬になってからだった。この頃になってようやく興味を持った会社の説明会に参加するようになった。就職活動の進め方がわかってきたような気がする。説明会に参加したのは八社程度だったが、聞いていて面白いと思える説明会と、そうでないのがあった。面白いといってもそれはおかしいという

ことではなく、為になる、聞いていて飽きないという意味での面白さである。そういう説明会をする会社は基本的にあまり大きくないところが多かった。社長やそれに近い立場の人自らが話をしていて、その人の考え方、その会社の考え方を聞いてみると、社会に出ることの大変さを改めて感じたような気がした。

その後四社ほど面接に進んだが、初めての面接は緊張しすぎて何を話したかよく覚えていない。ただどの面接でも聞かれることは殆ど変わらず、ありのままの自分をアピールすればいいと考えるようになり、そう考えると少しずつ気持ち楽になっていった。最終まで進んだときには自分の意見を言えるようになっていた。自分では就職活動を通じて少し成長できたと思っている。就職活動は大変なことや苦しいことも多かったけれどそれ以上に得るものが多かったように感じる。学生最後のイベントである就職活動は僕にとっては学生生活最後の授業だった。

就職活動

食品化学科 四年

福井謙一

私の就職活動は、三年生の一月頃から始まりました。就職活動といっても、インターネットを利用して興味のある企業にエントリーするだけでした。

三月頃になると会社説明会の予定がた

くさん入ってくるが、自分が何をしたいのかも分からないまま、ただ何気なく会社説明会に参加するだけ。最初はたくさん受ける会社があったのに、いつの間にか受けられる会社が十社に満たない状態に追い込まれていきました。

危機感を感じた私は、今まで自分がやってきたことを振り返り反省しました。会社に応募するエントリーシートの内容は、自己分析もろくにせず、参考書に書かれた文章を抜き出して書き出すだけ。

志望動機は会社のオベンチャラを言っているだけで、相手に何も伝わるはずありませんでした。そこで私は原稿用紙五十枚程度に自分が今までしてきたことを思い出せる限り書き出してみました。不思議なことに、書き出した中に自分の興味、自己アピール、長所、短所などが全て網羅されていました。私が最も苦労した点は、面接です。面接官からの質問は返答することができず、一次面接すら通過できない日が続きました。なぜ受からないか考えた末、自分らしさが全く出せていないことに気づきました。なぜなら、今まで面接に通過したいばかりに、無意識のうちにもう一人の自分を創ってしまったからでした。このことを反省し、次の面接からは「ありのままの自分」を面接官にアピールすることができ、最終的に内定を獲得することができました。

就職活動は、内定を手に入れるまでに沢山の「ハードル」を越えなければなりません。きっと必ずどこかで辛くなって

しまうと思います。そういう時は家族や先生、友達に相談したり、息抜きをしたりしてみて下さい。きっとやる気が出てくると思います。

最後に、就職活動をしていく中で忘れてはいけないことがあります。決して「自分なんて」と思わないで自分に自信を持ち、いつも前向きに頑張る事です。諦めずに頑張れば必ず良い結果に結びつくはずです。

在校生の声

水産大学校に入学して

海洋機械工学科 一年

柴岡成洋

私の夢は船の機関士になることです。

私は館山海上技術学校出身なので、水産大学校で学ぶ専門科目が大変興味があり、上級の海技試験を早く取得したいと考えていますので、現在二学年に開講されている海技科目を受講しています。この科目は機関の理論や構造についての講義で、その他にも高校時代にはあまり勉強する事なかった水産に関連することや海洋エネルギーの利用、環境問題に関する講義などもあり、毎日がとても楽しいです。これからより専門的な勉強をしていくことになりませんが、頑張っていきたいと思

っています。

クラブ活動は柔道部に入っています。私は大学に入ってから初めて柔道をやるので先輩や友人達に教えていただきながら毎日練習に励んでいます。昨年は団体戦と個人戦にそれぞれ一回出場しましたが、初戦で負けてしまいました。今年の目標は一回でも多く勝つことと、昇段試験に合格することです。

これからも今の気持ちを忘れずに勉強やクラブ活動など、様々な事に精一杯励んでいきたいと思っています。

大学生活を振り返って

水産情報経営学科 二年

桜井英之

私は下関市近郊に住んでいるため、この大学に入学してから生活が大きく変化することはなかった。家の周りには若者が遊ぶような所もないので、学校が終わるとバイト、ドライブ、魚釣りなどを行って過ごしている。また、祖父が退職後、漁師になり、その手伝いで沖に出ることも多く、いつどの時期にどの漁法で何が釣れるかということ、天候の見方、操船の仕方など、様々なことを教えてくれる。これらの知識は、釣りに行くときにとっても役に立っている。

海が好きで、祖父の漁業の役に立つものが得られればと思いいこの大学に入学した。講義のなかでは、普段使用している

漁具の説明、魚類の生物学的な話など、とても興味深い内容が話されるため、講義を聴くのはとてもおもしろい。しかし、文系出身のため、物理、数学、化学の基礎知識が必要になる教科の単位取得にはとても苦労することもある。これから更に講義は専門的になり、内容も難しくなると思うがくじけず頑張っていこうと思う。

三年になると、授業、趣味、バイトの日々というわけにはいかなくなる。就職活動や進学の為の勉強なども始めなければならぬ。まだ、どのような道に進むかも完全に決定できていないので、いろいろな資格を取得するという事にも時間を費やそうと考えている。先のことを考え、それに向かって時間を有効に使っていこうというのを三年次の目標としてがんばっていきたい。

地域の人々と触れて

海洋生産管理学科 三年

大 網 利 治

水産大学校に入学した年の十二月、大学近くの吉見小学校で活動しているスポーツ少年団が、サッカーのコーチを募集しているのを知りました。私は小学校の時から十五年間続けてきたサッカーの経験を活かすチャンスだと思いました。それから現在に至るまで、放課後や週末は小学生相手にサッカーを教えています。

自分がサッカーをするのと教えるのとでは勝手が違い、初めは小学生の反応に戸惑い苦労しましたが、次第に小学生だけでなく保護者の方ともコミュニケーションがとれるようになりました。教えている子の父親から、「コーチが一所懸命に教えようとしているのが伝わってくる。今後とも指導をお願いします。」と言って頂いた時、信用されてきたかなと嬉しく思ったのをよく覚えています。何事も懸命に取り組めば、周りから信用されることに気づかされました。

サッカーを教えることから、学校の授業では教わらないとても大事なものが得られたと思います。何よりコーチをしていて一番良かったと思うのは親元を離れて独り生活している私を家に招いて頂き、食事をしたり一緒にお酒を飲んだり、まるで家族の一員のように接してくれることです。

水産大学校は地理的にも少し片田舎に所在します。初めて訪れた人は大学に少し孤立感を感じるかもしれませんが、日々の学生生活では地域住民の方々から大切に頂いていると感謝しています。入学当初は、学生生活に多少の不安を感じていましたが、今では将来就職して、大学校周辺の環境から離れることを考えると名残惜しい気持ちで一杯です。

四年生に進級してから、卒業論文や就職活動など忙しくなりそうですが、これまでの学生生活で得た経験を生かして、気持ちに張りのある日々を送っていきたいと思います。

卒業生の声

近況報告

天鷹丸三等機関士

赤 田 芳 裕

(機関学科五十期卒)

私は水産庁に入庁し予備員として白竜丸、照洋丸に一年間乗船しました。白竜丸では韓国船や中国船の違反操業船の取締りを行いました。EEZ水域における漁業操業では、厳しく監視・取締りを行わないと違反船はなくなりという厳しい社会現実を目の当たりにしました。次席三等機関士と言う職責と取締り業務の仕事を感じるのは大変苦労しましたが、大いに勉強になった社会に出た最初の一年間でした。

照洋丸では大西洋での南マグロの調査を行いました。取締り船とは違って長い間港を離れて調査員の指示のもと操業を行いました。調査操業は海域や季節により調査対象魚の漁獲量や種類が大きく変わります。また対象魚が取れないなど精神的にきつい時もあり忍耐が要求されるときがあります。さらに航海の長さからストレスも船内にたまります。船乗りの精神的なきつさの多くは長く陸上を離れることだと思えます。照洋丸での経験は、船乗りの心情の部分を体験できた貴重な経験となりました。

本校の天鷹丸の一員としては、もうじき二年目を終えようとしています。予備員時代の経験を活かすことができればとがんばっています。

学生生活の思い出

愛媛県魚病指導センター

中 岡 典 義

(生物生産学科五十三期卒)

水産大学校を卒業して、もうすぐ二年目が終わろうとしています。現在私は、愛媛県の魚病指導センターという所で働いており、主に魚病診断、魚病に関する試験研究等を行っております。

社会人になっての一年目は仕事を覚えることに精一杯で、メモ帳を片手に動き回り、気が付けば一日が終わっていました。二年目になると気持ちの余裕ができるだろうと思っていたのですが、予想に反し、仕事の量が格段に増え、未だ地に足が着いていない状況です。

学生時代は、野球部、バドミントン同好会に在籍していました。また、地域の集まりを通じて、社会人との交流も盛んに行っていました。勉学の方は正直、入学当初はほとんど授業に出席していませんでした。それというのも、高校時代に落ちこぼれたことを引きずり、怠け癖がついていたからです。その性格を直してくれたのは、同じ野球部だった専攻科の先輩でした。先輩は私に「十代の事

を悔やむのはやめて、これからのより大切な二十代を一生懸命生きよう」と言ってくれました。簡単な言葉ですが、間違いなく私を変えた一言でした。

常々、今の自分は人との出会いによって作られたものだと感じます。特に大学時代に会った人はその影響が大きく、また、私の大切な財産です。在学生の人は、ぜひ、大学内外を問わず様々な人に出会い、価値観や視野を広げてほしいと思います。また、それは社会人になった時の人脈としても必ず役に立ちます。最後に、大切な紙面をお借りできたことを感謝致します。

新任紹介

着任にあたり

海洋生産管理学科助手

滝川 哲太郎



平成十六年七月一日付で海洋生産管理学科資源環境計画学講座助手として着任しました。前職は研究所勤務でしたが、水産大学校に移ることによって、研究に

対するより自由な発想、学生との交流に期待を膨らませております。

着任後、研究室教授不在という不安な状況ではありましたが、海技実習、海外漁業協力財団(OFCF)の研修、国際協力機構(JICA)の研修と、あつという間に数ヶ月が経ってしまいました。現在、学科内外の先生方、事務の方々のおかげで、研究・教育等が軌道に乗りつつあります。この場を借りて、お礼申し上げます。

専門分野は海洋物理学で、主に対馬海峡を通過する対馬暖流の流動構造・流量についての研究を行ってきました。水産大学校は、研究フィールドに近く、二隻の練習船を所有しているという、とても魅力的な環境下にあると思います。実際、天鷹丸第一四〇・一四三次航海に乗船させて頂き、調査・教育を行うことが出来ました。天鷹丸船員の方々の献身的なご支援には、非常に感謝しています。これからも、現場観測をもとに、研究・教育を進めて行きたいと思っておりますので、これからも宜しく願います。

着任のご挨拶

食品化学科助手

白井 将勝



平成十六年四月一日付で、食品化学科生物化学講座の助手として着任いたしました。

昨年度まで博士課程の学生として、山口大学に所属しておりました。学生時代の研究内容は、卒論・修士課程までは、歯周病を引き起こす細菌の口腔内付着機構や病原性に関する研究をし、博士課程では、アレルギー防止や治療薬の開発を目標に多糖修飾によるスギ・卵・大豆の抗原(アレルゲン)蛋白質の抗原性の低減化の方法についての研究を行ってきました。これら研究を通じ、遺伝子解析・工学、蛋白質の化学修飾及び高機能化、ヒト血清やマウスを使った免疫実験、など様々な知識・手法を身に付けることができました。

水産大学校に着任してからも、蛋白質の多糖修飾の研究を続けさせて頂いており、この研究を通して、学生さんの考える力、実行する力を育み、努力し達成する事の喜びを伝えて行きたいと思っております。若輩者ですので、今後とも皆様のご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

初めまして

食品化学科助手

和田 律子



平成十六年八月一日付で着任し、資源理化学講座に所属しています。本校の女性教員は私を含めて二人、学科では初めてのこと皆様から歓迎を受け親切にして頂き、ありがたく思っております。

着任前は他大学の食品系学科で化学実験や食品加工実習など様々な実験実習を担当してまいりました。

これまでに研究対象としていたものは乳清タンパク質です。チーズ等の製造時に副産物として生じる液体(乳清)中のタンパク質を有効利用するために、加熱変化と凝集体形成について明らかにする研究を行ってきました。本校では所属講座で以前から行われていた、無晒しすり身を用いた練り製品加工に関する研究を一緒に行っております。通常蒲鉾は魚肉を水晒しして作られますが、無晒しで加工できれば栄養分の流出や処理水による環境汚染を防ぐことができます。以前の研究と共通する「資源の有効利用」という点を生かし、役立つ研究にしたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

大 学 祭

'04 海燕祭を振り返って

大学祭実行委員長

杉 山 堅 治

(海洋生産管理学科 三年)

今年はず昨年までとは違い、実行委員長として臨んだ一年間でしたが、振り返ってみると実に様々なことがあったと思います。

今年はお笑いの芸能人の方々を迎え、本校の学生、下関・吉見地区の方はもちろん、県外からのお客様も多数お越し下さったお陰で昨年よりもさらに盛り上がりました。そして、色々新しいことを試みた海燕祭でした。その背景には下関・吉見地区との大きなつながりがあったからだと思います。五月の海峡祭、六月のホタル祭り、八月の吉見祭り、海峡花火大会、馬関まつりなどの活動に参加することにより、多くの人との出会い、かけがえない経験を積むことができました。また、それらの人達と出会うことで、自身も大きく成長することができたと思っています。

このような地域の人たちとのつながりはもちろん、海燕祭をよりいいものにするためには我々実行委員の団結力が何より必要だと思えます。今年の実行委員はみんな個性が強く、海燕祭をより良いもの

にするために多くの意見を出してくれました。特に今年は一年生が積極的に活動してくれたので、今までにない海燕祭ができたのだと思います。また大学祭以外でも、一緒に遊んだり飲んだりして、本当の仲間としての関係を築けたと思います。そしてエンディングでは、大学祭に協力してくれたたくさんの方の写真をスライドショーとして流し、最後に花火で閉めるという、水産大学校学園祭の伝統的な形でした。

二〇〇五年の海燕祭が前年をはるかに凌ぐくらい大きくなることを、そしてこの素晴らしい海燕祭が受け継がれることを願っています。

ク ラ ブ 紹 介

ダイビング部

三 島 一 晃

(生物生産学科 二年)

私達水産大学校ダイビング部員は、現在男子十七名、女子一名で、四月から夏休みが始まるまでの月曜から金曜日が主な活動期間となっております。それ以外は個人活動を行っています。

活動内容は、初めにプールで潜水訓練を行い、予めみんな考えておいた目標をクリアすると、前海や裏海で海中生物

の観察などを行います。

ダイビングとは楽しいスポーツでもありますが、常に危険と隣り合わせのスポーツでもあります。このため私達は、一人一人が日頃から安全潜水を心がけ、ダイビングをより楽しめるように努力しています。

また、私達はただダイビングを楽しむだけでなく、この潜水能力を活かして水中清掃なども行っており、昨年は下関市が主催するバーステークリナーアップに参加し、西山海水浴場の海岸や海中のゴミ拾いもしました。今年はずも多くのボランティアなどに参加し、ダイビングを活かしていこうと思います。

私達は水産を専門とした学校に来て、水産の勉強をしています。ただ学校の授業を聞いて納得しているだけでなく、実際に海に潜ってみて、自分の目で見て体感することも大切だと思います。それにはこのダイビングというスポーツは最も適しており、これからも多くの場で活用し、役立たせていこうと思います。

ダイビング部ホームページ

<http://www2fish-u.ac.jp/sensui/index.html>



学 生 部 だ よ り

平成17年度の就職対策と現状について

現状について

最近の日本経済は代表的な景気指標である一月の鉱工業生産指数が二〇〇年十二月以来、四年ぶりの高い水準となっています。

自動車の生産が好調、化学、電子部品などで生産が伸びています。

雇用情勢についても、厚労省が発表した求職者一人当たりの求人割合を示す有効求人倍率は〇・九一倍で昨年よりも改善されています。

雇用の先行きを示す、新規求人は前年同月比八・八%増と三十一ヶ月連続で増え、求人状況も改善が続いています。

こうした景気動向であります。平成十七年度の新規採用も企業側の採用スタンスとしては、依然として厳しいものがあり、「採用定数の確保」よりも学生の質を優先する傾向にあります。

こうしたなか、企業の求人活動は早期化し、本校においても平成十七年度卒業予定者を対象とする企業からの求人も既に、多数来ています。

これらの状況を踏まえ本校では、学生に対し企業情報の迅速な提供とともに、企業に働きかける試みとして、本年は企業説明会を二月に開催しました。本校で

は初めての試みでしたが、多数の企業並びに学生が参加しております。

本校の他の就職対策としては、就職対策検討委員会をもとに就職ガイダンスの開催、就職手引き書の配付、具体的なエントリーの方法及び自己分析・自己発見のための職務適正テストと学生の就職活動に対し支援を行うとともに学生課に就職窓口、各学科に就職指導担当教員を配置し個別に就職支援を行っております。

また、公務員を目指す学生には、公務員試験の情報の提供並びに先輩を講師にした、公務員ガイダンスを実施して取り組みを強化しています。

なお、平成十六年度の卒業予定者の就職内定状況は別表のとおりです。

平成16年度卒業・修了生進路状況

平成17年 3 月 14 日現在

本専攻研究科	卒業 予 定 者 数	進 学 関 係						就 職 関 係										合 計	
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	研 究 生	そ の 他 の 進 学	進 学 希 望 者	計	国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	水 産 産	船 舶	造 機 ・ 造 船	食 品	(1) そ の 他	計 (内 定 者)		進 路 未 定 者
水産情報経営学科	男	22	1											2	7	17	4	21	22
	女	6													1	5	1	6	6
	計	28	1							1	7	1		2	11	22	5	27	28
海洋生産管理学科	男	30	1	2	9		2			1	7			2	3	13	3	16	30
	女	12			1	3		1			3			1	2	6	1	7	12
	計	42	1	3	12		3			1	10			3	5	19	4	23	42
海洋機械工学科	男	21	4	1	8						1		6	1		8		8	21
	女	2			1										1	1		1	2
	計	23	4	2	8						1		6	1	1	9		9	23
食品化学科	男	21	9				4	13			3			5		8		8	21
	女	22	1				1	2		2	3		11	3	19	1	20	22	
	計	43	10				5	15		2	6		16	3	27	1	28	43	
生物生産学科	男	29	3	7		3	2	15	1	1	4		2	3	11	3	14	29	
	女	16		1				1		3	4		3	4	14	1	15	16	
	計	45	3	8		3	2	16	1	4	8		5	7	25	4	29	45	
計	男	123	18	10	17	3	4	56	1	1	2	22		6	12	13	10	67	123
	女	58	1	3	3		1	9			5	10	1	15	14	4	49	58	
	計	181	19	13	20	3	5	65	1	1	7	32	1	6	27	27	14	116	181
専攻科船舶運航課程	男	17	1					1						5	14	2	16	17	
	女	2													1	1	2	2	
	計	19	1											5	15	3	18	19	
専攻科船用機関課程	男	14							2	1		1	5	2	11	3	14	14	
	女	1								1					1	1	1	1	
	計	15							2	2		1	5	2	12	3	15	15	
計	男	31	1					1	2	1		1	14	7	25	5	30	31	
	女	3								1				2	1	3	3	3	
	計	34	1					1	2	2		1	15	7	27	6	33	34	
研 究 科	男	7	2					2			3		1		4	1	5	7	
	女	1											1		1	1	1	1	
	計	8	2					2			3		1	1	5	1	6	8	
総 合 計	男	161	21	10	17	3	4	59	3	2	2	26	14	7	12	20	16	102	161
	女	62	1	3	3		1	9		1	5	10	2		16	14	5	53	62
	計	223	22	13	20	3	5	68	3	3	7	36	16	7	28	34	21	155	223

(分類内訳)

各 種 団 体 = 水産関係各種団体

水 産 = 水産関係関連企業

船 舶 = 船舶・海事関係水産関連企業

造 機 ・ 造 船 = 造機・造船関係水産関連企業

食 品 = 食品関係水産関連企業

※ そ の 他 = 水産業関連以外 (公務員・団体・企業)

平成16年度卒業予定者進学・就職内定状況一覽表

平成17年 3月14日現在

Table with 4 columns listing university names (e.g., 北海道大学, 東京大学), company names (e.g., 株式会社, 株式会社), and specific departments or roles. Includes sections for '進学 (大学院等)', '就職 (官公庁)', and '水産関係各種団体'.

平成十七年度入試状況

本校の平成十七年度入試状況をお知らせします。

推薦・一般入試の志願者総数は、九百九十七名で昨年度を二十七名下回る結果となりました。一般入試の学科別の応募状況は、水産情報経営学科六十一名(募集人員十六名)に対する倍率四・四倍、海洋生産管理学科百六十三名(募集人員二十七名)に対する倍率六・〇倍、海洋機械工学科百二十名(同倍率四・四倍)、食品科学科百八十七名(募集人員三十二名)に対する倍率五・八倍、生物生産学科四百四名(募集人員二十一名)に対する倍率十九・二倍、で食品科学科及び生物生産学科が前年の志願者を上回った。また、先に行われた推薦入試には、全学科で百五十一名が応募し、六十三名が合格した。

一般入試は、平成十七年二月十一日に下関・東京・大阪の各試験場で実施され、二月二十四日に合格発表となった。次年度以降も少子化が進む中で、オープンキャンパス、高校訪問及び公開講座等の広報活動を充実させ、本校の特色と個性豊かな教育方針を前面に打ち出し、受験生に魅力ある大学校となるよう一層の努力をして参る所存であります。(注) 推薦入試の不合格者は、一般入試を再度受験した。

人物往来

(敬称略)

平成十六年度

【水産特論講師】
六月二十五日

水産庁漁政部企画課長 須藤 徳之

七月六日

水産庁資源管理部管理課指導監督室長 淀江 哲也

十月二十七日

水産庁漁政部水産経営課指導室長 佐藤 力生

十一月十五日

水産庁漁政部加工流通課課長補佐 横田 美香

一月十二日

水産庁増殖推進部研究指導課海洋技術室長 松本 憲二

【叙位・叙勲】
四月二十九日

瑞宝中級章 松生 治

五月二十五日

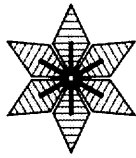
正四位 故高井 徹 (名誉教授)

【名誉教授】
四月二十七日

林 健一 (元生物生産学科教授)

〃

原田 勝彦 (元食品化学科教授)



水大学園だより

独立行政法人 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-11 電話 0832(86)5111
【発行】学園だより編集委員会 ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp>

ご挨拶

理事長 藤 英 俊



本校は農林水産省所管の唯一の高等教育機関であり、平成13年4月から独立行政法人に移行しましたことをご承知の通りです。法人体制の下では、評価に基づき競争原理を導入した民間的発想と学外者の意見を取り入れた大学校の運営や特色・特徴を出すこと

が要求されています。特に平成17年度は、第1期中期計画期間（5ヶ年）の終了に当たり、総務省や農林水産省の評価委員会において、本校の事務・事業の評価が行われ、次期5ヶ年に向け見直しを行うこととなりました。その主な点は、①農林水産省所管の法人である意義を明確化し、本校の独自性を発揮すること ②専攻科定員規模の見直し ③練習船の効率的運用と体制の見直し、④職員の非公務員化等となっております。本校は、これらの見直しを確実に進め、更なる教育・研究の改善を強力に推し進め、水産業とその関連業界において主導的な役割を担える学生を育てることに努力して参ります。

ところで、報道されているように、大学全人「大学の入学者数と志願者数が同じになる」時代が従来予測されていた2009年から2007年に早まったと言われています。定員割れの4年制大学が年々増加傾向にあり、平成17年度日本私立学校振興・共済事業団の調べでは、大学533校中155校が定員割れを起こしており、国立大学でも8大学が定員割れとなり、2次募集を行っているとのこと。本年度の18歳人口は136.5万人で、この10年間に40万人も減少しています。特に水産業は3K（危険・きつい・汚い）といわれ、若者の就業率が低く、水産高校や国立大学の水産学部などは名称を変更して、学校の存続や学部・学科の維持を図っているように思えます。これでは、国民一人当たりの水産物消費量が世界のトップクラスの水産にある我が国の動物タンパク質の確保を担う若者の教育が心配されます。

幸い本校の受験倍率は、この数年間5倍以上を維持し、ほぼ全都道府県の学生さんが毎年在籍致しております。しかし、受験生にとって、今や就職を見据えた大学選びは常識となるなど出口をめぐる競争が激化していると言われております。

本校は、水産業を担う人材を育成するという目的に向かって、「学習・教育目標」において出口を見据えた教育課程の更なる重点化を行うと共に、水産施策・流通・経営等を重視したカリキュラムの充実にも努め、他の大学ではできない全学生の乗船実習を通じた実学教育など、4年（本科）又は5/6年

間（本科+専攻科/研究科）の一貫した教育に取り組んでおります。

我が国は四面を豊かな海に囲まれ、古くから水産資源を食料として有効に利用する豊かな文化を築いてきた歴史があります。この文化は、これからも維持・継続してゆかなければならないことは言うまでもありません。しかし、地球規模で人口増加が急速化しており、海洋資源の枯渇が危惧されております。今こそ、これらの難問を解決できる水産人を育てることが必要であり、それは本校の重要な役割でもあります。また、水産資源の持続的利用には、遺伝子工学を含む様々な分野の先端技術の開発や水産流通・経営などの知識が必要で、これからの水産学は夢多き分野であります。

本校は、建学の精神に則り、高度の専門的知識と技術を持つ意欲的な人材を育成するため、時代にマッチしたカリキュラム体系を組み上げるとともに、研究においても、「最近の研究成果から」という冊子にとりまとめましたが産学連携等に積極的に取り組んでおります。

最後になりましたが、練習船耕洋丸の代船建造が三菱重工業（株）下関造船所で行われることになりました。また、体育館も立て替えの準備が進んでおり、教育環境は益々充実しております。ご尽力頂きました関係各位に厚くお礼申し上げますと共に、今後とご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

よりよい人材の育成に向けて

校長 本村 紘治郎



先日、卒業生の結婚披露宴に出席した際、卒業生の就職先の上司3名の方と同席しました。名刺交換の後、早速、異口同音に「水産大学校は外れない。」という大変有り難い言葉を頂いたのです。その就職先では確かに多くの本校OBが採用され、本校で学んだ専門的知識・技術を生かして活躍し、私の知る先輩後輩の方々が必要職についています。このような嬉しい言葉や情報はこれまでもよく耳にしました。中には外交辞令もあるでしょうが、総じて今風の若者の中では少なからずガッツと根性を持ち合わせているという点で、本校OBの就職先における評価は高いようです。

本校の役割は水産業とその関連分野で活躍する人材育成です。入学対象者や修業年限は他の大学と同じですが、独立行政法人の高等教育機関であるが故に、他の水産・海洋系大学や学部と異なる特色がな

ければ本校の存在意義は薄くなります。

本校では平成13年に定められた水産基本法と水産基本計画を踏まえ、水産業については関連分野を含めた上で生産から消費者へ供給するまでの一連産業、すなわち漁業・増養殖などの生産から水産加工、経済経営、水産流通、海上輸送を含む物流、販売に加えて、海洋調査、水産行政及び水産団体などを含む幅広い産業と捉えています。

本校の5学科、上級の専攻科、研究科の専門教育はこのように幅広く分岐したそれぞれの分野に対応しています。そして、入学した学生が本校で学ぶ

ち、教養を身に付け、水産と関連分野に興味を抱き、幅広い見識と高度の専門技術を修得して卒業できるよう、入学から就職まで一貫して学生指導を行い、教育、学生支援や就職支援などを行っています。施設整備も順調に進み、今後は19年度に竣工予定の新鋭練習船耕洋丸を利用した効果的な実学教育やレベルの高い研究が期待されますし、体育館は18年度に、講義棟は19年度に更新される予定で益々充実した教育が可能となります。

最近の話題

大王のひつぎ実験航海

航海隊長 下川 伸也
(海洋生産管理学科 助教授)

平成13年、「植山古墳」や「今城塚古墳」など近畿地方に点在する6~7世紀の古墳から、熊本県宇土市産出の阿蘇ピンク石(阿蘇熔結凝炭岩)製の石棺が発見されました。推定重量6トン前後の石棺を運搬するには、未整備の陸地より沿岸沿いの海路を船で運ばれたものと推定されます。しかし、なぜ九州から、どのような方法で行われたのかは未知のままであり、古代の謎となっています。そこで今回、復元古代船団により石棺輸送を検証する「大王のひつぎ実験航海」が試みられました。

船型埴輪をモデルに「準構造船」様式の古代船(全長11.9メートル)を復元し、いかに積載した石棺を曳航しながら18本の櫂(オール)式推進による検証航海が実施されました。

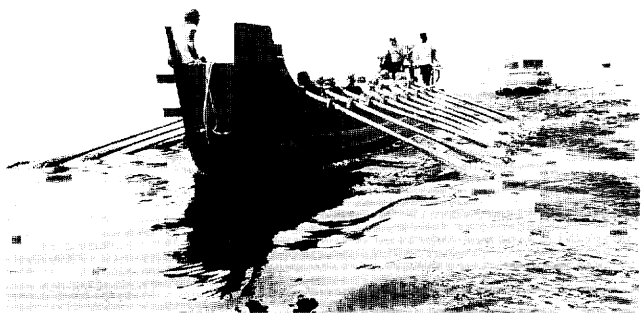
平成17年7月24日、熊本県宇土市を出港し、同年8月26日、大阪南港への入港に至る34日間、有明海、東シナ海、玄界灘、関門海峡及び瀬戸内海を沿岸沿いに巡航し、古代史の検証実験を繰り返しながら543海里的の航程を漕破しました。古代船の漕行主体は、水産大学校端艇部、女子端艇部の部員が担い、航海途中には、西日本地区の海事関係大学、商船高専の端艇部学生が参加協力し、1日に20~30名が交代しながら航進していきました。漕ぎ手の総員は、約120名の学生が参加したことになります。

さらに、伴走舟艇を三隻配置し、航海計画や検証実験の方案立案、航海指揮、漕ぎ手の援助など、水産大学校OBの現役航海士、各校端艇部顧問教員等25名も参加しました。船団員はすべてボランティアの参加であり、全航程の延べ人数では約1,050人が航海に携わりました。

この航海の成就により、次のような検証結果が得られています。すなわち、石棺海上輸送の可能性が示唆されると共に、地乗り航法と称される古代の沿岸航海方法、潮流影響、帆走実施に関わる史実の有無、古代船に関わる巡航速力、航海所要日数、1日当たりの航程などの航海性能や堪航性等々、航海学の歴史的航跡や海事史・古代史を推察する上で数々の貴重なデータであります。

このような、時空を超えた古代船航海に果敢に挑

戦し、九州から畿内まで約1ヶ月あまりの石棺曳航航海に見事成功を取めた水産大学校端艇部・女子端艇部の諸君を大いに讃えたいと思います。また、「大王のひつぎ実験航海」船団員の皆様に感謝いたします。さらに、航海中の全航程をサポートしていただいた陸上支援班各位、それぞれの寄港地において、熱烈に歓迎していただいた皆様、航海途次に艇内満杯に差し入れを積み込んでいただきました水産大学校卒業生の先輩方々に対し深謝いたします。



(古代船「海王」と本枝端艇部員)

釜慶大学校訪問記

食品科学科 教授 芝 恒 男

第11回水産大学校・釜慶大学校交流事業として、11月2日~4日の間、理事長以下の7名で釜慶大学校を訪問しました。飛行場まで張、朴教授にこやかに出迎えて頂き、巨大な冷凍庫群を擁した物流センターの賑わいを見たあとにホテルに到着。私自身、およそ7年ぶりの訪問でしたが、粉塵のたつセンター内の混雑ぶりや高速道路から見える瀟洒な高層ビル群に、韓国発展と活気をみた思いがしました。

翌3日は食品生命工学部校舎内の国際会議場での講演発表。会議場名がすでに凄いのですが、実際にも、中国、日本、そして韓国の大学の連携事業を推進中で、その中心に釜山が来るのだとの意気込み。一流雑誌に多数論文が掲載されている様子や、食医研究に戦略的に取り組もうとしている姿を事前に聞

かされていまして、圧倒される思いがしました。会場前ホールのレジストレーションには女子学生が出迎え、カーベットのフロアにクッキーやコーヒーが用意される心暖まる雰囲気の中で講演が始まりました。冒頭、本学理事長が姉妹校としての心情を紹介された後、古下助手の薬剤耐性遺伝子、松下教授の魚の血液凝固因子、原田教授の抗酸化物質、田中講師のヒドロキシ脂質に関する講演を行いました。聴衆は食品生命工学部の学生と教員。150名ほどの参加があったと思います。講演は英語でしたが、たどたどしいながらも学生が積極的に議論に参加し、和やかな会議となりました。特に原田教授が講演中にコードに蹴躓いた際には、親しみのこもった爆笑さえあるほどでした。学生の発言は事前に指示されていたのだと思いますが、それでも物怖じしない態度が良かったと思います。

夕刻は市内の海村サシミ店での懇親会。なんでも刺身がブームなのとか。至るところに刺身、「さしみ」の看板。靖国でギクシャクしているのが嘘の様。民間同士の交流は広く、深く、着実に根をはっているようです。コチュジャンに漬けて刺身を味わいながら、張榮振教授の「下らない」の語源は「百済ない」との話や、下関の『関』はどこにあるのかの質問など、楽しい会話となりました。今年は釜慶大学校側関係者が水産大学校を訪問する番です。学科・学校をあげて楽しい歓迎に努めたいと考えています。

練習船天鷹丸第145次航海について (専攻科生遠洋航海)

—SEAFDEC*1との共同調査—

天鷹丸 船長 水谷 壮太郎

平成17年度入学専攻科船舶運航課程生13名、船用機関課程生9名、水産学研究科水産技術管理専攻学生1名の計23名を乗船させて、遠洋航海乗船実習を実施しました。5月17日に下関を出港してから7月8日に帰港するまでの53日間、総航程7,290海里的の航海でした。今航海の概要をご報告して、ご父兄の皆様へ練習船乗船実習がどのように行われているかを少しでもご理解していただけたら幸いです。(なお、航海の毎日については、水産大学校ホームページ/組織・業務/練習船/天鷹丸からの便り/第145次航海でご覧になれます。http://www.fish-u.ac.jp/cgi-bin/vy_lst.pl?2+145)

航海中は、航海当直、天測*2、出入港操船、狭視界操船、荒天操船、サンゴ礁海域・河川などの特殊海域操船、気象観測、船体整備、非常部署、機関運転、機関制御並びに整備実習を行い、船舶職員としての専門技能を習得させました。

航海の途次、マレーシアのコタキナバル(ボルネオ島北西)、クママン(マレー半島東岸)、タイの首都バンコクに寄港しました。コタキナバルではSEAFDEC/MFRDMDとの共同調査出発式が市内ホテルで、マレーシア水産局長、在コタキナバル日本総領事はかMFRDMD局長、本校派遣教育職員、天鷹丸海事教育職員、専攻科生、報道関係者を含め総勢約180名の参列者で盛大に行われました。式典

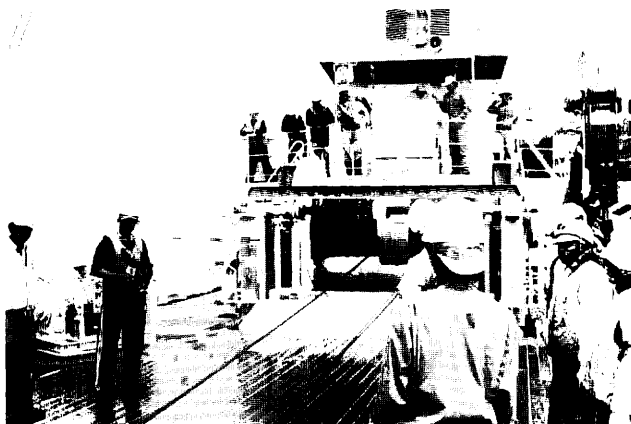
終了後、マレーシア水産局長、MFRDMD局長が訪船、天鷹丸船内を見学しました。

共同調査は、本校教員4名(海洋生産管理学科濱野明教授、永松公明講師、中村武史助手、生物生産学科上野俊士郎教授)とSEAFDEC/MFRDMD研究員4名がコタキナバルから天鷹丸に乗船し、6月2日から10日までの間、SEAFDEC調査船「KK SENANGIN II」が随行して、マレーシア/ボルネオ島サラワク沖の南シナ海において、浮魚資源の計量魚群探知機による資源分布と現存量調査、中層トロール網・IKMT・MTDネットによる漁獲調査、CTDによる海洋環境調査のほか、水色・透明度・表面水温などの一般海洋観測を実施しました。天候に恵まれ計画通り実施することができ、5カ年の学術交流協定の初年度共同調査を成功裏に終えることができました。

クママンでは、約145km北にある町クアラトレンガヌにあるSEAFDEC/MFRDMDの施設を見学し、「南シナ海の漁業について」(小西次長)の講演を聴講しました。

バンコクでは、SEAFDEC/TDの棧橋に停泊して、カセッサート大学海洋科学科4年生及びMerchant Marine Training Center of Harbour Department(5年制の商船専門学校)学生の訪船交流、また、船上レセプションパーティを通して在タイ日本大使館、SEAFDEC、タイ水産局、カセッサート大学、チュラロンコン大学ほか現地の人々との交流を行い、国際的視野を養いました。

SEAFDECとの共同調査が今後も続けられ、学生の国際的感覚が養われると共に、学生同士の交流もより一層発展して行くことになると思います。練習船の役割、利用について、ご父兄の皆様にもご理解とご協力をお願いしたいと思います。



(トロール実習中)

*1 SEAFDEC: 東南アジア漁業開発センター、1967年設立、日本含め11カ国加盟、①事務局(タイ) ②訓練部局TD(タイ) ③海洋水産調査部局MFRD(シンガポール) ④養殖部局AQD(フィリピン) ⑤海洋水産資源開発管理部局MFRDMD(マレーシア)の5部局で構成されている。

*2 天測: 六分儀を使用して太陽や恒星の高度を観測して船の位置を算出すること。

平成17年度オープンキャンパスの開催

オープンキャンパス実行委員長 江 副 寛
(海洋機械工学科 教授)

「最先端の海洋テクノロジーを大公開」

本年度、われわれの両手の中に地球を包み込むポスター図柄に『海を愛し、海を学ぶ』のキャッチフレーズの下、第5回目のオープンキャンパスを開催しました。

最初の実行委員会で、昨年度オープンキャンパスに参加した高校生の約70%が本校に志願し、その約50%強が合格し、その中の約90%以上が本校に入学していますとの報告がありましたので、本校の教育や研究内容および施設等を肌で感じてもらう進路選択の参考にしてもらうオープンキャンパスの重要性を改めて認識し責任を痛感しました。

そこで、本年度はより広くまたより多くの方々に感じていただき魅力を感じていただくために、初めて練習船『耕洋丸』の見学をスケジュールに加えるとともに、8月21日(日曜日)と8月23日(火曜日)の2日間開催しました。また全国約5300校の高校へのポスター配布や、九州・山口・広島県内の主要駅へのポスター掲示等新たな試みも行いました。

おかげで、北海道や関東以北からの参加者が約19%増えたことなど、昨年度より35名ほど増え、2日間で295名の参加がありました。

初日はあいにくの天候で、皆様に多大な迷惑をかけてしまったことが心残りですが、各学科それぞれテーマを設け、工夫を凝らした案内やチラシおよび研究室開放や研究紹介等を通じて本校の良さを知ってもらう努力をしました。各学科の主なテーマは以下の通りです。

水産情報経営学科…模擬講義「一緒に考えよう日本と世界の水産業」ほか

海洋生産管理学科…「水産資源の持続可能な利用方法を探る」ほか

海洋機械工学科…「遊泳魚の酸素消費量」ほか

食品科学科…「あなたの手指は綺麗ですか? ~ ATP検査~」ほか

生物生産学科…「各研究室の主要研究テーマに関する模擬実験・展示」

そのほか、学生寮や図書館・標本館等の施設の開放、および保護者懇談会での学校側や現役学生との意見交換等、ハードとソフトの両面からアットホームな本校の特徴と勉学環境の紹介に努めました。

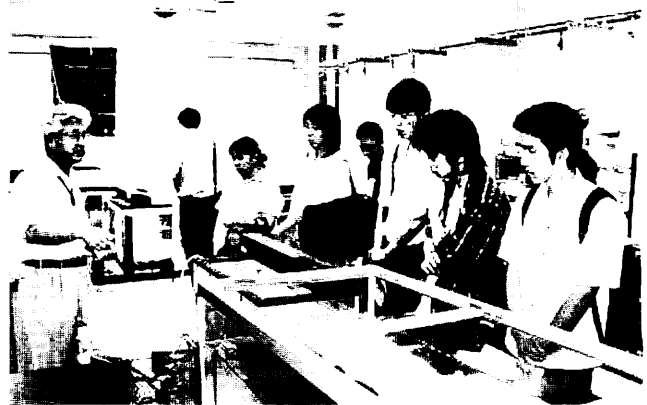
「パンフレット等では知り得ない情報が得られ良かった。」、「興味ある講座を見つけることができた。」、「楽しそうな学科が多く、良かった。」、「先生や学生が親切で好感が持てた。」、「耕洋丸を見学し感動した。」、「思っていたより普通の大学に近く自由に研究できそう。」、「水大の特徴や良さが分かった。在学生在がみんな楽しそうだった。」など、終了後のアンケートから高校生からの生の感想が聴けました。紙面の都合で内容や雰囲気等を詳しくお伝えできないのが残念ですが、当日の状況や感想はホームページに掲載していますので、どうぞそちらをご覧くださいませようお願いします。

来年度開催に向けた課題も残りましたが、本年度

も多くの参加を得て、その約97%の人から来て良かったとの感想をいただいたことは、オープンキャンパスの所期の目的を十分達したのではないかと思います。

若年人口が減少していく中、私たちは、いにしえより多くのタンパク源を『水産』資源に依存してきました。また健康食品や化粧品の素材としても『水産』は新しい重要な産業になっています。本校の魅力をさらに広め、本校受験生の増大に結び付けさせるためには教職員・学生一丸となって日頃より行動する姿勢が最も重要かと思えます。

オープンキャンパスの実施に多くの方々からご支援をいただきましたことに、この場をお借りして謹んでお礼申し上げますとともに、内容充実のために引き続き忌憚のないご意見をお聴かせいただきますようお願い申し上げます。



(オープンキャンパスの風景)

平成17年度日本スポーツ産業学会賞 (奨励賞) 受賞のご報告

水産情報経営学科 講師 寶 學 淳 郎

お陰さまで、昨年7月、標記の賞を受賞いたしました。受賞対象は、寶學ほか6名による「占領下日本におけるCIEのスポーツ用品供給措置(1946-1949)-CIE体育担当官の活動を中心に-」です。紙面の関係から、研究の概略および受賞理由について簡単にご報告させていただきます。

本研究は、戦後日本におけるスポーツ用品業界の復興過程に関する共同研究の一部であり、特に、戦後日本の体育・スポーツに大きな影響を及ぼしたCIE(連合国軍最高司令官司令部の民間情報・教育局)体育担当官の活動を中心に、占領下日本におけるCIEのスポーツ用品供給措置について検討したものです。結果、CIE体育担当官は戦後日本におけるスポーツ用品の不足問題にも積極的に取り組み、1946年9月の計画的なスポーツ用品供給計画に強く関与したこと、スポーツ用品製造に必要な原料の確保、アメリカ軍放出のスポーツ用品の利用などに尽力したこと、1949年からはスポーツ用品供給における統制緩和を次第に容認していったことなどが明らかとなりました。

表彰式で説明された受賞理由は次の2つのことで

した。1. GHQ/SCAP文書という膨大な一次史料を詳細に分析し、戦後日本におけるスポーツ用品業界の復興過程について、その重要な側面の一つである政策的側面を実証的に明らかにしたことが高く評価される。2. 従来の体育・スポーツ史研究では未開拓であったスポーツのいわばハード的側面に関して、関連研究が継続的に発表されていること（関連論文5本）、データベースの構築が継続的になされていることが高く評価される。

AGU Journal Highlights

海洋生産管理学科 助手 滝川 哲太郎

この度、AGU(アメリカ地球科学連合)の雑誌に投稿した論文が、"Journal Highlights" に選ばれました。ここでは、研究内容については触れませんので、詳しい内容は、AGUウェブサイト内(http://www.agu.org/sci_soc/prrl/jh051006.html#6)に

掲載されている記事をご覧ください。

我々の論文がこのように評価されたことは、非常に運がよかったためです。と言うのは、当初、別の研究目的で気象庁の定期観測線のデータを調べていました。たまたまそのときに、奇妙なデータを発見し、それがよい結果につながりました。

しかしながら運だけでなく、貴重なデータを扱える研究環境や、身近に議論できる研究者の存在がなければ、このような成果は生まれなかったと思います。

また、定期観測の重要性も改めて認識しました。現在、水産大学の練習船による対馬海峡の環境調査が年4回程度実施されています。このような定期観測を継続することによって、新たな研究成果が得られ、最新の科学が教育に反映されて行くことを期待しています。

最後になりましたが、お力添えをして頂きました水産大学の先生・職員の皆様にご心より感謝致します。

就職活動

私の就職活動

水産情報経営学科 4年 巽 麻千子

私が何気なく就職活動を始めたのは3年生の11月末である。私は授業で学んだ水産物流通にとっても興味があったので、水産業界、食品業界を中心に就職活動をすることにした。初めはインターネットを使って興味のある企業にエントリーし、エントリーシート提出に追われていた。男女雇用機会均等法が制定され法律上では男女平等となっているが、実際には男性に比べ女性は厳しいと聞いていたので不安があった。生まれて初めて男女差別というものを実感したのも就職活動である。

会社説明会や面接など企業に足を運んだのは2月頃である。初めて訪問した会社では会社説明会と称しているのにも関わらず、抜き打ちで「1分で自己PRしてください。」と言われた。ほーっとしていた私は何も用意していない。他の人たちはすらすらと1分という短い時間を有効に使って自分をPRしていた。私も手に汗を握りながら奮闘したが、もちろんうまくいかず不合格となった。それがいい刺激となり、対策を始めるようになった。面接には自己PRや志望動機など必ず聞かれる事項があるので友達を相手に面接の練習をしたり、お互いに筋が通っていない部分を指摘し合ったりした。いくら仲の良い友達と言っても長所ややりたいことを堂々と発表するのは恥ずかしいことである。しかし、この練習をすることで実際の面接でもうまく言葉が出てくるようになった。初めは緊張することもあったが、面接の回数を重ねるごとに自分の意見を面接担当者に伝えることができるようになっていた。

4年生の4月には選考の進んでいる会社も数社になり、そのうち1社から内定をもらうことができた。就職活動は私にとって初めての経験で大変なことも

あったが、本当に楽しかった。就職してしまえば、自分が働く業界以外に出向くことはないと思う。だが、就職活動中の学生は興味のある会社の事業内容や強み、これからどのように会社を運営したいかなどを社長、役員をはじめ、働いている方に直接質問することができる。こんなチャンスは2度とないだろう。また、他大学の学生とも接することもでき、良い経験となった。

私が入社する予定の会社は水産大学の先輩がたくさん活躍している会社である。私自身も恥じることもないように努力していきたい。自分の興味がある業界に就職が決まり本当によかったと思うが、社会人になれば今まで以上に責任ある立場になるので気持ちを引き締めて行動したいと思う。就職活動は大変ではあるが社会に出るにあたり、良い試練となり社会の厳しさを実感できた。また、緊張や出会いを楽しみながら就職活動を進めることができたので良い結果を得られたのではないかとと思う。

就職活動奮闘記

食品化学科 4年 岸 真二郎

私の就職活動は、3年生の1月後半、食品会社へのエントリーから始まりました。直ぐに、エントリーしていた会社から説明会や面接の予定が次々に送られ何の準備もできないまま慌ただしく始まってしまったという印象です。

今振り返ると、実際の面接や論文課題を通してその時々経験が真剣勝負の演習の形で直に学習に繋がりが、就職活動後半に受けた「日本水産」で結果を出すことができ運良く内定を頂いたものと感じています。

面接での受け答えや自己PRを書く内容は、全て水産大学で学んだことやクラブ活動等で体験してき

たことなどをもとに面接や論文の課題に挑みました。「日本水産」の試験で学生生活での最も印象に残ったことやクラブ活動・卒論のテーマを十分に述べることができ、よい結果につながりました。具体的にはワンダーフォーゲル部の100km歩行に部外参加したことや柔道部の活動、卒論のテーマ等これまで学んだことや経験したこと、感動したことや苦しかったこと又、仲間と喜びあったことなど感じたままを素直に面接で述べる事が出来たと思っています。

ちょうど就職活動後半の時期は、関西や東京の他

の会社訪問と日程が交錯し、移動時間の調整、数社の度重なる面接の疲れ、これまでに受けた会社からの採用・不採用通知等、精神的にも肉体的にも疲れがたまり苦しくなりましたが、友達と励ましあったり家族や先生に相談にのってもらったりして息抜きをすることで無事乗り切ることが出来ました。就職活動は学生生活の大きな試練と成長の節目であり、何より学生を卒業し社会人としてステップアップするための大きな「学びの場」であったと感じています。

◀ 在校生の声 ▶

水産大学校に入学して

海洋機械工学科 1年 西山 琢 哉

私はもともと海が好きで、将来は海技士の免許をとって、水産関連の企業に就きたいと思っていました。また、機械にも興味があったため、この水大の海洋機械工学科に入学できれば、自分がやりたい勉強ができると思い、頑張って受験勉強をし、入学しました。

私の代からカリキュラムが変わり、必修科目が増え、単位修得も少し大変になったみたいですが、毎日充実した勉強ができています。また、海洋機械工学科は、物理や数学に関する授業が多く、高校で物理を履修しなかった私にとって少々辛い部分もありますが、頑張っていこうと思います。

水大の周りの環境は、海や山などの自然に囲まれており、毎日がのびのびと過ごせて、とても楽しい生活ができています。休日は釣りに行ったり、街に出掛けて買い物などをしたりしています。洗濯や料理、ゴミの分別など、独り暮らしをして初めて大変さがわかりました。

水大に入学して、今までと大きく生活が変わり、充実した日々が過ごせています。これからも勉学に励み、大学生活を楽しんでいこうと思います。

入学して2年がたって

海洋生産管理学科 2年 岸本 梓

私が水産大学校に入学してもうすぐ2年が過ぎようとしています。この2年間は本当にあっという間に過ぎた気がします。そして本当に充実した2年間だったと思います。

充実した2年間になった大きな理由は入学してす

ぐに女子カッター部に入部したことだと思います。周りからはよく、なぜそんなきつい部活を続けることができるの?とよく聞かれます。続いている理由は自分でもはっきりした理由はわかりません。実際に何回もやめようと思いましたが。確かにカッター部の練習はかなり厳しいです。大会前になると朝練もあるし、手の皮はむけて痛くて泣きそうになります。それでも必死に声を張りあげて艇指揮が「權あげ」と言われるまで漕ぎ続けます。そこまで頑張れるのはカッターが一人でやるスポーツではないからだと思います。だから部活を通してできた友達は普通にできた友達とは全然違う気がします。辛いことを一緒に乗り越えて、同じ達成感を味わった仲間です。そんなカッター馬鹿の仲間がいるからこそ今まで部活を続けてこられたのかもしれない。

私の大学生生活は本当に部活中心でした。気がつくと来年はもう就職活動の年になってきました。自分の進路を真剣にどうするかを考えなければならなくなってきています。正直まだ具体的な進路は決めかねています。でも部活も進路も絶対に後悔だけはしないように残りの大学生活を今まで以上に充実した日々になりたいと思います。

インターンシップに参加して

生物生産学科 3年 三島 晃

私は8月18日から31日までの二週間、インターンシップで農林水産省の水産庁栽培養殖課にお世話になりました。

栽培養殖課では、初めてのインターンシップ生だったらしく、主に職員から頼まれた仕事をするといいかたちで、ポジティブリスト制度の魚介類に当てはまる物質名、基準値案、類型などをまとめた表の作成などを行いました。また、何度か会議にも連れて行っていただき、普通に大学生活を送っているだけではわからない、職場や会議の雰囲気や勉強がただけでなく、栽培養殖における最新の話題や、それを解決していくための物の考え方など、多くのことを勉強させていただきました。

わかっていたことでしたが、仕事は主にデスクワ

ークで、どの作業にもパソコンは欠かせないもので、改めてパソコンを使いこなす技量の必要性を認識しました。特に水産庁では、『Ward』の代わりに『一太郎』を使用するため、今まで使ったことのないソフトを使用したので、戸惑いも大きかったです。しかし、忙しい中職員の方に丁寧に教えていただき、すごく勉強になりました。

実は私は公務員志望では無かったのですが、将来水産界に就職しようと考えてる中で、水産庁を知っておきたかったのと、何事も経験だと思って今回インターンシップを希望しました。体を動かすことの好きな私にとって、やはり公務員は向かない気がしましたが、デスクワークが好きという人や、水産庁では他の課への移動が頻繁にあるので、幅広い分野に取り組みたいという人には向いていると思います。そして何より、この水産庁が水産界のトップで、常に電話が鳴り響き忙しい職場ですが、その分やりがいのある仕事だと思います。

これからも、この水産庁へのインターンシップは続くと思いますが、公務員志望の人はもちろん公務員志望でない人も、どんどん行ってもらいたいと思います。今まで経験したことのないことをたくさん経験し、やる気を出すための活性化剤となることは間違いないでしょう。私もこのインターンシップで学んだことを活かし、残りの大学生活を大事にしていきたいと思います。

◀ 卒業生の声 ▶

卒業から今に至って

阪九フェリー 中村 藤太
(海洋生産管理学科53期卒)

私は大学を卒業してから、阪九フェリー株式会社で三航士として、まもなく3年目になろうとしております。就職してから7ヶ月半、見習い三航士として教育を受け、独り立ちしてから一年以上経ちました。今は、「ニューながと」に乗船し、北九州の専門司港と大阪の泉大津港を結ぶ航路を日々航海しております。

見習い期間中は、今まで生きてきた中で一番怒られました。学生時代まがりなりにも船舶に関して専門的な勉強をしてきましたが、まったく歯が立ちませんでした。社会人として金を稼ぐという事がいかに難しいのかという壁に直面し、物凄く歯痒かった事を今でも鮮明に憶えています。

最近では、怒鳴ってまで仕事を教えてくれる人もいなくなり、自分から積極的に仕事を覚え、さらには後輩達も入ってきて、教えていかななくてはならない立場にもなりました。

また、同級生達もそれぞれの分野で台頭してきて、

酒を飲みながら熱く仕事の話をする光景に学生時代とは違った刺激を受け、皆、職種は違うけれど良き友でありライバルとして今でも付き合っています。

これからは、自信を持って仕事ができるよう精進し、メリハリをつけ、プライベートでも充実した生活をできるようにがんばっていきます。

近況報告

水産庁資源管理部沿岸沖合課 蓬田 正道
(生物生産学科53期卒)

私は平成15年の3月に水産大学校を卒業し、同年4月から東京の水産庁で働いています。現在は、沿岸沖合課という部署で、漁業法に基づき各都道府県知事によって管理される「漁業権漁業」や「知事許可漁業」をはじめとする、各種沿岸漁業の諸制度や調整の仕事をしています。

さて、沿岸漁業と一言と言っても、全国津々浦々において、その地域特有の漁業というものが多種多様に営まれており、工作上、各地の漁業に新たに出会う度に、新鮮な驚きとまだまだ不勉強な自分を痛感し、せっかく下関に4年もいたのに、もっとあれこれ見ておけば、具体的なイメージがわきやすいのにと後悔しています。

下関という場所は、古くは捕鯨業をはじめとする遠洋漁業の一大基地として栄え、漁業の歴史が大変深い場所です。また、瀬戸内海と日本海の両方の海に面する立地から、漁業をはじめとする「水産業の現場」を身近なところで見ることができる絶好の場所だと思います。現在学生の皆さんは将来の水産業を担う者として水産を学びに吉見に来たのですから、まさに「生の現場」を学ぶことができる場所が身近にあることを認識していただき、是非、下関周辺に多く存在する漁村の風景や、そこに暮らす漁業者の生活の様子、漁港での水揚げ風景、産地市場の賑わいなど、たまには浜に足を向けて、そこでしか見ることができない「水産業の現場」というものも、学生生活の中で学び、感じていただければと思います。



新 任 紹 介

1年近くが経過して

理事（企画情報部長事務取扱） 濱 田 研 一

日頃から本校の諸活動に様々なご支援、ご協力を頂戴し、心より御礼申し上げます。

私は、昨年4月から本校の理事（企画情報部長を兼務）を勤めております。それ以前は、主に水産庁で行政事務に携わっておりました。

早いもので、着任後1年近くが経過しました。この間、藤理事長のご指導の下で、職員の協力を得ながら、本校の第1期中期計画期間中の業務実績の評価と、18年度から5カ年間の第2期中期計画策定の仕事を中心に、管理運営業務に従事してきたところです。

今後とも本校は、水産業を担う人材の育成を図るという目的に従って、新しい中期計画の下で教育研究等の業務を行って参りますが、各方面からの本校への期待や要求に応え、学生の皆さんが学生生活を通じて大きく成長し、学んだ知識・技術を活かして社会貢献できるようにすることが何よりも重要です。

そのために、学生の皆さんが学びやすく、また教職員が持てる力を存分に発揮できる環境を整えられるよう努力して参る所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。



の質的転換と社会的地位との関係などを研究範囲としています。

今回の着任にあたり、水産に特化させて存在意義を見いだそうとしている水産大学校に所属していることを、学生が積極的にとらえられるような視点を少しでも与えることができればいいなと思っております。未熟者ではありますが、これからも皆様方からのご指導ご鞭撻、よろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

海洋生産管理学科 教授 原 一 郎

ご挨拶が遅れました。2005年4月に水産総合研究センターから着任しました。水産総合研究センターの前身である水産庁研究所から数えると30年ほど水産研究所に所属していたこととなります。その間、北は北海道から南は長崎と転勤・引っ越しを9回



ほど繰り返しました。研究所に入った頃はマイワシが増え始めたこともあり、マイワシの資源研究を続けてきました。ちょうどマイワシ資源が絶頂期の時に研究を行い、資源の減少とともに研究終了となりました。この間に、一貫してまき網漁業を通じて浮魚類の資源研究を続けてきました。

赴任前の数年間は管理業務で研究から遠ざかっていましたので、現在は教育と研究の二足のわらじでとまどっています。講義は漁業管理学・国際漁業論などを担当、研究はまき網漁船の行動解析などを行っています。

不慣れな新人？ですが、よろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

水産情報経営学科 助教授 三木 奈都子

平成17年4月1日付けで、水産情報経営学科の助教授として着任いたしました。当初、どぎまぎしていた講義にもようやく慣れてまいりました。気に入っているのは朝な夕な、海を見ながら短時間で通勤できることで、「田舎通勤」の快適さを喜んでおります。



私の専門分野は水産経済学で、主にヒトに注目しながら漁業就業と漁村社会に関する研究を行って参りました。近年、顕著に進行している漁業就業者の人数減少と高齢化、それとともにクローズアップされている後継者や漁村外からの新規就業者の動向、そして外国人就業者の参入メカニズムや政策との関係、また、漁業陸上作業を中心としてきた女性労働

はじめまして

水産学研究科教授 竹内 謙 介
(海洋生産管理学科)

昨年（2005年）の4月に着任しました竹内謙介です。現在は水産学研究科に属し、海洋生産管理学科を兼任しています。専門は海洋物理学、ここに来る前は海洋開発機構地球環境観測研究センターという、寿限無のような長い名前のところに居ました。



元来がなまけもので、そろそろ悠々自適の生活に入るつもりでいましたが、下関という場所に惹かれて、はからずもここで働くことになりました。来てみて良いところだと実感しています。水大の付近でも見とれてしまうような風景にしばしば出会います。この類まれな環境が、多感な時期を過ごす学生さんに良い影響を及ぼさないはずはないと思います。

好きな言葉は「いい加減」。本来はよい意味ですよ。私自身、きわめて「いい加減」な人間です。といっても悪いほうの意味なのですが。でも「いい加減さ」も世の中には必要、最近は不足気味のような気がします。

学生さんには学ぶことには苦しさだけでなく、楽しさもあることを少しでも伝えられたらと思います。

着任のご挨拶

海洋生産管理学科 助手 柰 雅 利

平成17年4月1日付で海洋生産管理学科資源環境計画学講座の助手として着任いたしました。東京大学海洋研究所で博士課程を修了し、昨年度末までは、宮城県塩竈市にある独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所の特別研究員として海洋研究に携わっていました。

私は修士課程の大学院生として入学して以来、ハダカイワシ科魚類という深海魚の生態研究を行ってきました。一般的になじみが薄い魚ですが、我々日本人にとって水産資源として重要なマイワシやサンマといった浮魚類の資源量が増えたり減ったりすることにこの魚が関係しているかもしれないと推測されており、研究対象としては重要な生物です。本校に着任してからも、この魚類の基礎的な生態に関する研究を行い、水産資源（特に浮魚類）との相互関係の解明を目指しています。これからも本校の学生の皆さんのために、教育・研究を進めていきたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。



着任のご挨拶

海洋生産管理学科 助手 酒 出 昌 寿

平成17年7月1日付で海洋生産管理学科運航システム学講座の助手として着任致しました。

私は、平成7年3月に本校専攻科を修了し、出光タンカー株式会社に入社、以降、約10年間、海上と陸上を交互に勤務していました。

海上勤務では超大型原油船に航海士として乗船、三等航海士から始まり、最後の3年間は一等航海士を務めました。陸上勤務では外国人乗組員の労務管理、管理船の運航管理と営業を担当、常に海外を相手にし、海外出張も経験しました。

この度、10年ぶりに本校へ戻り、企業の一員、また航海士として経験し、学んだことを今後の学生教育と研究活動に活かしたいと考えています。特に大型船での実務経験を活かし、漁船や一般船舶等の海難、海上交通安全に関する研究等に取組みたいと考えています。みなさま、どうぞ宜しくお願い致します。



着任のご挨拶

天鷹丸 機関長 桐 畑 友 明

平成17年4月1日付で天鷹丸機関長として着任致しました。

昭和46年より機関学科助手（半年間）を経て練習船に配属され、平成11年度まで練習船の機関士として船舶運航並びに学生教育に携わり、平成12年度から5年間は水産総合研究センター所属の北光丸に転出していました。

4月より再び練習船において学生教育に携わることになりましたが、現在の水産大学校は独法として中期計画のもとに運営され、事後評価も受けることになっています。また、運営予算は毎年削減されるにも係わらず燃料油は高騰し、以前よりは非常に厳しい状況にあります。一般に教育現場には無駄が多いと言われておりますが、企業的にみれば基本方針の策定や経費削減は当然のことであり、更に効率的な運航を目指さなければならないと思っています。

近年少子化が進み、他大学では統廃合が行われていますが、本校が単科大学として生き残るため、より一層充実した教育に努め、社会・企業が求める人材の育成に向かって努力する所存です。

よろしくお願いたします。



大学祭

'05海燕祭を振り返って

'05大学祭実行委員長 古賀 壮太郎
(海洋生産管理学科3年)

私たち大学祭実行委員が活動をはじめた4月。まず、今年の大学祭をどのようにしたいかというコンセプトを決めることから始めました。これまで行われた海燕祭から学んだこと、新人生による新しい発想。これら様々な角度から意見を出し合い、私たち水産大学校の関係者はもとより、地域住民の皆様にも足を運んで頂けるような大学祭。そして、来場者の皆様楽しんで頂ける企画づくりをしていこうということで「Ride on!! ~海流に乗れ~」というテーマに決定しました。

特に今年力を入れたかったのが、「大学祭=芸能人、模擬店」というイメージを変えることでした。研究室公開、講演会の同時開催という大学の日常の風景をいかに大学祭にとけ込ませるか。近隣住民の

皆さんに、楽しみながら水産大学校を知ってもらおうということがいつも心にありました。今回それらの私たちの熱意が伝わり、先生方等のご協力の下スタンプラリー形式で行われた研究室公開、水産大学校の先生による公開講座の開催にこぎつけることができました。

海燕祭というのは、水産大学校を様々な人に知ってもらえるいいチャンスだと思います。私自身、もっとアクの強い大学祭の方が水大に向いているのではないかと考えていますので紺碧クルージング、カッター・ヨットの試乗会、フィッシング大会等々今後企画して行って欲しいです。私たち大学祭実行委員は1年間を通して様々な祭の中で、一人一人が成長できたと思います。これからも地域の祭に是非参加してもらい、そして、それらの祭から得られる出会いや楽しさを大切にして今後の海燕祭にも活かして行って欲しいと思います。

クラブ紹介

サッカー部

生物生産学科2年 伊東 優太

私達サッカー部員は、現在選手44名、マネージャー6名で活動を行っています。活動期間は主に月・火・木・金の週4日程度ですが、試合が近づくと毎日練習を行います。参加する大会は、下関市リーグ戦、北九州・下関地区大学体育大会(春季・秋季)、下関市長杯、下関市フットサルリーグとなっており、忙しいのですが、とても充実していると思います。

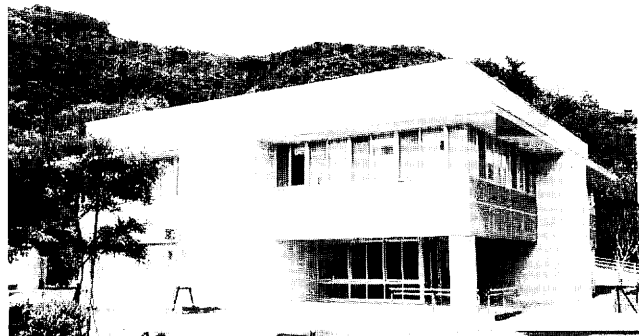
練習の成果としての大会成績は安定しており、リーグ戦は常に上位を維持。下関市内では強豪チームであると言えます。

活動内容は、先輩の練習方法を踏襲しつつも、強くなるためにより実践に近い形で練習を行っています。この練習ではタッチ数を制限することにより周りをよく見る力をつけることが目的となっています。さらに、コースを確実に狙っていくシュート練習。シュートの意識を常に持って行うミニゲームなど様々な練習方法を取り入れています。また、先輩からサッカーの技術を学ぶのはもちろんのこと、私達部員は、「熱い心」というものを学ぶことができます。ここが水大サッカー部の一番の魅力だと思います。サッカーがうまい人もまだ技術不足の人も一緒にサッカーを楽しむことができます。私達サッカー部はこのような部活動づくりを心がけています。

今、サッカー部が熱い。

水産情報館が完成しました！

平成17年3月、水産経営・流通分野の情報専門教育の充実を図ることを目的とした水産情報館が完成しました。本施設の整備により、水産情報経営に関わる演習、水産経営・流通分野等の授業の充実と教育職員により高度な指導が可能となり、卒論研究の精緻化・円滑化にも資することができるようになりました。



学生部だより

平成17年度における就職対策と進路状況について

学生部長 前田 和幸 (就職対策検討委員長・海洋機械工学科教授)

本校では学内に「就職対策検討委員会」を設置して、毎年、(1)専門講師による就職指導：春と秋の2回就職情報会社から就職対策の専門家を招き、3年生を主対象とした就職に関するガイダンスを実施。(2)就職手引き書の配布：「大学生のための就職応援ブック」を3年生全員に配布し、これを用いた就職

指導を行う。(3)企業訪問の実施：各学科の就職担当者及び学生部職員が、水産関連会社・団体等を訪問し、本校及び本校学生の紹介を行うとともに、企業等の採用情報(時期及び求める人材等)を把握する。(4)企業説明会の実施：随時及び合同で学内において実施。(5)就職内定学生による進路相談会の実施。等の活動を行っています。この結果、今年度の3月1日現在における就職率は約90%となっており、このうち水産関連分野への就職割合は就職希望者ベースで約70%、就職内定者ベースで約75%となっています。なお、本科、専攻科、研究科における進路状況及び進学・就職内定先は別表のとおりです。

平成17年度卒業・修了者の進路状況

平成18年3月1日現在

Table with columns for Faculty/Department, Gender, Graduate Status, and Career Paths (University, Research, etc.). Rows include various departments like Water Resources Management, Marine Production Management, etc., and a final summary row.

【分類内訳】 各種団体：水産に関係する団体(漁業、流通、船舶等関係団体) 漁業・養殖：水産動植物の採捕又は養殖の事業者等 水産加工：水産動植物を原料又は材料として、食料、肥料その他の有用物を生産する事業者 水産流通：水産物の貯蔵、運搬、販売等の流通に関する事業者 海洋水産調査開発等：海洋水産関連の調査会社 資機材供給等：水産業やそのサービス部門等に資機材供給等を行う関連事業者等 その他：水産業関連以外(公務員・団体・企業)

平成17年度卒業予定者進学・就職先状況一覧表

平成18年3月1日現在

◎進学(大学院等) 水産大学校専攻科 水産大学校研究科 北海道大学大学院 東京海洋大学大学院 三重大学大学院 ◎官公庁 水産庁 福島県水産試験場 伊東市(静岡県) 北九州市(福岡県) 北九州市生活科学センター 海上自衛隊 兵庫県警 ◎水産関係各種団体 水産大学校(船舶) 水産総合研究センター 三重県漁連 兵庫県漁連 香川県漁連 コープ山口 日本酪農協同組合 青年海外協力隊 ◎民間企業 廣野松原水産(株)	マリンネット(株) ワタミ(株) キスコフーズ(株) 日本水産(株) マルハ(株) ニチロ(株) ジャパンシーフーズ(株) タカノフ食品(株) いなば食品(株) かね貞(株) 林兼産業(株) ユタカフーズ(株) 丸善(株) 大阪魚市場(株) 神港魚類(株) 中央魚類(株) 極洋(株) 西原商会(株) 札幌中央水産(株) 山越商事(株) 横浜冷凍(株) 魚力(株) トーカン(株) 名古屋海産市場(株) 大東魚類(株)	下関唐戸魚市場(株) 仙都魚類(株) 水研(株) ムロオ(株) リンガーハット(株) 日本クツカリー(株) 武蔵野(株) 大栄太源(株) 日本ゼネラルフード(株) マルミヤストア(株) 大近久(株) 丸久(株) オーシャン東九フェリー(株) 商船三井(株) 関光汽船(株) 川崎汽船(株) 共同船舶(株) 日本海洋事業(株) 太陽技研工業(株) 三計テクノス(株) ホクモウ(株) 菊谷茂吉商店(株) 新来島どっく(株) 新笠戸ドック(株) 五栄土木(株)	内海造船(株) 前川製作所(株) 鶴見製作所(株) 神戸発動機(株) ヤンマーエネルギーシステム(株) 太平電業(株) ダイキンアプライドシステム(株) ヤマシタ(株) 西島製作所(株) 坂本飼料(株) みなと山口合同新聞社(株) 第一製薬(株) 日本サルヴェージ(株) 春風海運(株) 商船三井テクノトレード(株) ニチモウ(株) 三洋コンサルタント(株) 川崎三鷹製薬(株) ウインドウパワー(株) 神畑(株) ナンジョウアグリサービス(株) 和心(株) ピエトロ(株) さかえ屋(株) キッコーマン(株)	フランソワ(株) ヤマミ醸造(株) ジャパンファーム(株) 協和発酵工業(株) プライムデリカ(株) 山崎製パン(株) ベストアメニティ(株) アヲハタ(株) 福留ハム(株) 木村(株) 九星飲料(株) 東京多摩青果(株) ポゾリサーチセンター(株) 光マリン(株) ユニエックス(株) 太洋日本汽船(株) コンスアドカンパニーリミテッド(株) 新和海運(株) パナソニックCCソフト(株) 雲海酒造(株)
---	---	--	---	--

平成18年度入試状況

本校の平成18年度入試状況をお知らせします。

推薦・一般入試の志願者総数は、701名で昨年度を29.7%名下回る結果となりました。一般入試の学科別の応募状況は、水産情報経営学科30名(募集人員15名に対する倍率2.0倍)、海洋生産管理学科107名(募集人員23名に対する倍率4.7倍)、海洋機械工学科78名(募集人員30名に対する倍率2.6倍)、食品科学科118名(募集人員32名に対する倍率3.7倍)、生物生産学科301名(募集人員18名に対する倍率16.7倍)で、全学科が前年の志願者を下回った。また、先に行われた推薦入試には、全学科で143名(昨年度比

6%増)が応募し、67名が合格した。

一般入試は、平成17年2月11日に下関・東京・大阪の各試験場で実施され、2月24日に合格発表となった。

本年度一般入試での志願者減について、その原因を分析するとともに、来年度以降もオープンキャンパス、高校訪問及び公開講座等の広報活動を充実させるなど、本校の特色と個性豊かな教育方針を前面に打ち出し、受験生に魅力ある大学校となるよう一層の努力をし、志願者増となるよう努めて参る所存であります。

注)推薦入試の不合格者は、一般入試を再度受験した。

人物往来

(敬称略)

平成17年度

【水産特論講師】

- 10月17日 水産庁漁政部水産経営課長 三浦 正充
- 10月27日 水産庁漁政部加工流通課課長補佐 岡本 章
- 11月8日 水産庁九州漁業調整事務所漁業監督課長 今井 浩人
- 11月28日 水産庁増殖推進部栽培養殖課長 長尾 一彦
- 1月20日 水産庁増殖推進部研究指導課課長補佐 平石 一夫

【叙位・叙勲】

- 4月29日 瑞宝中綬章 大森 定光(名誉教授)
- 11月3日 瑞宝中綬章 兒玉 識(名誉教授)

【名誉教授】

- 4月1日 三本菅 善昭(元理事長)
- 4月1日 村井 武四(元水産学研究科教授)
- 4月1日 鬼頭 鈞(元生物生産学科教授)